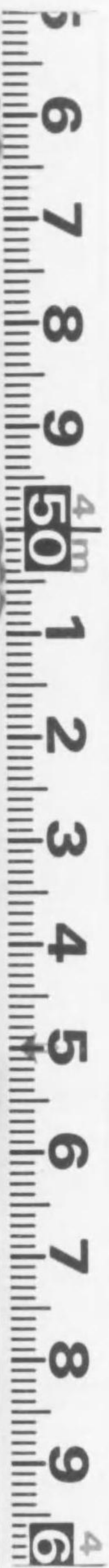


375-42

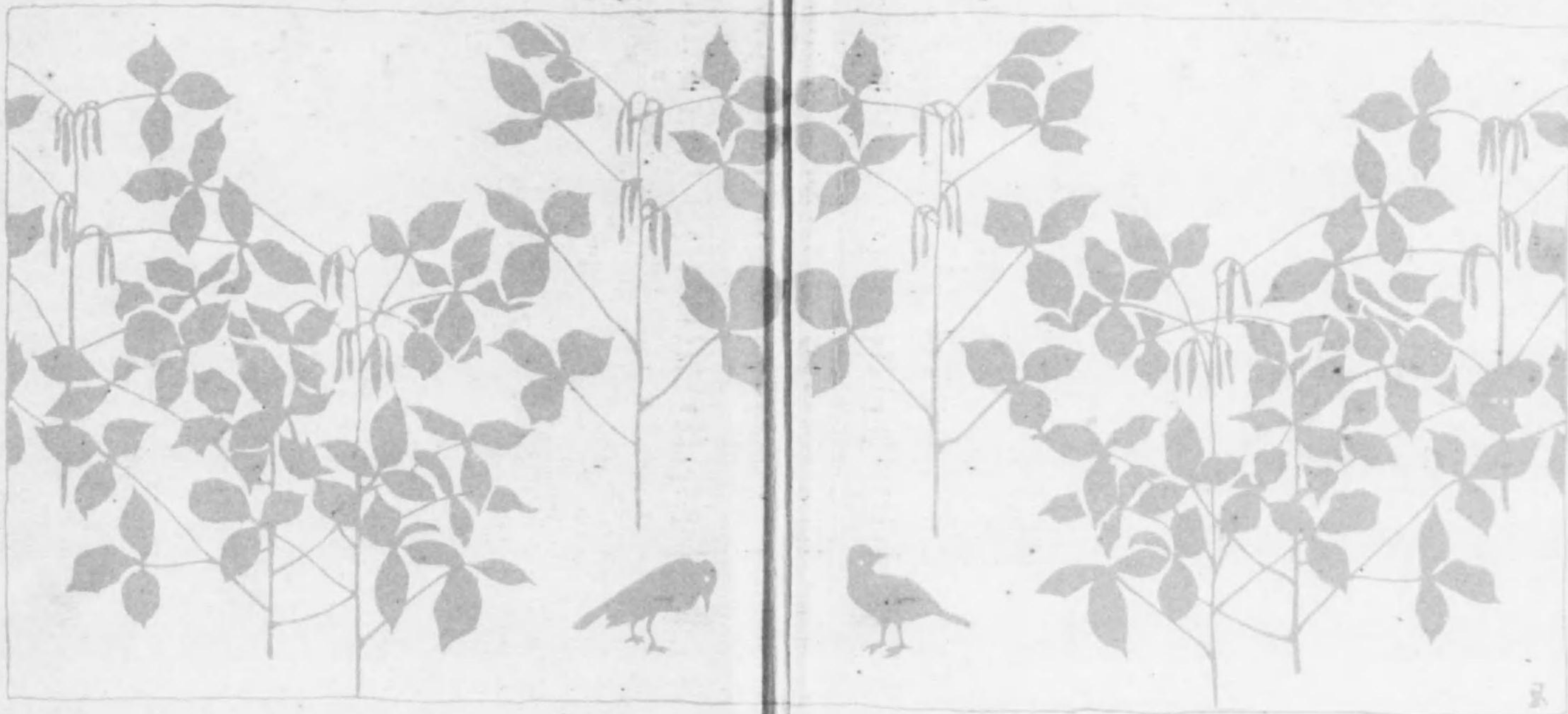


1200501451213



始







記



①孔子の老子子  
評した

~~543-81~~  
375-42

史記第四

目次

卷六十一 伯夷列傳第一……………一

卷六十二 管晏列傳第二……………八

卷六十三 老莊申韓列傳第三……………一六

卷六十四 司馬穰苴列傳第四……………三二

卷六十五 孫子吳起列傳第五……………三七

卷六十六 伍子胥列傳第六……………五三

目次

②  
11頁

卷六十七 仲尼弟子列傳卷七……………七一

卷六十八 商君列傳第八……………一二四

卷六十九 蘇秦列傳第九……………一三三

卷七十 張儀列傳第十……………一八〇

卷七十一 樛里子甘茂列傳第十一……………二三四

卷七十二 穰侯列傳第十二……………二四五

卷七十三 白起王翳列傳第十三……………二五六

卷七十四

一

孟子荀卿列傳第十四……………二七三

卷七十五 孟嘗君列傳第十五……………二八二

卷七十六 平原君及鄒列傳第十六……………二九五

卷七十七 信陵君列傳第十七……………三三七

卷七十八 春申君列傳第十八……………三四四

卷七十九 范雎蔡澤列傳第十九……………三五三

卷八十 樂毅列傳第二十……………三六〇

卷八十一 廉頗閻相如列傳第二十一……………三四四

卷八十二 田單列傳第二十二……………四四八

卷八十三 魯仲連馮陽列傳第二十三……………四五六

卷八十四 屈原賈生列傳第二十四……………四八一

卷八十五 呂不韋列傳第二十五……………五〇三

——(史記第四目次終)——

史記 卷六十一

伯夷列傳第一

夫學者載籍  
博。猶考信  
於六藝。詩書  
雖缺。然虞夏  
之文可知也。  
於虞夏之間  
之問。而後成  
位。典職數十  
年。功用既興。  
然後授政。示  
天下重器。王

夫れ學は載籍極めて博し。猶ほ信を六藝に考ふ。詩書缺けたりと雖も、然も虞夏の文知るべきなり。堯將に位を遷らんとして虞舜に讓る。舜禹の間、岳牧咸く薦む。乃ち之を位に試む。職を典どること數十年。功用既に興りて然る後、政を授く。天下は重器、王者は大統、天下を傳ふること斯くの若く之れ難きを示すなり。而るに説者曰く、堯天下を許由に讓る。許由受けず、之を恥ぢて逃れ隠る。夏の時に及び、下隨・務光といふ者あり。此れ何を以つてか稱せらる。太史公曰く、余箕山に登る。其の上蓋し許由の塚ありと云ふ。孔子古への仁聖賢人、吳の太伯・伯夷の倫の如きを序列すると詳かなり。余聞く所を以てす

者大統。傳二天  
下若斯之難  
也。而說者曰。  
堯讓二天下於  
許由。許由不  
受。恥之逃隱。  
及二夏之時。有  
不爾務光者。  
此何以稱焉。  
太史公曰。余  
登二箕山。其上  
蓋有許由冢。  
云。孔子序三列  
古之仁聖賢  
人。如二吳太伯  
伯夷之倫。詳  
矣。余以所聞。由  
求仁得仁。又何  
怨乎。余悲伯夷  
其傳曰。伯夷

るに由。光の義至つて高し。其の文辭少しも概見せざるは何ぞや。孔子曰く、伯夷  
叔齊、舊惡を念はず、怨み是を用つて希なり、仁を求めて仁を得たり、又何ぞ怨  
みんと。余伯夷の意を悲む。軼詩を睹るに異むべし。

● 書經、書物 ● 六經に同じ六經とは詩經、書經、易經、禮記、春秋、樂記を云ふ。信備の語を六經に上りて考ふ  
● 詩經書經は本來のものより篇數に缺けたる所あり ● 虞舜夏禹時代の文物制度禮法政事等 ● 四岳即ち四  
嶽の諸侯の職を總ぶる官と十二牧即ち十二州の民を治むる官 ● 一時試みに帝王の政務を執り行はしむ ● 字  
は武中、處天下を致して之に讓らんとすと聞き通いて中嶽嶽水の陽夏山の下に隱へ、堯また之を召す、許由聞きて  
潁水の流に耳を洗ふ ● 夏の時魯穆公の人、魯穆公王に天下を讓らんとす、二人共に受けずして逃る ● 司馬遷  
● 周太王の長子、父太王の三男の子昌に河を讓らんと欲するを以て與に赴きし人、故に吳太伯といふ、昌は後の  
文王なり ● 顯、たぐひ ● 許由と務光 ● 詩書に一も文辭の之に關するものを掲げず ● 然語公治長  
篇に出づ、伯夷名は元、字は公併、叔齊名は致、字は公遠、勇齊は魯也 ● 論語述而篇に出づ ● 逸詩、詩  
經に洩れ一載せられざりし詩。即ち伯夷叔齊の采薇の時を見れば伯夷叔齊にも怨むる意ありしやを疑ふと也

其の傳に曰く、伯夷叔齊は孤竹君の二子なり。父叔齊を立てんと欲す。父卒す

叔齊孤竹君  
之二子也。父  
欲立叔齊及  
父卒。叔齊讓  
伯夷。伯夷曰。  
父命也。遂逃  
去。叔齊亦不  
肯立而逃之。  
國人立其中  
子。於是伯夷  
叔齊聞之。西伯  
昌善養老。盡  
往歸焉。及至  
西伯卒。武王  
載木主。號爲  
文王。東伐紂。  
伯夷叔齊叩  
馬而諫曰。父  
死不葬。安及  
干戈。可謂孝

るに及びて、叔齊伯夷に讓る。伯夷曰く、父の命なりと。遂に逃れ去る。叔齊  
も亦た立つことを肯ぜずして之を逃る。國人其の中子を立つ。是に於て伯夷叔  
齊西伯昌の善く老を養ふを聞き、蓋ぞ往いて歸せざると。至るに及び西伯卒  
す。武王木主を載せて號して文王となし、東紂を伐つ。伯夷叔齊馬を叩いて諫  
めて曰く、父死して葬らず、安に干戈に及ぶ、孝と謂ふべきか。臣を以て君を弑  
す、仁と謂ふべきかと。左右之を兵せんと欲す。太公曰く、此れ義人なりと。  
扶けて之を去らしむ。武王已に殷の亂を平け、天下周を宗とす。而して伯夷叔  
齊之を恥ぢ、義、周の粟を食はず、首陽山に隱れ、薇を采つて之を食ふ。餓えて且に  
死せんとするに及び、歌を作る。其の辭に曰く、彼の西山に登り、其の薇を采  
る。暴を以て暴に易ふ。其の非を知らず。神農虞夏忽焉として没す。我れ安くに  
か適歸せんや、于嗟徂かん。命の衰へたるかなと。遂に首陽山に餓死す。此に由  
りて之を觀れば怨むるか、非ずか。

乎。以臣弑君。可謂仁乎。左。右欲兵之。太公曰。此義人也。扶而去之。武王已平殷亂。天下宗周。而伯夷叔齊恥之。義不食周粟。隱於首陽山。采薇而食之。及二歲且死。作歌。其辭曰。登彼西山兮。采其薇矣。以暴易暴。不知其非矣。神農虞夏忽焉沒兮。我安適歸矣。于嗟徂兮。命之衰矣。遂餓死於首陽山。由此觀之。怨耶非耶。

● 西方の諸侯、周の昌。隠して文王といふ ● 往いて之に厄に落ちたりてはなにかと相隣りてゆく ● 西伯昌の子、周の武王、名は發 ● 神主、位牌。父文王の位牌を車に載せて ● 殷の紂王 ● 蕞くも ● 種と牙、戰爭の故 ● 斬り討す、兵刃を以て殺す ● 太公望曰く、首陽山は阿東浦坂嶺山の北、河曲の中に在り ● 首陽山の。周王より給與する知行の米 ● 馬融曰く、首陽山は阿東浦坂嶺山の北、河曲の中に在り ● 武王のなす所の不道なるは殷王の暴行と異なるなく、武王の暴を以て殷紂の暴に易へたるのみにして武王に更にその行の非なるを覺らず ● 昔神農虞夏禹湯の聖王の時代の道は忽然として絶えたり ● 死せん ● この詩の意を以て見ればその怨み感みたる際なきや否や

或曰。天道無親。常與善人。若伯夷叔齊。可謂善人者。非耶。積仁潔行。如此而餓

或ひと曰く、天道親なし、常に善人に與すと。伯夷叔齊の若きは、善人と謂ふべき者が、非か。仁を積み、行を潔くすること此の如くにして餓死す。且つ七十子の徒、仲尼獨り顔淵を薦めて學を好むとなす。然れども回や屢々空しく、糟糠にだに厭かずして、卒に蚤夭す。天の善人に報施すること、其れ何如ぞや。盜跖

死。且七十子之徒。仲尼獨薦顔淵爲好學。然回也屢空。糟糠不厭。而卒蚤夭。天之報施善人。其何如哉。盜跖日殺不辜。肝人之肉。暴戾恣睢。聚黨數千人。橫行天下。竟以壽終。是遵何德哉。此其尤大彰明較著者也。若至近世。操行不軌。專犯忌諱。而終身逸樂富厚。

日々不辜を殺し、人の肉を肝にし、暴戾恣睢、黨を聚むること數千人、天下に横行し、竟に壽を以て終る。是れ何の德に遵へりや。此れ其の尤も大に彰明較著なる者なり。近世に至るが若き、操行不軌専ら忌諱を犯し、而して終身逸樂富厚、累世絶えず、或は地を擇びて之を蹈み、時ありて然る後言を出し、行くに徑に由らず、公正に非ずんば、憤を發せず、而して禍災に遇ふ者、數ふるに勝ふべからざるなり。余甚だ惑へり。儒くは所謂天道是か非か。予曰く、道同じからずんば、相爲めに謀らすと。亦各々其の志に従ふなり。故に曰く、富貴如し求む可くんば執鞭の士と雖も吾亦之を爲さん、如し求む可からずんば、吾が好む所に従はん。歳寒くして然る後に松柏の凋むに後るゝを知ると。世を舉りて混濁して清士乃ち見はる。豈其の重きこと彼の如く其の輕んきと此の如くなるを以てせんや。君子は世を没して名の稱せられざるを疾む。賈子曰く、食夫は財を徇め、烈士は名を徇じ、夸者は權に死し、衆庶は生を馮むと。同明相照し、同類

累世不絕。或擇地而蹈之。時然後出言。行不由徑。非公正不發憤。而遇禍災者。不可勝數也。余甚惑焉。儻所謂天道是耶非耶。子曰。道不同不相爲謀。亦各從其志也。故曰。富貴如可求。雖執鞭之士。吾亦爲之。如不可求。從吾所好。歲寒然後知松柏之後凋。擊世混

相求め、雲は龍に従ひ、風は虎に従ふ。聖人作りて萬物視る。伯夷叔齊賢なりと雖も、夫子を得て、名益々彰る。顔淵篤學なりと雖も、驥尾に附して、行益々顯る。巖穴の士趨舍時あり。此の類の若き、名埋滅して稱せられず。悲しいかな。閭巷の人、行を砥ぎ、名を立てんと欲する者、青雲の士に附くに非ずんば、惡ぞ能く後世に施さんや。

● 老子に出づ。天の道は公平にして人によりて特に親しむといふ事なく常に善人に與して之を助く ● 孔子世家に弟子蓋三千焉、身通六藝者七十有二人 ● 論語雍也篇に賈公問、弟子孰爲好學、孔子對曰、有顔回者好學不遷、不貳過、不幸短命死矣、今也則亡、未聞好學者也 ● 論語先進篇に、子曰、回也其庶乎、無空、而空しは貧にして屋々米糧の空乏するをいふ ● 莊子盜跖篇に出づ。柳下惠の弟といふ ● 罪なき人 ● 賤にして食ふ ● 兇暴惡戾。荒々しく道理にそむきもとること。行を惡にして、怒る視ること ● 例に違ふ處なくして富厚なるは怪しむべしとの意 ● 法現に違はぬこと ● 忌み憚るべき事を犯す、避服すべき事を敢てし犯す ● 君を尊んで仕ふ、暗愚の君には仕へず ● 論語憲問篇に出づ ● 公道大道を歩めて間道や小徑を歩まず、論語雍也篇に照 ● 論語憲問篇に出づ ● 論語子罕篇に出づ。君子の節操ある事は平時には現はれず、時窮するや節操始めて見るべし ● 不義の盜跖等は世に重く、正義の夷齊光由等は世に輕きも、これ固より君子の顯る所に非らずと也。古來論說紛々、姑く諸説を以て酌し加ふるに私見を以てす ●

濁。清士乃見。豈以其重若彼。其輕若此哉。君子疾之。世而不稱焉。賈子曰。貪夫徇財。烈士徇名。夸者死權。衆庶馮生。同明相照。同類相求。雲從龍。風從虎。聖人作而萬物覩。伯夷叔齊雖賢。得夫子而名益彰。顔淵雖爲學。附驥尾而行益顯。巖穴之士。趨舍有時。若此類。名埋滅而不稱。悲夫。閭巷之人。欲砥行立名者。非附青雲之士。惡能施于後世哉。

論語憲問篇に出づ ● 賈誼 ● 鳥獸辭に出づ。玉と玉と明堂なるものを並べ置けば相照映す ● 聖人世に出でて萬物の情見るべく、高潔の士始めて其特色を發揮すべしと也 ● 若驥驥の尾に附きて千里を致す如く、偉人の後に従ひて志を伸ぶるを云ふ ● 巖穴に住む隱士 ● 出でて仕ふると停まりて休ふと ● 埋もれ消ゆ、消え失す ● 言を立て後世に傳ふる士、高潔の徳を顯し世に聲名ある士、即ち孔子の如き大人物をいふ

世而不稱焉。賈子曰。貪夫徇財。烈士徇名。夸者死權。衆庶馮生。同明相照。同類相求。雲從龍。風從虎。聖人作而萬物覩。伯夷叔齊雖賢。得夫子而名益彰。顔淵雖爲學。附驥尾而行益顯。巖穴之士。趨舍有時。若此類。名埋滅而不稱。悲夫。閭巷之人。欲砥行立名者。非附青雲之士。惡能施于後世哉。



卷六十一

管晏列傳第二

管仲夷吾者。穎上人也。少時常與鮑叔牙游。鮑叔知其賢。管仲貧困。常欺鮑叔。鮑叔終善遇之。不以爲言。已而鮑叔事齊公子小白。管仲事公子糾。及小白立爲桓公。公子糾死。管仲囚

管仲夷吾は穎上の人なり。少時常に鮑叔牙と遊ぶ。鮑叔其の賢なるを知る。管仲貧困にして常に鮑叔を欺く。鮑叔終に善く之を遇して以て言をなさず。已にして鮑叔齊の公子小白に事ふ。管仲公子糾に事ふ。小白立ちて桓公となるに及び、公子糾死し、管仲囚はる。鮑叔遂に管仲を進む。管仲既に用ひられて、政に齊に任ず。齊の桓公以て霸たり。諸侯を九合し、天下を一匡せしは管仲の謀なり。管仲曰く、吾れ始め困みし時、嘗て鮑叔と賈し、財利を分つに多く自ら與へたり。鮑叔我を以て貧となさず。我が貧しきを知ればなり。吾れ嘗て鮑叔と事を謀りて、更に窮困せり。鮑叔我を以て愚となさず、時に利と不利とあるを知ればなり。吾れ嘗て三たび仕へて、三たび君に逐はれたり。鮑

焉。鮑叔遂進管仲。管仲既用。任政於齊。齊桓公以霸。九合諸侯。一匡天下。管仲之謀也。管仲曰。吾始困時。嘗與鮑叔賈。分財利。多自與。鮑叔不以我爲貪。知我貧也。吾嘗爲鮑叔謀事。而更窮困。鮑叔不以我爲愚。知三時有利不利也。吾嘗三仕三見逐於君。鮑叔不以我爲不肖。知我不遭時也。吾嘗三戰三走。鮑叔不以我爲怯。知我有老母也。公子糾敗。召忽死之。吾幽囚受辱。鮑叔不以我爲無恥。知我不羞小節。而恥甲功名不顯於天下也。生我者父母。知我者鮑子也。鮑叔既進管仲。以身下之。子孫世祿於齊。有封邑者十餘世。常爲名大夫。天下不多管仲之賢。而多鮑叔能知人也。

叔我を以て不肖となさず。我が時に遭はざるを知ればなり。吾嘗て三たび戦ひて三たび走りき。鮑叔我を以て怯となさず。我に老母有るを知ればなり。公子糾敗れ召忽之に死す。吾幽囚せられて辱を受けたり。鮑叔我を以て恥無しとなさず。我が小節を羞ぢずして功名の天下に顯れざるを恥づるを知ればなり。我を生む者は父母なり、我を知る者は鮑子なりと。鮑叔既に管仲を進め、身を以て之に下る。子孫世々齊に祿せられ、封邑を有つ者十餘世、常に名大夫たり。天下管仲の賢を多とせずして、鮑叔の能く人を知るを多とす。

● 姓名 ● 糾合、聚め合す、一説九合は會盟の數九回なりと ● 一つにして正す、匡正す ● 天に似ず聖賢に似ざる義にして愚なるをいふ ● 公子糾の傳

管仲既任政相齊。以區區之齊。在海濱。通貨積財。富國彊兵。與俗同好惡。故其稱曰倉廩實而知禮節。衣食足而知榮辱。上服度則六親固。四維不張。國乃滅亡。下令如流。水之原。令順民心。故論卑而易行。俗之所欲。因而予之。俗之所否。因而去之。其爲政也。善因。

管仲既に政に任じて齊に相たり。區區の齊を以て海濱に在りて、貨を通じ財を積み、國を富まし、兵を彊くし、俗と好惡を同じうす。故に其れ稱して曰く、倉廩實ちて禮節を知り、衣食足りて榮辱を知る。上の服度あれば則ち六親固し、四維張らずんば國乃ち滅亡す、令を下すこと流水の原の如し。民の心に順はしむ。故に論卑うして行ひ易し。俗の欲する所は因つて之を予へ、俗の否む所は因つて之を去る。其の政を爲すや、善く禍に因つて福となし、敗を轉じて功となす。輕重を貴び、權衡を慎しむと。桓公實は少姫を怒りて南のかた蔡を襲ふ。管仲因つて楚を伐て包茅の周室に入貢せざるを責む。桓公實は北のかた山戎を征す。管仲因つて燕をして召公の政を修めしめ、柯の會に於て桓公漕沫の約に背かんと欲す。管仲因つて之を信にす。諸侯是に由つて齊に歸す。故に曰く、與ふるの取るたるを知るは、政の實也と。管仲富公室に擬す。三歸反坫あり。齊人以て侈ると爲さず。管仲卒す。齊國其の政に遵ひて常に諸侯より彊し。

後百餘年にして晏子あり。

● 穀穀と蔵むるを倉といひ、米を蔵むるを廩といふ ● 上の醫師副展に叶ひ政令其度を夫にざれば六親固なり  
● 禮節と權衡 ● 源 ● 卑近にして高尚ならず ● 事物の輕きと重きとの區別を明かにして謙少貴び  
● 權衡を以てして之を失はざることを慎しむ ● 桓公夫人と舟に乗る、夫人舟を濫かす、桓公怒りて蔡に歸らしむ、未だ始を絶たざるに蔡は之を他に嫁せしむ、桓公怒りて師を興して蔡を伐つ ● 包は裏包なり、茅は菅茅なり。周天子の祭祀に用ふ菅茅を包みて楚より貢するなり ● 北狄の一 ● 三豎より女を娶ること、歸は嫁。諸侯のなす所 ● 諸侯相會飲する時獻酬する爵を反し置く禮、亦諸侯の禮なり

禍而爲福。轉敗而爲功。貴輕重。慎權衡。桓公實怒少姫。南襲蔡。管仲因而伐楚。責包茅不入。貢於周室。桓公實北征。山戎。而管仲因而令燕。修召公之政。於柯之會。桓公欲背曹沫之約。管仲因而信之。諸侯由是歸齊。故曰。知與之爲取。政之實也。管仲富擬於公室。有三歸反坫。齊人不以爲侈。管仲卒。齊國遵其政。常彊於諸侯。後百餘年。而有晏子焉。

晏平仲嬰者。萊之夷維人也。事齊靈公。莊公。景公。以二節儉力行。重二於齊。既相齊。

晏平仲嬰は萊の夷維の人なり。齊の靈公・莊公・景公に事ふ。節儉力行を以て齊に重ぜらる。既に齊に相として、食肉を重ねず、妾帛を衣ず。其の朝に在るや、君の語之に及べば即ち言を危しうくす。語之に及ばざれば、即ち行を危しうす。國道有れば即ち命に順ひ、道無ければ即ち命を衡る。此を以て三世名を諸侯に顯は

食不重肉。妾不衣帛。其在朝。君語及之。即危言。結不及之。即危行。國有道。即順命。無道。即衛命。以此三世顯名於諸侯。越石父賢在縲繼中。晏子出遭之。塗解左騶。弗謝入。闔久之。越石父請絕。晏子懼然。攝衣冠。謝曰。嬰雖不仁。免子於厄。何子求絕之速。

す。越石父賢にして縲繼の中にあり。晏子出でて之に塗に遭ふ。左騶を解いて之を贖ひ載せて歸る。謝せずして闔に入る。之を久しうして越石父絶たんことを請ふ。晏子懼然として衣冠を攝けて謝して曰く、嬰不仁と雖も子を厄より免れしむ。何ぞ子の絶たんことを求むるの速かなると。石父曰く、然らず。吾聞く、君子は己を知らざるに謙して、己を知る者に信ぶと。我れ縲繼中にあるに方つては彼我を知らざるなり。夫子既に以て感寤して我を贖ふは、是れ己を知るなり。己を知りて禮なきは、固に縲繼の中に在るに如かずと。晏子は於て延き入れて上客となす。晏子齊の相となりて出づ。其の御の妻門間より其の夫を闚ふ。其の夫相の御となり、太蓋を擁し騶馬に策ちて意氣揚揚として甚だ自得せり。既にして歸る。其の妻去らんことを請ふ。夫其の故を問ふ。妻曰く、晏子は長六尺に満たず、身齊國に相として名諸侯に顯はる。今妾其の出づるを觀るに志念深し。常に以て自ら下る者あり。今子長八尺、乃ち人の僕御となり、然して子

也。石父曰。不然而。吾聞君子誦於不知己。而信於知己者。方吾在縲繼中。彼不知我也。夫子既以感寤而贖。我是知己。知己而無禮。固不如在縲繼之中。晏子於是延入爲上客。晏子爲齊相。出。其御之妻。從門間。而闚其夫。夫爲相。御擁大蓋。策騶馬。意氣揚揚。甚自得也。既而歸。其妻請去。夫問其故。妻曰。晏子長不滿六尺。身相齊國。名顯諸侯。今者妾親其出。志念深矣。常有以自下者。今子長八尺。乃爲人僕御。然子之意。自以爲足。妾是以求去也。其後夫自抑損。晏子怪而問之。御以實對。晏子薦以爲大夫。

太史公曰。吾讀管子牧民。山高乘馬輕

太史公曰く、吾れ管子の牧民・山高・乘馬・輕重九府及び晏子春秋を讀む。詳かなる哉。其の之を言ふや。既に其の著書を見たり。其の行事を觀んと欲す。故に

の意自ら以て足れりとなす。妾是を以て去らんとを求むるなりと。其の後夫自ら抑損す。晏子怪みて之を問ふ。御實を以て對ふ。晏子薦めて以て大夫となす。

● 危言は正言なり。言を正しくして對へいふ。一説、アヤフクスと訓じ危ぶみ護むと解す。● 行を正しうす。史記正義には、君己を知らざれば業行を増進して實の及ばんことを畏ると解す。● 縲は黒索、絶は繋ぐの義。古へ御人を繋ぐに黒索を以てせり。● 古騶馬の制にて、馬車の左方の車側に對せる馬。● 驚くさま。● 屈す。己を知らざる人即ち知己なぬ人が屈辱を與ふる時は之を忍ぶ。● 申ぶ、伸ぶ。己を知る人、わが器量を知る人に對しては遠慮せず。● 御者。● 大なるきぬがさ。● 謙退以下す。

重九府及晏子春秋詳哉。其言之也。既見其著書。欲觀其行事。故次其傳。至其書。世多有之。是以不論。論其軼事。管仲世所謂賢臣。然孔子小之。豈以爲周道衰微。桓公既賢。而不勉之。至王。乃稱霸哉。語曰。將順其美。匡救其惡。故上下能相親也。豈管仲之謂乎。方下

其傳を次す。其の書に至りては世多くこれあり、是を以て論ぜず。其の軼事を論ず。管仲は世の所謂賢臣なり。然れども孔子之を小とす。豈以て周道衰微し、桓公既に賢にして、之を勉めて王に至らしめずして、乃ち霸を稱するが爲ならんか。語に曰く、其の美を將順し、其の惡を匡救す。故に上下能く相親しむなりとは、豈管仲の謂か。晏子莊公の尸に伏し、之を哭して禮を成して然る後去るに方りて、豈所謂義を見て爲さざる、勇無き者か。其の諫説して君の顔を犯すに至りては、此れ所謂進んでは忠を盡さんことを思ひ、退いては過を補はんことを思ふ者か。假令晏子をしてあらしめば、余之が爲めに鞭を執ると雖も忻慕する所なり。

● 管仲の著書す、牧民以下は管子の篇の名 ● 晏平仲の著書 ● 逸事 ● 孔子管仲の節量を小とす、論語八佾篇參照 ● 桓公の賢明なるに管仲之を輔けて王道を行はしめず、徒に覇道を行はしむるのみ ● 古語。孝經に出づ。將順は順がひ行ふ ● 齊の大夫崔杼莊公を弑す、晏子莊公の尸に伏し、哭泣して去る ● 論語爲政篇に出づ ● 直言諫めて君の怒りに觸るゝを憚らず ● 論語述而篇の字面により轉用して前文の晏子御を受け、て余は僕隷たるをも甘んじ、彼に事へんと云へるなり

晏子伏莊公尸。哭之成禮。然後去。豈所謂見義不爲無勇者邪。至其諫説犯君之顔。此所謂進思盡忠。退思補過者哉。假令晏子而在。余雖爲之執鞭。所忻慕焉。

卷六十三

老莊申韓列傳第三

老子者。楚苦縣厲鄉曲仁里人也。姓李氏。名耳。字伯陽。諡曰聃。周守藏室之史也。孔子適周。將問禮於老子。老子曰。子所言者。其人與骨皆已朽矣。獨其言在耳。且君子得其時則駕。不

老子は楚の苦縣厲鄉曲仁里の人なり。姓は李氏、名は耳、字は伯陽、諡して聃といふ。周の守藏室の史なり。孔子周に適いて將に禮を老子に問はんとす。老子曰く、子の言ふ所は其れ人と骨と皆已に朽ちたり。獨其の言在るのみ。且つ君子其の時を得れば則ち駕す、其の時を得ざれば則ち蓬累して行る。吾之を聞く、良賈は深く藏めて虚しきが如く、君子は盛德にして容貌愚なるが若し。子の驕氣と多欲と、慝色と淫志とを去れ、是れ皆子の身に益なし。吾が以て子に告ぐる所は是の如きのみと。孔子去つて弟子に謂ひて曰く、鳥は吾其の能く飛ぶを知る。魚は吾其の能く遊ぶを知る。獸は吾其の能く走るを知る。走る者は以て罔をなすべし。遊ぶ者は以て綸をなすべし。飛ぶ者は以て罾をなすべし。龍に至

得其時則蓬累而行。吾聞之。良賈深藏若虛。君子盛德容貌若愚。去子之驕氣與多欲。慝色與淫志。是皆無益於子之身。吾所以告子。若是而已。孔子去。謂弟子曰。鳥吾知其能飛。魚吾知其能游。獸吾知其能走。走者可以爲罔。游者可以爲綸。飛者可以爲罾。至於

ては吾其の風雲に乗じて天に上るを知る能はず。吾今日老子を見るに其れ猶ほ龍のごときかと。老子道徳を修む。其の學自ら隠れて名無きを以て務となす。周に居ること之を久しうして、周の衰ふるを見て迺ち遂に去つて關に至る。關の令尹喜曰く、子將に隠れんとす。彌ひて我が爲めに書を著せと。是に於て老子迺ち書上下篇を著し、道徳の意を言ふこと五千餘言にして去る。其の終る所を知るものなし。或ひは曰く、老萊子も亦楚人なり。書十五篇を著し、道家の用を言ふ。孔子と時を同じうすと云ふ。蓋し老子は百有六十餘歳ならん。或は言はく二百餘歳と。其の道を修めて壽を養ふを以てなり。孔子死してより後百二十九年にして史記に周の太史儋、秦の馮公に見えて曰く、始め秦周と合して離る。離れて五百歳にして復た合す。合して七十歳にして霸王たる者出でんと。或は曰く、儋は即ち老子なりと、或は曰く、非なりと。世其の然るや否やを知るものなし。老子は隱君子なり。老子の子、名は宗。宗、魏の將となり、段干に封ぜ

龍吾不能知  
其乘風雲而  
上天吾今日  
見老子其猶  
龍邪老子修  
道德其學以  
自隱無名爲  
務居周久之  
見周之衰適  
遂去至關關  
令尹喜曰子  
將隱矣適爲  
我著書於是  
老子適著書

上下篇言道德之意五千餘言而去莫知其終或曰老萊子亦楚人也著書十五篇言道家之用與孔子同時云蓋老子百有六十餘歲或言二百餘歲以其修道而養壽也自孔子死之後百二十九年而史記周太史儋見秦獻公曰始秦與周合而離離五百歲而復合合七十歲而霸王出焉或曰儋即老子或曰非也世莫知其然否老子隱君子也老子之子名宗宗爲魏將封於段干宗子注子宮宮玄孫假假仕於漢孝文帝而假之子解爲膠西王卬太傅因家于齊焉世之學老子者則緇儒學儒學亦緇老子道不同不

相爲謀豈謂是邪李耳無爲自化清靜自正

らる。宗の子は注。注の子は宮。宮の玄孫は假。假、漢の孝文帝に仕ふ。而して假の子解、膠西王卬の太傅となり、因りて齊に家す。世の老子を學ぶ者は則ち儒學を緇く。儒學も亦老子を緇く。道同じからずん相爲めに謀らすとはば、豈是を謂ふか。李耳無爲にして自ら化し清靜自ら正し。

● 天子の政務を管理する役 ● 孔子の所謂禮儀を定めし古聖人もその骨も皆已に朽ちたり ● 馬車に關して道を行ふ ● 沙原の強風に吹かれて皆轉じゆく ● 果は轉行の貌 ● 良き商人。買はるべき物。店舖を有し。物を賣るを買といひ、出で行きて賣るを商といふ。良買は貨物を藏にをさめかくして店には何もなきが如くす ● 釣糸を以て釣る ● 弋矢。細索のつきたる矢、以て高く飛ぶ鳥を射るべし ● 散圓。一に隔谷圓 ● 輪語衛。公孫龍に出づ。無間の道互に異なれば相互に離らず ● 此れ都べて老子の教を問ふなり。道爲する所なく自然の儘にして自ら化し、清淨静めずして民自ら正に歸す

莊子者。蒙人也。名周。周嘗爲蒙漆園吏。與梁惠王齊宣王同時。其學無所不闢。然其要本歸於老子之言。故其著書十餘萬言。大抵率寓言也。作漁父盜跖法。以詆訾孔子之徒。以明老子之術。畏。果虛亢。桑子之屬。皆空語。

莊子は蒙の人なり。名は周。周嘗て蒙の漆園の吏となる。梁の惠王齊の宣王と時を同じうす。其の學闢はざる所なし。然れども其の要は老子の言に本づき歸す。故に其の著書十餘萬言大抵率ね寓言なり。漁父・盜跖・法法を作りて以て孔子の徒を詆訾し、以て老子の術を明かにす。畏果・虛亢・桑子の屬は皆空語にして事實なし。然かも善く書を屬し、辭を離け、事を指し、情を類し、用て儒墨を剽剝す。當世の宿學と雖も自ら解免すること能はざるなり。其の言洗洋自恣にして以て己に適す。故に王公大人より能く之を器とせず。楚の威王莊周の賢を聞き、使をして幣を厚うして之を迎へしめ、許すに相となさんことを以てす。莊周笑ひて楚の使者に謂ひて曰く、千金は重利、卿相は尊位なり。子獨り郊祭の犧牛を見ずや、之を養食すること數歳、衣するに文繡を以てし以て太廟に

無事實。然善  
屬書離辭。指  
事類情。用割  
制備墨。雖富  
世宿學。不能  
自解免也。其  
言洗洋。自恣  
以適己。故自  
王公大人。不  
能器之。楚威王  
聞莊周賢。使  
厚幣迎之。許  
以爲相。莊周  
笑謂楚使者  
曰。千金重利。  
卿相尊位也。  
子獨不見郊  
祭之犧牛乎。  
養食之數歲。  
衣以文繡。以  
入太廟。當是  
之時。雖欲爲  
孤豚。豈可得  
乎。子亟去。無  
汚我。我寧游  
戲污瀆之中。  
自快。無爲有  
國者所羈。終  
身不仕。以快  
吾志焉。

入る。是の時に當り 孤豚たらんと欲すと雖も豈得べけんや。子亟かに去れ。  
我を汚すなかれ。我れ寧ろ汚瀆の中に游戲し、自ら快くせん。國を有つものに  
羈せらるゝなく、終身仕へず以て吾が志を快くせん。

- 突厥 ① 寓は託なり、寄なり。事に假託して言を説くをいふ
- 莊子の縑の名 ② 縑をちばき立てて
- 收聖する ③ 廣大なる貌
- 器量ありとして用ふる能はず
- 郊原にて天を祭る祭祀
- 牲に用ふる毛包
- の純なる牛
- 養飼
- 汚瀆の小渠
- 羈、絆を以て縛し留むるなり

申不害者。京  
人也。故鄭之  
賤臣。學術以  
于韓昭侯。昭  
侯用爲相。內

申不害は京の人なり。故鄭の賤臣なり。術を學びて以て韓の昭侯に于む。昭  
侯用ひて相となす。內政教を修め、外諸侯に應ずること十五年、申子の身を終ふ  
るまで國治まり兵彊く、韓を侵す者なし。申子の學は黃老に本づきて刑名を主

修政教。外應  
諸侯。十五年。  
終申子之身。  
國治兵彊。無  
侵韓者。申子  
之學。本於黃老。而主刑名。著書二篇。號曰申子。

とす、書二篇を著はす。號して申子と曰ふ。

- 刑名法術 ① 用ひられんことを求む
- 黃帝の道老子の教
- 形名の義、法學の一にして刑名法術と通
- 西す、其の名實の一致を求めて名實の反する者は強も假借するをなき也

韓非者。韓之  
諸公子也。喜  
刑名法術之  
學。而其歸本  
於黃老。非爲  
人口吃。不能  
道說。而善著  
書。與李斯俱  
事荀卿。斯自  
以爲不如非。  
非見韓之制  
弱。數以書諫

韓非は韓の諸公子なり。刑名法術の學を喜みて其の歸黃老に本づく。非、人  
となり口吃して道說する能はず。而して善く書を著はす。李斯と俱に荀卿に仕  
ふ。斯自ら以て非に如かずとせり。非、韓の削弱せらるゝを見て數々書を以て韓  
王を諫む。韓王用ふる能はず。是に於て韓非國を治むるに其の法制を修明して、  
勢を執つて以て其の臣下を御し、國を富まし、兵を彊くして、而して以て人を  
求め賢に任ずるを務めず、反つて浮淫の蠹を擧げて而して之を功實の上に加ふる  
を疾む。以て儒者は文を用て法を亂り、俠者は武を以て禁を犯す、寛なれば則ち

韓王。韓王不  
能。用。於。是。韓  
非。疾。治。國。不  
務。修。明。其。法  
制。執。勢。以。御  
其。臣。下。富。國  
彊。兵。而。以。求  
人。任。賢。反。舉  
浮。淫。之。蠹。而  
加。之。於。功。實  
之。上。以。爲。儒  
者。用。文。亂。法。  
而。俠。者。以。武  
犯。禁。寬。則。寵  
名。譽。之。人。急  
則。用。介。胃。之  
士。今。者。所。養  
非。所。用。所。用  
非。所。養。悲。廉  
直。不。容。於。邪

名譽の人を寵し、急なれば則ち介胃の士を用ふ、今養ふ所は用ふる所に非ず、用ふる所は養ふ所に非ずと爲す。廉直の邪枉の臣に容れられざるを悲しみ、往者得失の變を觀る。故に孤憤・五蠹・内外儲・說林・說難十餘萬言を作る。然して韓非の難きを知り、說難の書を爲りて甚だ具はる。終に秦に死して自ら脱する能はず。說難に曰く、凡そ說の難きは吾之を知りて以て之を説くあるの難きに非ざるなり。又吾が辯ずるの難きは能く吾が意を明かにするの難きに非ざるなり。又吾が敢て横失して能く盡くすの難きに非ざるなり。凡そ說の難きは説く所の心を知つて吾が説を以て之に當つべきにあり。説く所名高を爲すに出づる者なるに、而も之に説くに厚利を以てすれば、則ち下節として卑賤に遇せられ、必ず棄遠せられん。説く所厚利に出づる者なるに、而も之に説くに名高を以てすれば則ち無心を見はして事情に遠しとして必ず收められざらん。説く所實は厚利をなして顯には名高をなす者なるに、而かも之に説くに名高を以てすれば、則ち陽に其の身

枉之臣。觀二往  
者得失之變。  
故作孤憤五  
蠹内外儲說  
林說難十餘  
萬言。然韓非  
知二說之難。爲二

を收めて實は之を疏んず。若し之に説くに厚利を以てすれば、則ち陰かに其の言を用ひて顯はに其の身を棄つ。此を之れ知らざるべからず。

● 法學の一。前出刑名の條を見よ ● 言說 ● 浮薄淫靡の徒。當に木中に在りて木を食ふ虫、小人其の國に在りて國を害するに喩ふ ● 既往の世舉人事の變化に利害消長あるを顯る ● 韓非子の篇名 ● 横佚、横逸、一説に、失は疑なり、錯なり。横失は縱横の義と ● 節操の巧なること ● 時世の事變情實

說難書甚具。終死於秦。不能自脫。難曰。凡說之難。非下吾知之有以說之難也。又非下吾辯之難。能明吾意之難也。又非吾敢橫失能盡之難也。凡說之難。在下知所說之心。可也以吾說。當之。所說出於爲三名高者也。而說之以二厚利。則見下節而遇卑賤。必棄遠矣。所說出於厚利者也。而說之以二名高。則見無心而遠事情。必不收矣。所說實爲二厚利。而顯爲二名高者也。而說之以二名高。則陽收其身而實疏之。若說之以二厚利。則陰用其言而顯棄其身。此之不可不知也。

夫事以密成。  
語以泄敗。未  
必其身泄之  
也。而語及其  
所匿之事。如

夫れ事は密を以て成り、語は泄すを以て敗る。未だ必ずしも其の身を泄すにあらずして、語其の匿す所の事に及ぶ。是の如き者は身危し。貴人過端ありて說者明かに善議を言ひて以て其の惡を推す者は則ち身危し。周澤未だ渥からずして



是者身危。貴人有過端。而說者明言。善者則推其惡。周澤未渥也。而語極知。說行而有功。則德亡。說不行。而有敗。則見疑。如是者。身危。夫貴人得計。而欲自以為功。說者與知焉。則身危。彼顯有所以出。事。則自以為也。故說者與知焉。則身危。遷之以其所必

語極めて知、説行はれて功あれば、則ち徳亡く、説行はれずして敗あれば、則ち疑はる。是の如き者は身危し。夫れ貴人計を得て自ら以て功をなさんと欲するに、説者與り知れば則ち身危し。彼顯に出す所の事あり、廻ち自ら以て爲にするなり。故に説者與り知れば則ち身危し。之を強ふるに其の必ず爲さざる所を以てし、之を止むるに其の已む能はざる所を以てする者は身危し。故に曰く、之と大人を論ずれば則ち以て己を問すとなし、之と細人を論ずれば則ち以て權を擧ぐとなす。其の愛する所を論ずれば則ち以て資を借るとなし、其の憎む所を論ずれば則ち以て己を嘗むとなす。徑ちに其の辭を省けば則ち不知とし、之を屈す。汎濫にして博文なれば則ち多として之を久しうす。事に順うて意を陳ぶれば則ち怯懦にして盡さずと曰ひ、事を慮ること廣肆なれば則ち草野にして倨侮なりと曰ふ。此れ説の難き知らざる可からざるなり。凡そ説の務め、説く所の敬する所を飾りて、其の醜む所を減すを知るに在り。彼れ自ら其の計

不爲。止之。以其所不能。已者身危。故曰。與之論大人。則以爲問己。則以爲細人。論其所愛。則以爲借資。論其所憎。則以爲嘗己。徑省其辭。則不知而風之。汎濫博文。則多而久之。順事陳意。則曰法。憚而不盡。慮事廣肆。則曰草野。而倨侮。此説之難。不可不知也。凡説之務。在知飾所説之所敬。而減其所醜。彼自知其計。則無以

を知とすれば則ち其の失を以て之を窮むることなく、自ら其の斷を勇とすれば、則ち其の敵を以て之を怒らすなく、自ら其の力を多とすれば、則ち其の難きを以て之を概するなし。異事を規りて與に計を同じうし、異人を譽めて與に行を同じうする者は、則ち以て之を飾りて傷るなきなり。與に失を同じうする有る者は、則ち明に其の失無きを飾るなり。大忠は拂辭する所なし、悟言は撃排する所無し、廻ち後その辯知を申ぬ。此れ親近して疑はれざる所以、盡くすを知るの難きなり。曠日彌久を得て周澤既に渥し。深く計つて疑はれず、交々争うて罪せられず、廻ち明に利害を計つて以て其の功を致す、直に是非を指して以て其の身を飾る。此を以て相持するは此れ説の成れるなり。

- 人主と説者との恩澤周く温からず
- 公卿大夫
- 非議す
- 小人、人民
- 放肆にして輪東なきなり
- 草野の野人
- 韓非子には大形無三辨言無所擊排に作る
- 悟は忤也、言にさからふの言を爲さんとするには先づ週禮にして撃排せずとの意か

失一窮之。自勇其斷。則無以敵怒之。自多其力。則無以難概之。規異事。與同計。譽異入。與同行者。則以飾之。無傷也。有與同失者。則明飾其無失也。大忠無所拂辭。悟言無所擊排。迺後申其辯。知其辯。知所親近。不疑。知盡之難也。得曠日彌久。而周澤既溥。深計而不疑。文爭而不罪。適明計利害。以致其功。血指是非。以飾其身。以此相持。此說之成也。

伊尹爲庖。百里奚爲虜。皆所由干其上。也。故此二子者。皆聖人也。猶不能無役。身而涉世。如此其汗也。則非能仕之所設也。宋有富人。天雨牆壞。其子曰。不築且。有盜。其隣人之父亦云。暮而果大亡。

伊尹は庖となり、百里奚は虜となる。皆な由つて其の上を干す所なり。故に此二子は皆な聖人なれども、猶ほ身を役して世を渉る無き能はず、此の如く其れ汗れたるや、則ち能仕の設くる所に非ざるなり。宋に富人あり。天雨り、墻壞る。其の子曰く、築かすんば且に盜あらんとすと。其の隣人の父も亦云ふ。暮にして果して大に其の財を亡ふ。其の家甚だ其の子を知として隣人の父を疑ふ。昔者鄭の武公胡を伐たんと欲し、迺ち其の子を以て之に妻はし、因つて羣臣に問うて曰く、吾れ兵を用ひんと欲す、誰か伐つ可き者ぞと。關其思曰く、胡伐つ可しと。迺ち關其思を戮して曰く、胡は兄弟の國なり。子之を伐てと言ふ、何ぞやと。胡君之を聞き鄭を以て己に親しむとなして、鄭に備へず。鄭人胡を襲ひて之を取る。

其財。其家甚。知其子。而疑隣人之父。昔者鄭武公欲伐胡。迺以其子妻之。因問羣臣曰。吾欲用兵。誰可伐者。關其思曰。胡可伐。迺戮關其思。曰。胡兄弟之國也。子言伐之。何也。胡君聞之。以鄭爲親己。而不備鄭。鄭人襲胡。取之。此二說者。其知皆當矣。然面甚者爲戮。

此の二説は其の知皆當れり。然り而して甚しき者は戮となり、薄き者は疑はる。知の難きに非ず、知に處するは則ち難し。昔者彌子瑕衛の君に愛せらる。衛國の法、竊に君の車に駕する者は罪刑に至る。既にして彌子の母病む。人聞き、往きて夜之を告ぐ。彌子矯りて君の車に駕して出づ。君之を聞きて、之を賢として曰く、孝なるかな、母の爲の故にして刑罪を犯すと。君と果園に遊ぶ。彌子桃を食うて甘し。盡さずして君に奉る。君曰く、我を愛するかな、其の口を忘れて我を念ふと。彌子色衰へて愛弛み、罪を君に得るに及び、君曰く、是れ嘗て矯りて吾が車に駕し、又嘗て我に食はすに其の餘桃を以てすと。故に彌子の行ひ未だ初めに變ぜざるなり、前に賢とせられて、後に罪を獲るは、愛憎の至變なればなり。故に主に愛せらるゝあれば、則ち知當りて親を加へ、主に憎まれるれば、則ち罪當りて疏を加ふ。故に諫説の士は愛憎の主を察して後ち之に説かざるべからず。夫れ龍の蟲たるや、擾狎して騎るべきなり。然るに其の喉下に逆鱗の徑

薄者見疑。非知之難也。處知則難矣。昔者彌子瑕見愛於衛君。衛國之法。竊駕君車者罪至。則既而彌子之母病。人聞往夜告之。彌子矯駕君車而出。君聞之。而賢之。曰。孝哉。爲母之故而犯則罪。與君游。果園。彌子食桃而甘。不盡而奉君。君曰。愛我哉。忘其口而念我。及彌子色衰而愛弛。得罪於君。君曰。是嘗矯駕吾車。又嘗食我以其餘桃。故彌子之行。未變於初也。前見賢而後獲罪者。愛憎之至變也。故有愛於主。則知當而加親。見憎於主。則罪當而加疏。故諫說之士。不可不察愛憎之主。而後說之矣。夫龍之爲蟲也。可擾狎而騎也。然其喉下有逆鱗。徑尺。人有嬰之。則必殺。人。人主亦有逆鱗。說之者。能無嬰人主之逆鱗。則幾矣。

尺なるものあり、人之に嬰るゝあれば、則ち必ず人を殺す。人主も亦逆鱗あり、之に説く者、能く人主の逆鱗に嬰るゝなければ則ち幾し。

●料理人 ●千は求む。庭たり庭たるに由りて上に仕へんことを求む ●能仕之所設也を韓非子に能士之所私に作る ●罪人々刑し殺す ●五刑の一、足の筋を斷つ刑 ●陳ぜらる ●謂の領下に逆に生えたる鱗、之に觸るれば謂大に怒る、君主を誦に比してその怒りをいふ

人或傳其書。至秦。秦王見之。孤憤五蠹之書。曰。嗟乎。寡人得見此人。

人或は其の書を傳へて秦に至る。秦王孤憤五蠹の書を見て曰く、嗟乎寡人此人を見て之と遊ぶを得ば死すとも恨みじと。李斯曰く、此れ韓非が著す所の書なりと。秦因つて急に韓を攻む。韓王始め非を用ひず、急に及びて迺ち非を遣して

與之游。死。不恨矣。李斯曰。此韓非之所著書也。秦因急攻韓。韓王始不用非。及急遣遣非使秦。秦王悅之。未信用。李斯姚賈害之。毀之。曰。韓非韓之諸公子也。今王欲并諸侯。非終爲韓不爲秦。此人之情也。今王不用。久留而歸之。此自遺患也。不如以過法誅之。秦王以爲然。下吏治非。李斯使三人遺非樂。使自殺。韓非欲自陳。不得見。秦王後悔之。使人赦之。非已死矣。申子韓子皆著書。傳於後世。學者多有。余獨悲韓子爲說難。而不可能自脫耳。

秦に使せしむ。秦王之を悦び未だ信用せず。李斯姚賈之を害とし、之を毀りて曰く、韓非は韓の諸公子なり。今王諸侯を并せんと欲するに、非終に韓の爲めにして秦の爲めにせざらん、此れ人の情なり。今王用ひずして、久しく留めて之を歸す。此れ自ら患を遺すなり。過法を以て之を誅するに如かずと。秦王以て然りとなし、吏に下して非を治せしむ。李斯人をして非に樂を遣らしめて自殺せしむ。韓非自ら陳せんと欲すれども見ることを得ず。秦王後に之を悔い、人をして之を赦さしめしも、非已に死せり。申子韓子皆な書を著して後世に傳ふ。學者多くあり、余獨り韓子の說難を爲りて自ら脱する能はざりしを悲しむ。

●秦王は孤憤などの書を故人の著と思ひ、此語ありしなり ●韓非 ●嚴しき法律

太史公曰。老子所貴道。虛無因應。變化於無爲。故著書辭稱微妙。難識。莊子散道。德放論。要亦歸之自然。申子卑卑。施之於名實。韓子引繩墨。切事情。明是非。其極慘微少。恩皆原於道。德之意。而老子深遠矣。

(太史公曰く、老子貴ぶ所の道は虚無因應、無爲に變化す。故に書を著して辭稱ひ、微妙識り難し、莊子道徳を散じて放論す。要するに亦之を自然に歸す。申子卑卑にして之を名實に施す、韓子繩墨を引き事情に切にして是非を明かにす。其極慘微にして恩少し、皆な道徳の意に原く。而して老子は深遠なり。)

● 心を虚無清淨にして自然の理に因りて物に應じ無爲自然の中に變化す ● ひくく隠し ● 法を用ふることを 愷然にして深遠なり ● 老子道徳經

卷六十四

司馬穰苴列傳第四

司馬穰苴者。田完之苗裔也。齊景公時。晉伐阿甄。而燕侵河上。齊師敗績。景公患之。晏嬰乃薦田穰苴曰。穰苴雖田氏庶孽。然其人文能附衆。武能威敵。願君試之。景公召穰苴與諸兵。

司馬穰苴は田完の苗裔なり。齊の景公の時、晉阿甄を伐ち、而して燕河上を侵す。齊の師敗績し、景公之を患ふ。晏嬰乃ち田穰苴を薦めて曰く、穰苴は田氏の庶孽と雖も、然も其の人文能く衆を附け、武よく敵を威す。願くは君之を試みよと。景公穰苴を召し與に兵事を語り、大に之を説び以て將軍となし兵を將るて燕晉の師を扞がしむ。穰苴曰く、臣素と卑賤なりき、君、之を閭伍の中より擢でて之を大夫の上に加ふ、士卒未だ附かず百姓信ぜず、人微に、權輕し。願はくは君の寵臣にして國の尊ぶ所のものを得て以て軍を監せしめば乃ち可ならんと。是に於て景公之を許し、莊賈をして往かしむ。穰苴既に辭し、莊賈と約して曰く、且日中軍門に會せんと。穰苴先づ馳せて軍に至り表を立て漏を下して賈を待

事。大説之。以爲將軍。將兵。扞燕晉之師。穰苴曰。臣素卑賤。君擢之。闕伍之中。加之大夫之上。士卒未附。百姓不信。人微權輕。願得君之寵臣。國之所尊。以監軍。乃可。於是景公許之。使莊賈往。穰苴既辭。與莊賈約曰。且日日中會於軍門。穰苴先馳至。軍立。表下漏待。

つ。賈素と驕貴、以爲らく將已に軍に之けり、已監たり、甚しくは急がずと。親戚左右之を送りて留飲す。日中すれども賈至らず。穰苴則ち表を仆し、漏を決し、入りて軍を行ひ兵を勅し、約束を申明す。約束既に定まり、夕時にして莊賈乃ち至る。穰苴曰く、何ぞ期に後るゝことをなすと。賈謝して曰く、不佞、大夫親戚之を送りしが故に留まれりと。穰苴曰く、將命を受くるの日は、則ち其の家を忘れ、軍に臨みて約束すれば、則ち其の親を忘れ、枹鼓を援ること急なれば、則ち其の身を忘る。今敵國深く侵し、邦内騒動し、士卒境に暴露し、君寢るに席を安んぜず、食ふに味を甘くせず。百姓の命皆な君に懸れり、何ぞ相送ると謂ふかと。軍正を召して問うて曰く、軍法期して後れ至る者は何と云へるか。對へて曰く、斬に當すと。莊賈懼れ、人をして馳せて景公に報じて救を請はしむ。既に往き未だ反るに及ばず。是に於て遂に莊賈を斬り以て三軍に徇ふ。三軍の士みな振慄す。

● 草木の苗、衣の裾の端。轉じて子孫をいふ ● 大敗す ● 姜桓の子に生れたる孫 ● 閭里の卒伍 ● 表を立つるは木を立てて標となして日晷を計り視るなり ● 水漏、水時計。漏を下すは水時計を下げて時刻を知らんとするなり ● 日時計の標を仆し、水時計の水を流す。夏期に後れ日中を過ぎたるを以てなり ● 枹は大鼓を打つ鼓。枹を援りて鼓を打つこと急なれば其の身を忘る ● 軍中の法令を正す役人

買買素驕貴。以爲將已之軍。而已爲監。不甚急。親戚左右送之。留飲日中。而買不至。穰苴則仆表決漏。入行軍勅兵。申明約束。約束既定。夕時莊賈乃至。穰苴曰。何後期爲。買謝曰。不佞大夫親戚送之。故留。穰苴曰。將受命之日。則忘其家。臨軍約束。則忘其親。援枹鼓之。急則忘其身。今敵國深侵。邦内騒動。士卒暴露。於境。君寢不安。席食不甘。味百姓之命。皆懸於君。何謂相送乎。召軍正門曰。軍法期而後至者。云何。對曰。當斬。莊賈懼。使人馳報。景公請救。既往未及。反於是。遂斬莊賈。以徇三軍。三軍之士皆振慄。

之を久しうして景公使者を遣はし節を持って賈を赦さしむ。馳せて軍中に入る。穰苴が曰く、將、軍に在りては、君の令も受けざる所ありと。軍正に問うて曰く、軍中馳せずと、今使者馳す。何と云へるか。正曰く、斬に當すと。使者大いに懼る。穰苴曰く、君の使は之を殺すべからずと、乃ち其の僕、車の左駟、馬の左駟を斬り以つて三軍に徇へ、使者をして還り報せしめ、然る後行く。士卒の次舎、

何。正曰。當斬。使者大懼。積直曰。君之使不可殺之。乃斬其僕車之左驂。馬之左驂以徇三軍。遣使者還報。然後行。士卒次舍。井。飲。食。問疾醫藥。身自拊循之。悉取將軍之資糧。享士卒。身與士卒平。分糧食。最比其羸弱者。三日而後勒兵。病者皆求行。爭奮出爲之。

井竈飲食、疾を問ひて醫藥し、身自ら之を拊循し、悉く將軍の資糧を取りて士卒を享す。身士卒と糧食を平分し、最も其の羸弱なる者と比す。三日にして後兵を勒す。病む者皆行かんことを求め、爭奮して出でて之が爲めに戰に赴く。晉の師之を聞きて爲に罷め去る。燕の師之を聞き水を度りて解く。是に於て之を追撃して、遂に亡ふ所の封内の故境を取りて、兵を引ききて歸る。未だ國に至らずして、兵旅を釋き、約束を解き、誓盟して後邑に入る。景公諸大夫と郊迎し、師を勞ひ、禮をなし、然る後反つて寢に歸る。既に穰苴を見て尊びて大司馬となし、田氏日以て益々齊に尊ばる。已にして大夫鮑氏、高國の屬之を害とし、景公に譖す。景公穰苴を退く。直疾を發して死す。田乞・田豹の徒此れより高・國等を怨み、其後田常簡公を殺すに及び、盡く高子・國子の族を滅し、常の曾孫和に至り、因つて自立して齊の威王となる。兵を用ひ、威を行ひ大に穰苴の法に放へり、而して諸侯齊に朝す。齊の威王、大夫をして古の司馬

の兵法を追論せしめて、穰苴を其の中に附し、因つて號して司馬穰苴が兵法と曰ふ。

- 符節 ● 使者の使印も御者 ● 車の左側の車箱外の木 ● 左側に在る副馬 ● 撫安へず、慰撫す
- 鑿斷す ● 黃河の水を度りて、兵を解く ● 郊外に出でて迎ふ ● 正禮・衰威 ● 語は語ひ告ぐ、聞す、

赴戰。晉師聞之爲罷去。燕師聞之度水而解。於是追擊之。遂取所亡封內故境。而引兵歸。未至國。釋兵旅。約東。晉盟而後入邑。景公與諸大夫郊迎。勞師成禮。然後反歸。寢。既見穰苴。苴爲大司馬。田氏日以益尊。於齊。已而大夫鮑氏、高國之屬害之。譖於景公。景公退穰苴。苴發疾而死。田乞・田豹之徒。由此怨高國等。其後及田常殺簡公。盡滅高子・國子之族。至常曾孫和。因自立爲齊威王。用兵行威。大放穰苴之法。而諸侯朝齊。齊威王使大夫追論古者司馬兵法。而附穰苴於其中。因號曰司馬穰苴兵法。

太史公曰。余讀司馬兵法。闕廓深遠。雖三代征伐。未能竟其義。如其文也。亦少。

太史公曰く、余司馬の兵法を讀むに、闕廓深遠なり。三代の征伐と雖も、未だ其の義を竟ふる能はず。其の文の如きや、亦少しく衰せり。かの穰苴の區區小國の爲めに師を行ふが若き、何の暇ありてか司馬の兵法の揖讓に及ばんや、世既に司馬の兵法多し。故を以て論せず、穰苴の列傳を著す。

爽矣。若夫樓  
直區區爲小  
國一師。何暇  
及司馬兵法  
之揖讓乎。世  
既多司馬兵  
法。以故不論  
著二樓直之列  
傳一

●廣大。開は大、郭はひろきなり ●夏殷周三代の王者の征伐も司馬の兵法の如く廣大澄遠にして盡くしたるものありず ●禮儀あるを云ふ

### 卷六十五

#### 孫子吳起列傳第五

孫子武者。齊人也。以兵法見於吳王闔廬。闔廬曰。子之十三篇。吾盡觀之矣。可以小試勒兵乎。對曰。可。闔廬曰。可。試以婦人乎。曰。可。於是許之。出宮中美女。得三百八十人。孫子分爲二隊。

孫子武は齊の人なり。兵法を以て吳王闔廬に見ゆ。闔廬曰く、子の十三篇、吾盡く之を觀たり。以て小しく試みに兵を勒すべきかと。對へて曰く、可なりと。闔廬曰く、試みに婦人を以てす可きかと。曰く、可なりと。是に於て之を許し、宮中の美女を出して百八十人を得たり。孫子分ちて二隊となし、王の寵姫二人を以て各々隊長となし、皆戟を持たしむ。之に令して曰く、汝而の心と左右の手背とを知るかと。婦人曰く、之を知ると。孫子曰く、前といへば、則ち心を視よ。左といへば左手を視よ。右といへば右手を視よ。後といへば即ち背を視よと。婦人曰く、諾と。約束既に布き、乃ち鉄鉞を設け、即ち之を三令五申す。是に於て之を右に鼓す。婦人大に笑ふ。孫子曰く、約束明かならず、申令熱せざ

以王之寵姬二人各爲一隊長。皆令持戟。而心與左右手背乎。婦人曰。知之。孫子曰。前則視心。左視左手。右視右手。後即視背。婦人曰。諾。約束既布。乃設鈇鉞。即三令五申之。於是鼓之。右婦人大笑。孫子曰。約束不。明。申令不熟。將之罪也。復三令五申而

るは將の罪なりと。復た三令五申して之を左に鼓す。婦人復大に笑ふ。孫子曰く、約束明かならず、申令熟せざるは、將の罪なり。既に己に明かにして法の如くならざる者は、吏士の罪なりと。乃ち左右の隊長を斬らんと欲す。吳王臺上より觀、且に愛姫を斬らんとするを見て大に駭き、趣かに使をして令を下さしめて曰く、寡人已に將軍の能く兵を用ふるを知る。寡人此の二姫に非ざれば食味を甘んぜず。願はくは斬ること勿れと。孫子曰く、臣既に己に命を受けて將となれり。將軍にありては君命も受けざる所ありと。遂に隊長二人を斬り以て徇へ、其の次を用ひて隊長となす。是に於て復た之を鼓す。婦人左右前後跪起みな規矩繩墨に中り、敢て聲を出すものなし。是に於て、孫子使をして王に報ぜしめて曰く、兵既に整齊せり。王試みに下りて之を觀るべし。唯王之之を用ひんと欲する所は、水火に赴くと雖も猶ほ可なりと。吳王曰く、將軍罷休して舍に就け、寡人下り觀るを願はずと。孫子曰く、王徒らに其の言を好み、其の實を

鼓之左。婦人復大。孫子曰。約束不明。申令不熟。將之罪也。既已明而不。如法者。吏士之罪也。乃欲斬左

用ふる能はずと。是に於て闔廬、孫子の能く兵を用ふるを知り、卒に以て將となし、西疆楚を破りて郢に入り、北齊晉を威して名を諸侯に顯はししは孫子與りて力あり。

● 孫子の著書、所謂孫子十三篇也 ● 兵を整ふ ● 罪人を斬る形。小を鈇といひ、大を鉞といふ ● 三度令し五度其意を申へ説明す ● 指揮號令 ● ぶんまはし、曲尺、疆圍の義。規則法度をいふ ● 宿衛

右隊長。吳王從臺上觀。見且斬愛姫大駭。趣使下。令曰。寡人已知將軍能用兵矣。寡人非二二。姬。食不甘味。願勿斬也。孫子曰。臣既已受命爲將。將在軍。君命有所不受。遂斬二隊長。二人以徇。用其次爲隊長。於是復鼓之。婦人左右前後跪起。皆中規矩繩墨。無敢出聲。於是孫子使使報王曰。兵既整齊。王可試下觀之。唯王所欲用之。雖赴水火。猶可也。吳王曰。將軍罷休。就舍。寡人不願下觀。孫子曰。王徒好其言。不能用其實。於是闔廬知孫子能用兵。卒以爲將。西破疆楚。入郢。北威齊晉。顯名諸侯。孫子與有力焉。

孫武既死。後百餘歲有孫臏。臏生阿鄆之間。臏亦孫武之後世子

孫武既に死して後百餘歳にして孫臏あり。臏阿鄆の間に生る。臏も亦孫武の後世の子孫なり。孫臏嘗て龐涓と俱に兵法を學ぶ。龐涓既に魏に事へ、惠王の將軍となるを得て、自ら以て能孫臏に及ばずとなし、乃ち陰かに孫臏を召さしむ。臏



孫也。孫臏嘗與龐涓俱學兵法。龐涓既事魏。得爲惠王將軍。而自以爲能。不及孫臏。乃陰使召孫臏。臏至。龐涓恐其賢。於己疾之。則以法刑斷其兩足。而黥之。使者如梁。孫臏以刑徒。陰見說齊使。齊使以爲奇。竊載與之。齊將田忌善而客待之。忌數

至る。龐涓其の己より賢なるを恐れて之を疾み、則ち法刑を以て其の兩足を斷ちて之を黥し、隠れて見る、勿らしめんと欲す。齊の使者梁に如く。孫臏刑徒を以て陰に見て齊の使に説く。齊の使以て奇となし、竊に載せて與に齊に之く。齊の將田忌善して之を客待す。忌數々齊の諸公子と馳逐重射す。孫臏其の馬足甚しく相遠からず、馬に上中下輩あるを見る。是に於て孫臏田忌に謂ひて曰く、君第に重射せよ、臣能く君をして勝たしめんと。田忌之を信然し、王及び諸公子と千金を逐射す。質に臨むに及び、孫臏曰く、今君の下驕を以て彼の上驕に與し、君の上驕を取りて彼の中驕に與し、君の中驕を取りて彼の下驕に與せよと。既に馳すること三輩し畢つて田忌一たびは勝たずして、再び勝ち、卒に王の千金を得たり。

- 疾は疾なり
- 刑に罰す。刑人としていれずみを施す
- 客として待たす
- 物を贈して射る
- 第は且なり
- 千金を贈して馬を驅逐して物を射る
- 質は對なり。質に臨むは對射せんとするをいふ

與齊諸公子馳逐重射。孫臏見其馬足不甚相遠。馬有上中下輩。於是孫臏謂田忌曰。君第重射。臣能令君勝。田忌信然。之與王及諸公子逐射千金。及臨質。孫臏曰。今君之下驕與彼上驕。取君上驕與彼中驕。取君中驕與彼下驕。既馳三輩畢。而田忌一不勝。而再勝。卒得王千金。

於是忌進孫臏於威王。威王問兵法。遂以爲師。其後魏伐趙。趙急。請救於齊。齊威王欲將孫臏。臏辭謝曰。刑餘之人。不可於是。乃以田忌爲將。而孫臏爲師。居輜車中。坐爲計謀。田忌欲引兵之趙。孫臏

是に於て忌孫臏を威王に進む。威王兵法を問ひ、遂に以て師となす。其の後魏趙を伐つ。趙急なり。救を齊に請ふ。齊の威王孫臏を將とせんと欲す。臏辭謝して曰く、刑餘の人、不可なりと。是に於て乃ち田忌を以て將となし、孫臏を師となす。輜車の中に居り、坐して計謀をなす。田忌兵を引きて趙に之かんと欲す。孫臏曰く、夫れ雜亂紛糾を解く者は控掩せず、鬪を救ふ者は搏擲せず、亢を批き、虛を擣つ、形格し、勢禁すれば則ち自ら爲に解かんのみ。今梁趙相攻め、輕兵銳卒必ず外に竭き、老弱内に罷れん。君兵を引きて疾く大梁に走り、其の街路に據りて、其の方に虛なるを衝くに若かず。彼必ず趙を釋てて自ら救はん。是れ我れ一舉にして趙の圍みを解きて弊を魏に收めんと。田忌之に従ふ。魏果し

子曰。夫解二維  
亂紛糾者不  
控捲。救關者  
不搏。橫批亢  
搆。虛形格勢  
禁。則自爲解  
耳。今梁趙相  
攻。輕兵銳卒  
必竭於外。老  
弱罷於內。君  
不若引兵疾  
走大梁。據其  
街路。街其方  
虛。彼必釋趙  
而自救。是我  
一舉。解趙之  
圍。而收弊於  
魏也。田忌從  
之。魏果去邯  
鄲。與齊戰於  
桂陵。大破梁  
軍。

て邯鄲を去り、齊と桂陵に戦ひ、大に梁の軍を破る。

● 輕重の車 ● 魏の亂れを解き理むるには權きて收めず ● 手にて撃つ ● 尤は吭なり、喉なり。吭をう  
つは其の要處を撃つなり ● 空虚の處をつく

後十五年。魏  
與趙攻韓。韓  
告急於齊。齊  
使田忌將而  
往。直走大梁。  
魏將龐涓聞  
之。去韓而歸。  
齊軍既已過  
而西矣。孫子  
謂田忌曰。彼

後十五年、魏趙と韓を攻む。韓急を齊に告ぐ。齊田忌をして將として往かしめ、  
直ちに大梁に走る。魏の將龐涓之を聞き、韓を去りて歸る。齊の軍既に已に過ぎ  
て西す。孫子田忌に謂ひて曰く、彼の三晉の兵、素悍勇にして齊を輕んじ齊を號  
して怯となす。善く戰ふ者は其の勢に因つて之を利導す。兵法に百里にして  
利に趣く者は上將を蹶す。五十里にして利に趣く者は軍半ば至ると。齊の軍  
をして魏の地に入り、十萬竈を爲らしめ、明日五萬竈を爲り、又明日三萬竈を爲

三晉之兵。素  
悍勇而輕齊。  
齊號爲怯。善  
戰者。因其勢  
而利導之。兵  
法百里而趣  
利者。無上將  
五十里而趣  
利者。軍半至。  
使齊軍入魏  
地。爲十萬竈。  
明日爲五萬  
竈。又明日爲  
三萬竈。龐涓  
行三日。大喜  
曰。我固知齊  
軍怯。入吾地  
三日。士卒亡  
者過半矣。乃  
棄其步軍。與

らしむ。龐涓行くこと三日にして、大に喜びて曰く、我れ固より齊軍の怯なる  
を知る。吾が地に入ること三日にして士卒亡ぐる者半ばに過ぎたりと。乃ち其の  
歩軍を棄て、其の輕銳と、日を倍し行を并せて之を逐ふ。係て、其の行を度るに、暮  
に當に馬陵に至るべし。馬陵は道狭くして旁ら阻隘多く、兵を伏すべし。乃ち  
大樹を斫り、白くして之に書して曰く、龐涓此の樹の下に死せんと。是に於て齊  
軍の善く射る者をして萬弩道を夾みて伏せしめ、期して曰く、暮に火の舉るを  
見て俱に發せよと。龐涓果して夜斫木の下に至り、白書を見る。乃ち火を鑽りて  
之を燭して其の書を読む。未だ畢らずして、齊軍の萬弩俱に發し、魏軍大に亂れ  
相失ふ。龐涓自ら智窮り、兵敗れたるを知り、乃ち自剄して曰く、遂に豎子の  
名を成さしむと。齊因つて勝に乗じて、盡く其の軍を破り、魏の太子申を虜  
にし以て歸る。孫臏此を以て名天下に顯る。世其の兵法を傳ふ。

● 百里の遠きを形りて勝利を争ふものは味方の上將が討死すに至り、五十里も利を争うて走る時に舊伍者が

其輕銳倍日并行逐之。孫子度其行。暮當至。馬陵道狹。而旁多阻隘。可伏兵。乃斫大樹。白而書之曰。龐涓死于此樹之下。於是令齊軍善射者。萬弩夾道而伏。期曰。暮見火舉而俱發。龐涓果夜至。斫木下。見白書。乃鑽火燭之。讀其書。未畢。齊軍萬弩俱發。魏軍大亂相失。龐涓自知智窮兵敗。乃自刎曰。遂成。豎子之名。齊因乘勝盡破其軍。虜魏太子申。以歸。孫臏以此名顯天下。世傳其兵法。

半分も出る ● 兵十萬の糧を炊くべき量 ● 二日ほどを一日にし急ぎて逐ふ ● 一萬の弩弓

吳起者。衛人也。好用兵。嘗學於曾子。事魯君。齊人攻魯。魯欲將吳起。吳起取齊女爲妻。而魯疑之。吳起於是不與齊也。魯吳起者。衛人也。好用兵。嘗學於曾子。事魯君。齊人攻魯。魯欲將吳起。吳起取齊女爲妻。而魯疑之。吳起於是不與齊也。魯

吳起は衛の人なり。好みて兵を用ふ。嘗て曾子に學び、魯君に仕ふ。齊人魯を攻む。魯吳起を將とせんと欲す。吳起齊の女を取りて妻となせり。而して魯之を疑ふ。吳起是に於て名を就さんと欲し、遂に其の妻を殺し、以て齊に與せざるを明かにす。魯卒に以て將となす。將として齊を攻めて大に之を破る。魯人或は吳起を惡して曰く、起の人となり猜忍の人なり。其の少時、家千金を累ね、游仕して遂けず、遂に其の家を破る。鄉黨之を笑ふ。吳起其の己を誇る者二十餘人を殺して東衛の郭門を出でて其の母と訣る。臂を齧みて盟ひて曰く、起卿

卒以爲將。將而攻齊。大破之。魯人或惡吳起。起曰。起之爲人。猜忍人也。其少時家累千金。游仕不遂。遂破其家。鄉黨笑之。吳起殺其誘己者三十餘人。而東出衛郭門。與其母訣。齧臂而盟。曰。起不爲卿相。不復入衛。遂事曾子。居頃之。其母死。起終不歸。曾子薄之。而與

相とならずんば復た衛に入らじと。遂に曾子に仕ふ。居ること之を頃くにして其の母死す。起遂に歸らず。曾子之を薄しとして、起と絶つ。起乃ち魯に之き兵法を學びて以て魯の君に事ふ。魯の君之を疑ふ。起妻を殺して以て將たらんことを求む。夫れ魯は小國にして戰勝の名あり、則ち諸侯魯を圖る。且つ魯衛は兄弟の國なり、而して君起を用ふるは則ち是衛を棄つるなりと。魯の君之を疑うて吳起を謝す。吳起是に於て魏の文侯の賢なるを聞きて之に事へんと欲す。文侯李克に問うて曰く、吳起は何如なる人なるかと。李克の曰く、起貪にして色を好む。然れども兵を用ふること司馬穰直も過ぐる能はずと。是に於て魏の文侯以て將となし、秦を撃ちて五城を拔く。起の將たるや、士卒の最下なる者と衣食を同じうす。臥するに席を設けず、行くに騎乗せず、親ら贏糧を裹み、士卒と勞苦を分つ。卒に疽を病む者あり、起爲めに之を吮ふ。卒の母聞きて之を哭す。人曰く、子は卒なり、而して將軍自ら其の疽を吮ふ。何ぞ哭することとなさんと。母曰

起絶。起乃之魯學兵法。以事魯君。魯君疑之。起殺妻以求將。夫魯小國。而有戰

勝之名。則諸侯聞之。魯衛兄弟之國也。而君用起。則是棄衛。魯君疑之。謝吳起。吳起於是聞魏文侯賢。欲事之。文侯問李克。李克曰。吳起何如人哉。李克曰。起貪而好色。然用兵司馬穰苴不能過也。於是魏文侯以為將。擊秦拔五城。起之為將。與士卒最下者同衣食。臥不設席。行不騎乘。親裹贏糧。與士卒分勞苦。卒有病疽者。起為吮之。卒母聞而哭之。人曰。子卒也。而將軍自吮其疽。何哭為。母曰。非然也。往年吳公吮其父。其父戰不旋踵。遂死於敵。吳公今又吮其子。妾不知其死所矣。是以哭之。

文侯以吳起善用兵。廉平盡能得士心。乃以為西河守。以拒秦韓。魏文侯既卒。

く、然るに非ざるなり。往年吳公其の父を吮ふ。其の父戰ひて踵を旋らさずして遂に敵に死せり。吳公今又其の子を吮へり。妾其の死所を知らず、是を以て之を哭すと。

文侯吳起が善く兵を用ひ、廉平にして能を盡して士心を得るを以て、乃ち以て西河の守となし、以て秦韓を拒く。魏の文侯既に卒す。起其の子武侯に事ふ。武侯西河に浮んで下り、中流にして顧みて吳起に謂ひて曰く、美なるかな山河の固め、此れ魏國の寶なりと。起對へて曰く、徳に在りて險に在らず。昔三苗氏洞庭を左にし、彭蠡を右にしたれども、徳義修まらずして禹之を滅せり。夏桀の居、河澗を左にし、秦華を右にし、伊闕其の南に在り、羊腸其の北に在りたれども、政を修むる不仁にして、湯之を放てり。殷紂の國孟門を左にし、太行を右にし、常山其の北に在り、太行其の南を經れども、政を修むる不徳にして武王之を殺せり。此に由つて之を觀れば徳に在りて險に在らず。若し君徳を修めずんば舟中の人盡く敵國たらんと。武侯曰く、善しと。即ち吳起を封じて西河の守となす。甚だ聲名あり。魏相を置き田文を相とす。吳起悦ばず。田文に謂ひて曰く、請ふ子と功を論ぜん、可なりやと。田文曰く、可なりと。起曰く、三軍に將として、士卒をして死を樂しましめ、敵國をして敢て謀らざらしむるは、子起といづれぞと。曰く、子に如かずと。起曰く、百官を治め萬民を親しめ、府庫を實するは、子起と孰れぞと。文曰く、子に如かずと。起曰く、西河を守りて、秦兵敢て東郷せず、韓趙賓從するは、子起と孰れぞと。文曰く、子に如

起事其子武侯。武侯浮西河而下。中流顧而謂吳起曰。美哉乎山河之固。此魏國之寶也。起對曰。在徳不在險。昔三苗氏左洞庭。右彭蠡。徳義不修。禹滅之。夏桀之居。左河濟。右秦華。伊闕在其南。羊腸在其北。修政不仁。湯放之。殷紂之國。孟門在左。太行在右。常山在其

庭を左にし、彭蠡を右にしたれども、徳義修まらずして禹之を滅せり。夏桀の居、河澗を左にし、秦華を右にし、伊闕其の南に在り、羊腸其の北に在りたれども、政を修むる不仁にして、湯之を放てり。殷紂の國孟門を左にし、太行を右にし、常山其の北に在り、太行其の南を經れども、政を修むる不徳にして武王之を殺せり。此に由つて之を觀れば徳に在りて險に在らず。若し君徳を修めずんば舟中の人盡く敵國たらんと。武侯曰く、善しと。即ち吳起を封じて西河の守となす。甚だ聲名あり。魏相を置き田文を相とす。吳起悦ばず。田文に謂ひて曰く、請ふ子と功を論ぜん、可なりやと。田文曰く、可なりと。起曰く、三軍に將として、士卒をして死を樂しましめ、敵國をして敢て謀らざらしむるは、子起といづれぞと。曰く、子に如かずと。起曰く、百官を治め萬民を親しめ、府庫を實するは、子起と孰れぞと。文曰く、子に如かずと。起曰く、西河を守りて、秦兵敢て東郷せず、韓趙賓從するは、子起と孰れぞと。文曰く、子に如

北太河經其南。修政不德。武王殺之。由此觀之。在德不在險。若君不修德。舟車之人盡爲敵國也。武侯曰。善。即封吳起爲西河守。甚有聲名。魏置相。相田文。吳起不悅。謂田文曰。請與子論功。可乎。田文曰。可。起曰。將三軍。使士卒樂死。敵國不敢謀。子孰與起。文曰。不如子。起曰。治三百官。親萬民。實三府庫。子孰與起。文曰。不如子。起曰。守西河。而秦兵不敢東鄉。韓趙實從。子孰與起。文曰。不如子。起曰。此子三者皆出吾下。而位加吾上。何也。文曰。主少國疑。大臣未附。百姓不信。方是之時。屬之於子乎。屬之於我乎。起默然良久曰。屬之子矣。文曰。此乃吾所以居子之上也。吳起乃自知弗如田文。

田文既死。公

田文既に死し、公叔相となり、魏の公主に尙す。而して吳起を害とす。公叔

かすと。起曰く、此れ子三者皆な吾が下に出づ。而して位吾が上に加はるは何ぞやと。文曰く、主少く、國疑ひ、大臣未だ附かず、百姓信ぜず、是の時に方り、之を子に屬せんか、之を我に屬せんかと。起默然たること良久しうして曰く、之を子に屬せんと。文曰く、此れ乃ち吾が子の上に居る所以なりと。吳起乃ち自ら田文に如かざるを知る。

● 田部 ● 東嶺、東に向ふ ● 可服、客となりて來りて服從す

叔爲相尙魏公。主而害吳起。公叔之僕曰。起易去也。公叔曰。奈何。其僕曰。吳起爲人節廉而自喜名也。君因先與武侯言曰。夫吳起賢人也。而侯之國小。又與之疆秦壤界。臣竊恐起之無留心也。武侯曰。奈何。君因謂武侯曰。試延以公。主起有留心。則必受之。無留心則

の僕曰く、起は去り易しと。公叔曰く、奈何にせんと。其の僕曰く、吳起は人となり節廉にして自ら名を喜む。君因つて先づ武侯と言ひて曰へ、夫れ吳起は賢人なり、而して侯の國小なり、又疆秦と界を壤す。臣竊かに起の留まる心無からんことを恐ると。武侯即ち曰はん、奈何にせんと。君因つて武侯に謂ひて曰へ、試みに延くに公主を以てせよ、起留まる心あらば則ち必ず之を受けん、留まる心なくんば則ち必ず辭せん。此を以て之をトへ。君因つて吳起を召して與に歸り、即ち公主をして怒りて君を輕んぜしめよ。吳起公主の君を賤しむるを見るや則ち必ず辭せんと。是に於て吳起公主の魏相を賤しむを見て、果して魏の武侯に辭せり。武侯之を疑ひて信ぜず。吳起罪を得んことを懼れて遂に去り、即ち楚に之く。楚の悼王素より起の賢なるを聞けり。至れば則ち楚に相たり。法を明かにし、令を審かにし、不急の官を捐て、公族疏遠なる者を廢し、以て戰鬪の士を撫養す。要は兵を彊くし、馳説の從横を言ふ者を破るに在り。是に於て南百越

心則必辭矣。以此卜之。君因召吳起而與歸。即令公子怒而輕君。吳起見公子之賤也。則必辭。於是吳起見公子之賤。果辭魏武侯。武侯疑之。而弗信也。吳起懼得罪。遂去。即之楚。悼王素聞起賢。至則相楚。明法審令。捐不急之官。廢公族疏遠者。以撫養戰鬪之士。要在彊兵。破馳說之言。從橫者。於是南平百越。北并陳蔡。却三晉。西伐秦。諸侯患楚之彊。故楚之貴戚盡欲害吳起。及悼王死。宗室大臣作亂。而攻吳起。吳起走之。王尸而伏之。擊起之徒。因射刺吳起。并中悼王。悼王既葬。太子立。乃使令尹盡誅射吳起而并中王尸者。七十餘家。

太史公曰。世

を平け、北陳蔡を并せ、三晉を却け、西秦を伐ち、諸侯楚の彊きを患ふ。故に楚の貴戚盡く吳起を害せんと欲す。悼王死するに及び宗室大臣亂を作して吳起を攻む。吳起走りて王の尸に之きて之に伏す。起を撃つ徒吳起を射刺するに因つて并せて悼王に中つ。悼王既に葬り、太子立つ。乃ち令尹をして盡く吳起を射て并せて王の尸に中てし者を誅せしむ。起を射るに坐して宗を夷けられて死者七十餘家ありき。

● 君主の女を公主といふ ● 君主の女を仰慕して配となすを尙すといふ ● 公主降嫁のこと ● 魏相公叔公叔の地方 ● 天下を馳せめぐりて遊説する人 ● 帝王の一族 ● 一族皆誅せられて

太史公曰く、世俗の稱する所の師旅は皆な孫子十三篇を道ふ。吳起の兵法は世

俗所稱師旅。皆道孫子十三篇。吳起兵法。世多有。故弗論。論其行事。所施設者。語曰。能行之者。未必能言。能言之者。未必能行。孫子籌策。龐涓。明矣。然不能蚤救患於被刺。吳起說武侯。以形勢。不如德。然行之於楚。以刻暴。少恩。亡其軀。悲夫。

多くあり、故に論ぜず。其の行事と施設する所の者とを論ず。語に曰く、能く之を行ふ者は、未だ必ずしも能く言はず。能く之を言ふ者は、未だ必ずしも能く行はずと。孫子龐涓を籌策せしは明かなり。然れども蚤く患を刑せらるゝに救ふ能はず。吳起武侯に説くに、形勢の徳に如かざるを以てす。然れども之を楚に行ふや刻暴恩少きを以て其の軀を亡ほせり、悲しいかな。

● 二千五百人を師といひ五百人を旅といふ、軍隊の義、轉じて兵事をいふ ● はかりごと、謀略 ● 刑せらるるの罪を畢の未然に教ふ能はず ● 刻暴殘暴

### 卷六十六

#### 伍子胥列傳第六

伍子胥者、楚人也。名員。員父曰伍奢。員兄曰伍尚。其先曰伍舉。以直諫事楚莊王。有顯。故其後世有名於楚。楚平王有太子名曰建。使伍奢爲太子傅。費無忌爲少傅。無忌不忠於太子建。

伍子胥は楚の人なり。名は員。員の父を伍奢といひ、員の兄を伍尚といひ、其の先を伍舉と曰ふ。直諫を以て楚の莊王に事へて顯るゝあり。故に其の後世々楚に名あり。楚の王太子あり、名を建と曰ふ。伍奢をして太傅たらしめ、費無忌をして少傅たらしむ。無忌太子建に忠ならず。平王無忌をして太子の爲めに婦を秦に取らしむ。秦の女好し。無忌馳せ歸り、平王に報じて曰く、秦の女絶だ美なり。王自ら取つて更に太子の爲めに婦を取るべしと。平王遂に自ら秦の女を取りて、絶だ之を愛幸し、子軫を生み、更に太子の爲めに婦を取る。無忌既に秦の女を以て自ら平王に媚び、因つて太子を去つて平王に事ふ。一旦平王卒して太子立たば己を殺さんことを恐る。乃ち因つて太子建を讒す。建の母は蔡

平王使無忌爲太子取婦於秦。秦女好。無忌馳歸。報平王曰。秦女絶美。王可自取。而更爲太子取婦。平王遂自取秦女。而絶愛幸之。生子軫。更爲太子取婦。無忌既以秦女自媚於平王。因去太子。而事平王。恐一且平王卒。而太子立殺己。乃因讒太子建。建母蔡女也。無寵於平王。平王稍益疏建。使建守城。父備邊兵。頃之無忌又日夜言太

の女なり。平王に寵なし。平王稍く益々建を疏んじ、建をして城父を守り邊兵に備へしむ。之を頃くして無忌又日夜太子の短を王に言ひて曰く、太子秦の女を以ての故に、怨望なき能はず、願くは王少しく自ら備へよ。太子城父に居り、兵に將としてより、外諸侯に交り、且つ入りて亂をなさんと欲すと。平王乃ち其の太傅伍奢を召して之を考問せしむ。伍奢無忌の太子を平王に讒するを知る。因つて曰く、王獨り奈何ぞ讒賊の小臣を以て骨肉の親を疏んずるやと。無忌曰く、王今制せずんば、其の事成らん。王且に禽にせられんとすと。是に於て、平王怒つて伍奢を囚へ、城父の司馬奮揚をして往いて太子を殺さしむ。行き未だ至らずして、奮揚人をして先づ太子に告げしむ。太子急ぎ去れ、然らずんば將に誅せられんとすと。太子建亡けて宋に奔る。

- 要 ● 疎 ● 御用心なまゝい ● 罪跡を取調ぶ ● 計謀成就せん ● 向は携方り

子短於王曰。太子以秦女之故。不能無怨。願王少自備也。自太子居城父。將兵。外交諸侯。且欲入爲亂矣。平王乃召其太傅伍奢。考問之。伍奢知無忌讒太子於平王。因曰。王獨奈何以讒賊小臣。破骨肉之親乎。無忌曰。今王不制其事。成矣。王且見禽於平王。怒囚伍奢。而使城父司馬奮揚往殺太子。行未至。奮揚使人先告太子。太子急去。不然將誅太子。建亡奔宋。

無忌言於平王曰。伍奢有二子。皆賢。不可以其父之罪而召之。不然且爲楚患。王使使謂伍奢曰。能致汝二子則生。不能則死。伍奢曰。尚爲人仁。呼必來。員爲人

無忌平王に言ひて曰く、伍奢二子あり。皆賢なり、誅せずんば且に楚の憂をなさん。其の父を以て質として之を召すべし。然らずんば且に楚の患をなさんと。王使をして伍奢に謂はしめて曰く、能く汝の二子を致さば則ち生きん。能はずんば則ち死せんと。伍奢曰く、尚人となり仁なり、呼ばば必ず來らん。員人となり剛戾にして詢を忍び能く大事を成さん。彼の來るの并せて禽るを見れば、其の勢必ず來らじと。王聽かずして人をして二子を召さしむ。曰く、來れ、吾汝の父を生かさん、來らざらんか、今奢を殺さんと。伍尚往かんと欲す。員曰く、楚の我が兄弟を召すは、以て我が父を生かすを欲するにあらず。脱する者ありて、

剛戾忍詢。能成大事。彼見來之并禽。其勢必不來。王不聽。使人召二子曰。來。吾生汝。父不來。今殺奢也。伍尚欲往。員曰。楚之召我。兄弟非欲以生我父也。恐下有脫者。後生也。故以父爲質。詐召二子。二子到。則父子俱死。何益。父之死。往而令。不如下奔他國。

後に患を生ぜんことを恐る。故に父を以て質となし、詐りて二子を召す。二子到らば、則ち父子俱に死せん、何ぞ父の死に益せん、往いて讒をして報ずるを得ざらしめんのみ。他國に奔りて力を借りて以て父の恥を雪がんに如かじ。俱に減ぶるは爲すなきなりと。伍尚曰く、我れ往いて終に父の命を全うする能はざるを知る。然れども父我を召して以て生を求むるに、往かずして後恥を雪ぐ能はずんば、終に天下の笑とならんことを恨むのみと。員に謂ひて、去るべし、汝能く父を殺すの讒を報いよ。我將に死に歸せんとすと。尚既に執に就く。使者伍尚を捕へんとす。伍胥弓を貫き、矢を執り、使者に鬪ふ。使者敢て進まず。伍胥遂に亡ぐ。太子建の宋に在るを聞き、往いて之に従ふ。奢子胥の亡けたるを聞きて曰く、楚國の君臣且に兵に苦しまんとすと。伍尚楚に至る。楚奢と尚とを并せ殺す。

● 西情にして、展れること ● 西に同じ、恥辱 ● 執へちる



借力以雪父之恥。俱滅無爲也。伍尙曰。我知往終不能全父命。然恨父召我以求生。而不往後不能雪恥。終爲天下笑耳。謂員可去矣。汝能報殺父之讎。我將歸死。尙既就執。使者捕伍胥。伍胥貫弓執矢。嚮使者。不取進。伍胥遂亡。聞太子建之在宋。往從之。者聞太子建之亡也。曰。楚國君臣且苦兵矣。伍尙至楚。楚并殺者與尙也。

伍胥既至宋。宋有華氏之亂。乃與太子建俱奔於鄭。鄭人甚善之。太子建又適晉。晉頃公曰。太子既善鄭。鄭信太子。太子能爲我內應。而我攻其外。滅鄭必矣。滅鄭而封太子。太子乃還鄭。事未會。會

伍胥既に宋に至る。宋に華氏の亂あり。乃ち太子建と俱に鄭に奔る。鄭の人甚だ之を善くす。太子建又晉に適く。晉の頃公曰く、太子既に鄭に善し、鄭太子を信ず。太子能く我が爲めに内應せば、我其の外を攻めん、鄭を滅さんと必せり。鄭を滅ほして太子を封せんと。太子乃ち鄭に還る。事未だ會せず、自ら私かに其の從者を殺さんと欲するに會ふ。從者其の謀を知りて、乃ち之を鄭に告ぐ。鄭の定公子産と與に太子建を誅殺す。建に子あり、勝と名づく。伍胥懼れ、乃ち勝と俱に吳に奔り、昭關に至る。昭關之を執へんと欲す。伍胥遂に勝と獨身歩走し、幾んど脱するを得ず、追者後に在り。江に至る。江上に一漁父の船に乘れるあり、伍胥の急を知り、乃ち伍胥を渡す。伍胥既に渡り、其の劍を解いて

自私欲殺其從者。從者知其謀。乃告之於鄭。鄭定公與子產誅殺太子建。建有子名勝。伍胥懼。乃與勝俱走。吳。到昭關。昭關欲執之。伍胥遂與勝獨身步走。幾不得脱。追者在後。至江。江上有漁父乘船。知伍胥之急。乃渡伍胥。伍胥既渡。解其劍。曰。此劍直百金。以

曰く、此劍直百金なり、以て父に與へんと。父曰く、楚國の法、伍胥を得る者は、粟五萬石。爵執珪を賜ふ。豈徒に百金の劍のみならんやと。受けず。伍胥未だ吳に至らずして疾み、中道に止まりて乞食す。吳に至る。吳王僚方に事を用ひ、公子光將たり。伍胥乃ち公子光に因つて以て吳王に見えんことを求む。之を久しうして楚の平王其の邊邑鍾離と吳の邊邑卑梁氏と、俱に讎し、兩女子の桑を争ひて相攻むるを以て、乃ち大に怒り、兩國兵を擧げて相伐つに至る。吳公子光をして楚を伐たしめ、其の鍾離と居巢とを抜きて歸る、伍子胥吳王僚に説きて曰く、楚破るべきなり。願くは復び公子光を遣はさんと。公子光吳王に謂ひて曰く、彼れ伍胥の父兄楚に讎せらる。而して王に勸めて楚を伐たんとするは以て自ら其の讎に報いんと欲するのみ。楚を伐つとも未だ破るべからざるなりと。伍胥公子光の内志あり、王を殺して自立せんと欲し、未だ説くに外事を以てすべからざるを知り、乃ち專諸を公子光に進め、退きて太子建の子勝と

與父。父曰。楚國之伍。得伍。晉不。賜粟五萬石。爵執珪。豈徒百金劍邪。不受。伍胥未至。吳疾。止中道。乞食。至於吳。吳王僚方用事。公子光爲將。伍胥乃因公子光。以求見吳王。久之。楚平王以其邊邑鍾離。與吳邊邑卑梁氏俱。兩女子爭桑。相攻。乃大怒。至於兩國。舉兵相伐。吳使公子光伐楚。拔其鍾離。居巢。而歸。伍子胥說吳王僚曰。楚可破也。願復遣公子光。公子光謂吳王曰。彼伍胥父兄爲戮於楚。而勸王伐楚者。欲以自報其讎耳。伐楚未可破也。伍胥知公子光有內志。欲殺王。而自立。未可說。以外事。乃進專諸於公子光。退而與太子建之子勝。耕於野。

野に耕す。

● 宋の華亥向軍。華定等。氣をなして。君と争ひて出でて奔る。 ● 好機に會せず。 ● 西江にあり、吳楚の境をなす。 ● 漁父を指す。 ● 珪を執る節。珪は玉の一種。地を以て。將侯を封ずる時に天子より賜はるもの。 ● 養賢す。

五年而楚平王卒。初。平王所奪太子建。秦女生子軫。及平王卒。軫竟立爲後。是爲昭王。吳王僚因楚喪。使

五年にして楚の平王卒す。初め平王太子建に奪ふ所の秦の女、子軫を生む。平王卒するに及び、軫竟に立ちて後となる。是を昭王となす。吳王僚楚の喪に因りて二公子をして兵を將る往いて楚を襲はしむ。楚兵を發し、吳兵の後を絶ちて歸るを得ざらしむ。吳國內空し、而して公子光乃ち專諸をして吳王僚を襲刺せしめて自立す。是を吳王闔廬となす。闔廬既に立ちて志を得、乃ち伍員を召して以て行

二公子將兵往襲楚。楚發兵絶吳兵之。後不得歸。吳國內空。而公子光乃令專諸襲刺吳王僚。而自立。是爲吳王闔廬。闔廬既立。得志。乃召伍員。以爲行人。而與謀國事。楚誅其大臣。郤宛。伯州犂。伯州犂之孫伯嚭亡奔吳。吳亦以詰爲大夫。前王僚所遣二公子將

人となして與に國事を謀る。楚其の大臣郤宛・伯州犂を誅す。伯州犂の孫伯嚭亡けて吳に奔る。吳亦た詰を以て大夫となす。前に王僚の遣しし所の二公子兵を將るて楚を伐つ者道絶えて歸るを得ず。後闔廬王僚を弑して自立せしを聞き、遂に其の兵を以て楚に降る。楚之を舒に封ず。闔廬立ちて三年にして乃ち師を興し、伍胥伯嚭と楚を伐ち舒を抜き、遂に故の吳の反せし二將軍を禽にし、因つて郢に至らんと欲す。將軍孫武曰く、民勞せり、未だすべからず、且く之を待てと。乃ち歸る。四年吳楚を伐ちて六と潛とを取る。五年越を伐ちて之を取る。楚の昭王公子囊瓦をして兵を將るて吳を伐たしむ。吳、伍員をして迎へ撃たしめ、大に楚の軍を豫章に破り、楚の居巢を取る。九年吳王闔廬子胥・孫武に謂ひて曰く、始め子、郢未だ入るべからずと言へり。今果して何如と。二子對へて曰く、楚の將囊瓦貪にして唐蔡皆な之を怨む。王必ず大に之を伐たんと欲せば、必ず先づ唐蔡を得ば乃ち可なりと。闔廬之を聽し、悉く師を興して唐蔡と與に楚を伐

兵伐楚者。道絕不得歸。後聞闔廬弑王僚自立。遂以其兵降楚。楚封之於舒。闔廬立三年。乃興師與伍胥伯嚭伐楚。拔舒。遂禽故吳反二將軍。因欲至郢。將軍孫武曰。民勞未可。且待之。乃歸。四年。吳伐楚。取六。與潛。五年。伐越。敗之。六年。楚昭王使公子囊瓦將兵伐吳。吳使伍員迎擊。大破楚軍於豫章。取楚之居巢。九年。吳王闔廬謂子胥孫

ち、楚と漢水を夾みて陳す。吳王の弟夫概兵を將るて從はんと請ふ。王聽さず。遂に其の屬五千人を以て楚の將子常を伐つ。子常敗走して鄭に奔る。是に於て吳勝に乗じて前む。五たび戰ひて遂に郢に至る。己卯楚の昭王出奔す。庚辰吳王郢に入る。昭王出で、亡けて雲夢に入る。盜王を撃ち、王郢に走る。鄭公の弟懷曰く、平王我が父を殺す。我れ其の子を殺す。亦た可ならずやと。郢公其の弟の王を殺さんとするを恐れ、王と與に隨に奔る。吳兵隨を圍み、隨人に謂ひて曰く、周の子孫漢川に在る者楚盡く之を滅せりと。隨の人王を殺さんと欲す。王の子墓、王を匿し、己自ら王となりて以て之に當る。隨の人王を吳に與へんことを卜して不吉なり。乃ち吳に謝して王を與へず。

● 諸侯の國に便曉する役 ● 兵力衰弊せり ● 楚の國都 ● 楚の北方にあり、楚に屬す ● 味方とするを得 ● 楚の南方にあり ● 楚の南にある國 ● 楚の南の國

武曰。始子言郢未可入。今果何如。二子對曰。楚將囊瓦貪。而唐蔡皆怨之。王必欲大伐之。必先得唐蔡。乃可。闔廬聽之。悉興師與唐蔡伐楚。與楚夾漢水而陳。吳王弟夫概將兵請從。王不聽。遂以其屬五千人擊楚將子常。子常敗走奔鄭。於是吳乘勝而前。五戰遂至郢。己卯。楚昭王出奔。庚辰。吳王入郢。昭王出亡入雲夢。盜擊王。王走郢。郢公弟懷曰。平王殺我父。我殺其子。不亦可乎。郢公恐其弟殺王。與王奔隨。吳兵圍隨。謂隨人曰。周之子孫在漢川者。楚盡滅之。隨人欲殺王。王子素匿王。己自爲王。以當之。隨人卜與王於吳。不吉。乃謝吳。不與王。

始伍員與申包胥爲交。員之亡也。謂包胥曰。我必覆楚。包胥曰。我必存之。及吳兵入郢。伍子胥求昭王。既不得。乃獨楚平王墓。出其尸。鞭之三百。

始め伍員申包胥と交りをなす。員の亡ぐるや、包胥に謂ひて曰く、我れ必ず楚を覆さんと。包胥曰く、我れ必ず之を存せんと。吳の兵郢に入るに及び、伍子胥昭王を求む。既に得られず。乃ち楚の平王の墓を掘り、其の尸を出して之を鞭つこと三百、然して後已む。申包胥山中に亡け、人をして子胥に謂はしめて曰く、子の驪を報する其れ以て甚しきか。吾れ之を聞く、人衆ければ天に勝つ、天定つて亦た能く人を破ると。今子は故平王の臣にして親ら北面して之に事へたり。今死人を僇するに至る。此れ豈其の天道の極なからんやと。伍子胥曰く、我

然後已。申包胥亡於山中。使人謂子胥曰：「子之報讎其以甚乎？吾聞之。人衆者勝天。天定亦能破人。今子故平王之臣，親北面而事之。今至於此，豈其死乎？此豈其無天道之極乎？」伍子胥曰：「爲我謝申包胥曰：『吾日暮途遠，吾故倒行而逆施之。』」於是申包胥走秦告急，求救於秦。秦不許，包胥立於秦廷，晝夜哭。七日七夜，不絕其聲。秦哀公憐之，曰：

が爲めに申包胥に謝して曰へ、吾れ日暮れて途遠し、吾れ故に倒行して之を逆施すと。是に於て申包胥秦に走り、急を告げて救を秦に求む。秦許さず。包胥、秦の廷に立ちて晝夜哭すること七日七夜其の聲を絶たず。秦の哀公之を憐みて曰く、楚無道と雖も、臣あり是の若し。存する無かる可けんやと。乃ち車五百乘を遣はして楚を救ひ、吳を撃つ。六月吳の兵を穢に敗る。吳王久しく楚に留りて昭王を求め、而して闔廬の弟夫概乃ち亡け歸り、自立して王となるに會す。闔廬之を聞き、乃ち楚を釋して歸り、其の弟夫概を撃つ。夫概敗れ走り、遂に楚に奔る。楚の昭王吳の内亂あるを見て乃ち復た郢に入る。夫概を堂谿に封じ、堂谿氏となす。楚復た吳と戦ひ、吳を敗る。吳王乃ち歸る。

● 人の勢力多大なる時は一時は天に勝つも天理定りし後は其の勢者をも破る意 ● 臣謀するを謂ふ、天子は南面して臣下は北面するに據る ● 憐、憐は憐なり、設實なり ● 倒行、倒行に逆ひても構はずに施行す

走秦告急。求救於秦。秦不許。包胥立於秦廷。晝夜哭。七日七夜。不絕其聲。秦哀公憐之。曰。

楚雖無道。有臣若此。可無存乎。乃遣車五百乘。救楚。擊吳。六月。敗吳兵於穢。會吳王。久留楚。求昭王。闔廬弟夫概乃亡歸。自立爲王。闔廬聞之。乃釋楚而歸。擊其弟夫概。夫概敗走。遂奔楚。秦昭王曰。吳有亂。乃復入郢。封夫概於堂谿。爲堂谿氏。楚復與吳戰。敗吳。吳王乃歸。

後二歲。闔廬使太子夫差將兵伐楚。取番。楚懼。吳復復大來。乃去郢。徙於都。當是時。吳以伍子胥孫武之謀。西破張楚。北威齊晉。南服越人。其後四年。孔子相魯。後五年。伐越。越王句踐迎擊。敗吳於

後二歲闔廬太子夫差をして兵を將るて楚を伐たしめ番を取る。楚吳の復た大に來らんことを懼れ、乃ち郢を去りて都に徙る。是の時に當り、吳仇子胥孫武の謀を以て西強楚を破り、北のかた齊晉を威し、南のかた越人を服す。其の後四年孔子魯に相たり。後五年越を伐つ。越王句踐迎へ撃ちて、吳を姑蘇に敗り、闔廬の指を傷け軍却く。闔廬劍を病み、將に死せんとして太子夫差に謂ひて曰く、爾句踐の爾の父を殺ししを忘るゝかと。夫差對へて曰く、敢て忘れじと。是の夕闔廬死す。夫差既に立ちて王となり、伯嚭を以て太宰となし、戰射を習ふ。二年の後越を伐ち、越を夫湫に敗る。越王句踐乃ち餘兵五千人を以て、會稽の上に棲む。大夫種をして幣を厚くして吳の太宰嚭に遺り以て和を請はしめ、國を委し

姑蘇。傷闔廬。指軍却闔廬。病創將死。謂太子夫差曰。爾忘句踐殺爾父乎。夫差對曰。不敢忘。是夕闔廬死。夫差既立爲王。以伯嚭爲太宰。習戰射。二年後伐越。越王句踐乃以餘兵五千入。棲於會稽之上。使大夫種厚幣遺吳太宰嚭。求委國爲臣妾。吳王將許之。伍子胥諫曰。越王爲人能辛苦。今王不滅。後必悔之。吳王不聽。用太宰嚭計。與越平。其後五年。而吳王聞齊景公死。而大臣爭寵。新君弱。乃與師北伐齊。伍子胥諫曰。句踐食不重味。吊死問疾。且欲有所用之也。的謀を疏んず。

● 吳王闔廬の築きたる臺 ● 大夫の上に位する家老の職 ● 能く辛苦に堪ふ ● 和す

て臣妾とならんことを求む。吳王將に之を許さんとす。伍子胥諫めて曰く、越王人となり辛苦を能くす、今王滅さずんば後必ず之を悔いんと。吳王聽かず、太宰嚭の計を用ひて越と平ぐ。其の後五年にして吳王齊の景公死して大臣寵を爭ひ、新君弱しと聞き、乃ち師を興して北のかた齊を伐つ。伍子胥諫めて曰く、句踐食味を重ねず、死を弔ひ、疾を問ひ、且に之を用ふる所あらんと欲す。此の人死せずんば必ず吳の患たらん。今吳の越あり、猶ほ人の腹心の疾あるがごとし。而るに王越を先にせずして乃ち齊に務む、亦た謬らずやと。吳王聽さず。齊を伐ちて大に齊の師を艾陵に敗り、遂に鄒魯の君を滅して以て歸り、益々子胥の謀を疏んず。

人不死必爲吳患。今吳之有越。猶三人之有腹心疾也。而王不先而乃務齊。不亦謬乎。吳王不聽。伐齊。大敗齊師於艾陵。遂滅鄒魯之君。以歸。益疏子胥之謀。

其後四年。吳王將北伐齊。越王句踐用子貢之謀。乃率其衆以助吳。而重寶以獻遺太宰嚭。太宰嚭既數受越賂。其愛信越殊甚。日夜爲言於吳王。吳王信用之。計。伍子胥諫曰。夫越腹心之病。今信其浮辭。詐

其の後四年、吳王將に北のかた齊を伐たんとす。越王句踐子貢の謀を用ひ、乃ち其の衆を率ゐて以て吳を助け、重寶以て太宰嚭に獻遺す。太宰嚭既に數々越の賂を受け、其の越を愛信すること殊に甚しく、日夜爲めに吳王に言ふ。吳王嚭の計を信用す。伍子胥諫めて曰く、夫れ越は腹心の病なり。今其の浮辭詐僞を信じて齊を貪る。齊を破るは譬へば猶ほ石田のごとく之を用ふる所なし。且つ盤庚の詔に曰く、願越不恭あらば之を剋殄滅して遺育すること無からしめ、種を茲の邑に易へしむる無かれと。此れ商の興りし所以なり。願くは王齊を釋して越を先にせよ。若し然らずんば後將に之を悔のとも及ぶなからんとすと。吳王聽さず。子胥を齊に使せしむ。子胥行に臨み其の子に謂ひて曰く、吾數々王を諫む。王用ひず。吾今吳の亡ぶるを見ん。汝吳と俱に亡びんこと無益なりと。乃ち其

僂而食齊。破齊  
 齊特猶石田。無  
 無所用之。且盤  
 盤庚之詰曰。有  
 有顯越不恭。朝  
 朝珍滅之。俾無  
 無遺育。無使易  
 易種于茲邑。此  
 此商之所以興。  
 興。願王釋齊。而  
 而先越。若不無  
 無及。而吳王不  
 不聽。使子胥於  
 於齊。子胥臨行。  
 行。謂其子曰。吾  
 吾數諫王。王不  
 不用。吾今見吳  
 吳之亡矣。汝與  
 與吳俱亡。無

の子を齊の鮑叔に屬して還りて吳に報す。吳の太宰嚭既に子胥と隙あり、因つて讒して曰く、子胥人となり、剛暴にして恩少く猜賊なり。其の怨望深禍を爲さんことを恐る。前日王齊を伐たんと欲せしに、子胥以て不可と爲せり。王卒に之を伐ちて大功ありき。子胥其の謀計用ひられざりしを恥ぢ、乃ち反つて怨望す。而して今王又復び齊を伐つ。子胥専ら復りて強諫し、事を用ふるを沮毀し、徒らに吳の敗れて以て自ら其の計謀に勝るを幸とするのみ。今王自ら行き、國中の武力を悉して以つて齊を伐つ。而して子胥諫めて用ひられず、因つて轍め謝し、病を伴りて行かず、王備へざるべからず。此れ禍を起すこと難からず。且つ詭人をして微かに之を伺はしむれば、其の齊に使用するや、乃ち其の子を齊の鮑氏に屬す。夫れ人臣となりて、内意を得ず、外諸侯に倚り、自ら以つて先王の謀臣、今用ひられずとなし、常に鞅鞅として怨望す。願くは王早く之を圖れと。

● 石罅多き田地 ● 遊經の篇 ● 縦横にして命を受けざるなり ● 愚切る刑と身機を斷つ刑 ● 種を遺

生育す ● 賈誼にして人を殺害す ● 恨は恨なり ● はみ妨ぐ ● 疑は止むるなり、疑するなり  
 快々、心樂まざる歟

益也。乃囑其子  
 子於齊鮑牧。而  
 而還報吳。吳太  
 太宰嚭既與子  
 子胥有隙。因諷  
 諷曰。子胥爲人  
 剛暴。少恩猜賊。  
 其怨望恐爲深  
 深禍也。前日王  
 王欲伐齊。子胥  
 以爲不可。王卒  
 伐之。而有大功。  
 子胥恥其計謀  
 不用。乃反怨望。  
 而今王又復伐  
 伐齊。子胥專復  
 強諫。沮毀用事。  
 徒幸吳之敗。以  
 自勝其計謀耳。  
 今王自行。悉國  
 中武力以伐齊。  
 而子胥諫不用。  
 因報謝伴病不  
 行。王不可不備。  
 此起禍不難。且  
 詭使人微伺之。  
 其使於齊也。乃  
 屬其子於齊之  
 鮑氏。夫爲人臣。  
 內不得意。外倚  
 諸侯。自以爲先  
 王之謀臣。今不  
 見用。常鞅鞅怨  
 望。願王早圖之。

吳王曰。微子  
 之言。吾亦疑之。  
 乃使使賜錢。伍  
 伍子胥屬錢之  
 之劍。曰。子以  
 此死。伍子胥  
 仰天歎曰。嗟  
 乎。護臣語爲亂  
 矣。王乃反誅  
 我。我令若

吳王曰く、子の言微きも、吾亦之を疑へりと。乃ち使をして伍子胥に屬鏹の劍を賜はしめて曰く、子此を以て死せよと。伍子胥天を仰ぎ、歎じて曰く、嗟乎護臣詭亂をなす。王乃ち反つて我を誅す。我れ若の父をして罰たらしめたり。若未だ立たざりし時より諸公子立たんことを争へり。我死を以つて之を先王に争ひ、幾んど立つことを得ざりき。若既に立つことを得て、吳國を分ちて我に予へんと欲す。我願みて敢て望まざりき。然るに今若詭臣の言を聞き、以て長者を殺す

父。自若未立時。諸公子爭立。我以死爭之於先王。幾不得立。若既得立。欲分吳國予我。我願不取。望也。然今若聽諛。臣言以殺長者。乃告其舍人曰。必樹吾墓上以梓。令可以爲器。而抉吾眼。懸之吳東門之上。以觀越寇之入。滅吳也。乃自刎而死。吳王聞之大怒。乃取

と。乃ち其の舍人に告げて曰く、必ず吾が墓上に樹うるに梓を以てせよ、以つて器に爲るべからしめん。而して吾が眼を抉りて、吳の東門の上に懸けよ。以つて越の寇の入りて吳を滅すを觀んと。乃ち自ら劉ねて死す。吳王之を聞き、大に怒り、乃ち子胥の尸を取り、盛るに鷓夷の革を以てし、之を江中に浮ぶ。吳人之を憐み、爲めに祠を江上に立つ。因つて命じて胥山と曰ふ。吳王既に伍子胥を誅し、遂に齊を伐つ。齊の鮑氏其の君悼公を殺して陽生を立つ。吳王其の賊を討たんと欲し勝たずして去る。其の後二年、吳王魯衛の君を召し、之を臺阜に會す。其の明年因つて北のかた大いに諸侯を黃池に會し、以つて周室に令す。越王句踐襲うて吳の太子を殺し、吳の兵を破る。吳王之聞き乃ち歸る。使をして幣を厚くせしめて越と平ぐ。後九年越王句踐遂に吳を滅し、吳王夫差を殺し、而して太宰嚭を誅す。其の君に不忠にして外重賄を受け、己と比周せしを以てなり。

● 鄭の名 ● 昭侯の臣 ● 一家中の冠羽を穿る家人 ● 櫛名、其の材を以て櫛を作る ● 棺 ● 馬革

子胥尸。盛以鷓夷革。浮之江中。吳人憐之。爲立祠於江上。因命曰胥山。吳王既誅伍子胥。遂伐齊。齊鮑氏殺其君悼公。而立陽生。吳王欲討其賊。不勝而去。其後二年。吳王召魯衛之君。會之臺阜。其明年。因北大會諸侯於黃池。以令周室。越王句踐殺吳太子。破吳兵。吳王聞之。乃歸。使使厚幣與越平。後九年。越王句踐遂滅吳。殺吳王夫差。而誅太宰嚭。以下不忠於其君。而外受重賂。與己比周也。

● 中國に霸たちんと欲し周室の命を諸侯に傳達す、本文以合は合以の誤かと ● 昭侯にして墓をたす

伍子胥初所與俱亡。故楚太子建之子勝者在於吳。吳王夫差之時。楚惠王欲召勝歸楚。葉公諫曰。勝好勇而陰求死士。殆有私乎。惠王不聽。遂召勝。使居楚

伍子胥初め與に俱に亡けし所の故の楚の太子建の子勝といふ者吳に在り、吳王夫差の時、楚の惠王勝を召して楚に歸さんと欲す。葉公諫めて曰く、勝勇を好んで陰かに死士を求む。殆んど私するあらんかと。惠王聽かず、遂に勝を召し、楚の邊邑鄆に居らしめ、號して白公となす。白公楚に歸りて三年にして、吳、子胥を誅す。白公勝既に楚に歸り、鄭の其の父を殺ししを怨み、乃ち陰かに死士を召ひ、鄭に報いんと求む。楚に歸りて五年鄭を伐たんと請ふ。楚の令尹子西之を許す。兵未だ發せざるに晉鄭を伐つ。鄭救を楚に請ふ。楚子西をして往き救はし

之邊邑鄆。號  
爲白公。白公  
歸楚三年。而  
吳誅子胥。白  
公勝既歸楚。  
怨鄭之殺其  
父。乃陰養死  
士。求報鄭。歸  
楚五年。請伐  
鄭。楚令尹子  
西許之。兵未  
發。而晉伐鄭。  
鄭請救於楚。  
楚使子西往  
救。與盟而還。  
白公勝怒曰。  
非鄭之仇。乃  
子西也。勝自  
砥劔。人問曰。  
何以爲勝。曰。欲以殺子西。子西聞之。笑曰。勝如卵耳。何能爲也。其後四歲。白公勝與石乞

め、與に盟ひて還る。白公勝怒りて曰く、鄭はこれ仇に非ず、乃ち子西なりと。  
勝自ら劔を砥く。人問うて曰く、何をか以て爲すと。勝曰く、以て子西を殺さんと欲すと。子西之を聞きて笑ひて曰く、勝は卵の如きのみ、何ぞよく爲さんやと。其後四歲白公勝石乞と、襲ひて楚の令尹子西と司馬子綦とを朝に殺す。石乞曰く、王を殺さずんば不可なりと。乃ち之を劫かす。王高府に如く。石乞の從者屈固楚の惠王を負ひて亡けて昭夫人の宮に走る。葉公白公亂をなすと聞き、其の國人を率ゐて白公を攻む。白公の徒敗れ、亡けて山中に走り、自殺す。而して石乞を虜にして白公の尸處を問ひ、言はずんば將に烹んとす。石乞の曰く、事成らば卿となり、成らずんば烹らる。固より其の職なりと。終に其の尸處を告ぐることを肯せず、遂に石乞を烹、惠王を求めて復た之を立つ。

● 敢死の士 ● 私心 ● 楚の別府の名、楚の宮庭のある土地 ● 屍のある處

襲殺楚令尹子西。司馬子綦於朝。石乞曰。不殺王不可。乃劫之。王如高府。石乞從者屈固負楚惠王。亡走昭夫人之宮。葉公聞白公爲亂。率其國人攻白公。白公之徒敗。亡走山中。自殺。而虜石乞。而問白公尸處。不言。將烹石乞。石乞曰。事成爲卿。不成而烹。固其職也。終不肯告其尸處。遂烹石乞。而求惠王復立之。

太史公曰。怨毒之於人甚矣哉。王者尙不能行之於臣下。況同列乎。向令伍子胥從奢俱死。何異蠅蟻。粟小義。雪大恥。名垂於後世。悲夫。方子胥乞食於江上。道者。其功謀亦不可勝道者哉。

太史公曰く、怨毒の人に於ける甚しいかな。王者すら尙ほ之を臣下に行ふ能はず、況や同列をや。向に伍子胥をして奢に從ひて俱に死せしめば、何ぞ蠅蟻に異ならん。小義を棄て、大恥を雪ぎ、名後世に垂る。悲しいかな。子胥江上に窘むに方り、道食を乞ひ、志豈嘗て須臾も郢を忘れんや。故に隠忍して功名を就す。烈丈夫に非ざれば、孰かよく此を致さんや。白公如し自立して君とならずんば、其の功謀亦た道ふに勝ふ可からざらんや。

● けちとあり、蠅蟻の死に等しきをいふ ● 心に隠して堪へ忍ぶこと



### 卷六十七

#### 仲尼弟子列傳第七

孔子曰。受業  
身通者七十  
有七人。皆異  
能之士也。德  
行。顏淵。閔子  
騫。冉伯牛。仲  
弓。政事。冉有。  
季路。言語。宰  
我。子貢。文學。  
子游。子夏。師  
也。僻。參也魯。  
榮也愚。由也  
騶。回也廢空。  
賜不受命而

孔子曰く、業を受けて身通する者、七十有七人、皆異能の士なり。德行に、顏淵・閔子騫・冉伯牛・仲弓、政事に冉有・季路、言語に、宰我・子貢、文學に、子游・子夏あり。師や僻、參や魯、柴や愚、由や騶、回や廢、空し、賜は命を受けずして貨殖す。億れば則ち屢々中ると。孔子の嚴に事ふる所は、周に於ては老子、衛に於ては蘧伯玉、齊に於ては晏平仲、楚に於ては老萊子、鄭に於ては子産、魯に於ては孟公綽、數々臧文仲・柳下惠・銅鞮の伯華・介山の子然を稱す。孔子皆之に後れて世を並べず。

- 身六藝に通ずる者
- 子張はその才人に絶えて、邪僻文に通ずるの失あり
- 曾子は性通純なり、魯は師なり
- 柴は愚直
- 子路は粗暴剛強にして禮容なし
- 顏淵は歴々言窮にして極空し
- 子貢は教誨を受けずして貨財を殖すに長ぜり
- これ等の人々に後れて其世を同じうせず

貨殖焉。億則屢中。孔子之所嚴事。於周則老子。於衛蘧伯玉。於齊晏平仲。於楚老萊子。於鄭子産。於魯孟公綽。數稱臧文仲。柳下惠。銅鞮伯華。介山子然。孔子皆後之。不並世。

顏回者。魯人也。字子淵。少孔子三十歲。顏淵問仁。孔子曰。克己復禮。天下歸仁焉。孔子曰。賢哉。回也。一簞食。一瓢飲。在陋巷。人不堪其憂。回不改其樂。回也。如愚。退而省其私。亦足以發。回也不愚。用之則行。捨

顏回は魯の人なり。字は子淵。孔子より少きこと三十歳なり。顏淵仁を問ふ。孔子曰く、己に克ちて禮に復れば、天下仁に歸すと。孔子曰く、賢なるかな。回や、一簞の食、一瓢の飲、陋巷に在りて、人其の憂へに堪へず、回や、其の樂みを改めず。回や愚なるが如し、退いて其の私を省みれば亦以て發するに足る。回や愚ならず。之を用ふれば則ち行ひ、之を捨つれば則ち藏る。唯我と爾と是れあるかなと。回年二十九にして髮盡く白し。蚤く死す。孔子之を哭して慟す。曰く、吾れ回ありてより、門人益々親しむと。魯の哀公問ふ。弟子孰か學を好むとなすと。孔子對へて曰く、顏回といふ者あり、學を好む。怒を遷さず、過を貳せず、不幸、短命にして死す。今や則ち亡しと。

- 論語而淵に出づ
- 論語雍也篇に出づ
- 論語爲政篇に出づ。孔子回に語り、回一言の疑は問ふ所なく

之則藏。唯我與爾有是夫。回年二十九。髮盡白。蚤死。孔子哭之慟。曰。自吾有回。門人益親。魯哀公問。弟子孰爲好學。孔子對曰。有顏回者。好學。不遷怒。不貳過。不幸短命死矣。今也則亡。

して愚者の如くに見ゆ、然れども、退いて其友と辭居せる時を見れば、孔子の説く所の道理を發明せり。論語述而篇に出づ、賢君よく己を用ふれば、出て己が道を行ひ、天下の民を善くし、捨てらるれば退き流れて獨り己を清くす。この時の用務は隨ひ行旅の宜しきを得る者は孔子と回とのみ。論語雍也篇に出づ。

閔損。字子騫。少孔子十五歲。孔子曰。孝哉閔子騫。人不問於其父母昆弟之言。不仕大夫。不食汗君之祿。如有復我者。必在汶上矣。

閔損、字は子騫。孔子より少きこと十五歲なり。孔子曰く、孝なるかな閔子騫、人其の父母昆弟の言に問せずと。大夫に仕へず、汗君の祿を食まず。如し我を復する者あらば、必ず汶の上にならんと。

論語先進篇に出づ、閔子騫父母昆弟に孝友にして父母昆弟みな之を稱揚するのみならず、他人もその父母兄弟の言を過褒として非議するものあらず。論語雍也篇に出づ、重ねて我に食糧する事を強ひらるれば汶水の邊に夫らんとす。

冉耕。字伯牛。

冉耕、字は伯牛。孔子以て德行ありとなす。伯牛惡疾あり。孔子往きて之を

孔子以爲有德行。伯牛有惡疾。孔子往問之。自牖執其手曰。命也夫。斯人也而有斯疾。命也夫。

問ふ。牖より其の手を執りて曰く、命なるかな、斯の人にして斯の疾ある、命なるかなと。

論語雍也篇に出づ、淮南子に「冉伯牛厲疾」と、癩病。惡、惡疾なるを以て人に見ゆるを恥づ。孔子室に入らず、牖より手を執りて永訣の意を表はす。

冉雍。字仲弓。仲弓問政。孔子曰。出門如見大賓。使民如承大祭。在邦無怨。在家無怨。孔子以仲弓爲有德。行。曰。雍也可使南面。仲弓父賤人。孔子

冉雍、字は仲弓。仲弓政を問ふ。孔子曰く、門を出でては大賓を見るが如くし、民を使ふこと、大祭を承るが如くす。邦に在りても怨なく、家に在りても怨なし。孔子仲弓を以て德行ありとなす。曰く、雍や南面せしむべしと。仲弓が父は賤人なり。孔子曰く、犂牛の子も驂にして且つ角ならば用ふるなからんと欲すと雖も、山川其れ諸を捨てんやと。

論語顔淵篇に出づ、論語には政を仁に作る。論語雍也篇に出づ、冉雍の人君の度あるをいふ、南面に人君治を應く位置。論語雍也篇に出づ、牛の毛色の駁(まだら)なるもの。赤色、牲に用ふる毛色なり。角の形正しくして犧牲としての法にあたるもの。神を祭るに用ふ。山川の神。

曰。犂牛之子。辟且角。雖欲勿用。山川其舍諸。

冉求。字子有。少孔子二十九歲。爲季氏宰。季康子問孔子曰。冉求仁乎。曰。千室之邑。百乘之家。求也可使治其賦。仁則吾不知也。復問。子路曰。如孔子對曰。如求。求問曰。聞斯行諸。子曰。聞斯行諸。子路問。曰。有父兄在。

冉求、字は子有。孔子より少きこと二十九歳なり。季氏の宰となる。季康子孔子に問ひて曰く、冉求仁なるやと。曰く、千室の邑、百乗の家、求や其の賦を治めしむべし。仁は則ち吾知らざるなりと。復た問ふ、子路仁なるやと。孔子對へて曰く、求の如しと。求問ひて曰く、聞くがまゝに斯れこれを行はんかと。子曰く、之を行へと。子路問ふ、聞くがまゝに斯れこれを行はんかと。子曰く父兄在すあり、之れを如何ぞ、其れ聞くがまゝに斯れ之を行はんかと。子華之を怪しみ、敢て問ふ、問同じくして答異なりと。孔子曰く、求や退く、故に之を進む。由や人を兼ね、故に之を退くと。

● 論語先施篇に出づ ● 人より道の行ふべきものを聞きて即ち直ちに之を行ふべきか ● 凡そ子弟たる者は常に務め一父兄の心を體して謙遜なるべし、自ら専らにすべからず、父兄の意を察して行ふべし ● 人に加倍す、思ふ處に人を凌ぎてやり過ぐ

如之何其聞斯行之。子華怪之。敢問。問同而答異。孔子曰。求也退。故進之。由也兼人。故退之。

仲由。字子路。卞人也。少孔子九歲。子路性鄙。好勇力。志伉直。冠雄雞。佩豸。豚。陵。暴孔子。孔子設禮。稍誘子路。子路後儒服。委質。因門人。請爲弟子。子路問政。孔子曰。先之勞之。請益。曰。無倦。子路問。君子尚勇乎。孔

仲由、字は子路。卞の人なり。孔子より少きこと九歳なり。子路性鄙にして勇力を好む。志 伉直にして、雄雞を冠し豸豚を佩び、孔子を陵暴す。孔子禮を設けて稍々子路を誘ふ。子路後儒服して質を委し、門人に因りて請ひて弟子となる。子路 政を問ふ。孔子曰く、之に先んじ之を勞すと。益を請ふ。曰く、倦むことなかれと。子路問ふ、君子勇を尚ぶかと。孔子曰く、義を之れ上となす。君子勇を好みて義なければ則ち亂る。小人勇を好みて義なければ則ち盜す。子路聞くありて、未だ之を行ふ能はず、唯聞く有らんことを恐る。孔子曰く、片言以て獄を折むべき者は其れ由なるか、由や勇を好むこと我に過ぎたり、材を取る所なし。由の若きは其の死を得ず、然らん。敵れたる縑袍を衣て、狐貉を衣たる者と立ちて恥ぢざる者は其れ由なるか。由や堂に升れり、未だ室に入らざる

子曰。戰之爲上。君子好勇。而無義。則亂。小人好勇。而無義。則盜。子路有聞。未之能行。唯恐有聞。孔子曰。片言可以折獄者。其由也與。由也。好勇過我。無所取材。若由也。不得其死。然衣敝緼袍。與衣狐貉者立。而不恥者。其由也歟。由也升堂矣。未入于室也。季康子問。仲由仁乎。孔子曰。千乘之國。可使治。其賦不知其仁。子路喜從游。遇長沮。桀溺。荷蓑丈人。子路爲季氏宰。季孫問曰。子路可謂大臣一與。孔子曰。可謂具臣一矣。

なりと。季康子問ふ、仲由は仁なりやと。孔子曰く、千乗の國、其の賦を治めしむ可し、其の仁を知らずと。子路喜びて從ひ遊ぶ。長沮・桀溺、蓑を荷へる丈人に遇ふ。子路季氏の宰となる。季孫問ひて曰く、子路は大臣と謂ふべきかと。孔子曰く、具臣と謂ふべしと。

● 狙野 ● 難産の羽を以て作りたる冠 ● 牡豚の皮を以て作りたる冠 ● 賈に賣、幣物 ● 論語子路篇に出づ ● 身を以て民に率先して行ふ ● 民の勦勞あるものは之を慰めいたはる ● 更に益し加へて教示を講ふ ● 論語陽貨篇に出づ ● 論語顔淵篇に出づ ● 一言幾辭を以て訴訟を断じ、是非曲直の判別を誤らざるは唯々由なるか ● 論語公治長篇に出づ ● 論語先施篇に出づ ● 論語子罕篇に出づ ● 由の學識は既に堂に升りて高明正大の域に至れり、唯々精微深奥の處に至らざるのみ ● 論語公治長篇に出づ、論語には孟武伯問ふに作る、其他文に小異あり ● 論語子路篇に出づ、子路孔子に從ひて、長沮桀溺といふ二人の隱士に遇ふ ● 論語子罕篇に出づ、竹筴を荷へる長老に遇へり。襦はあはれか、土を漉ぶ屨具 ● 論語先進篇に出づ。具臣は其の智能一官一職の用に具ふる臣

子路爲蒲大夫。辭孔子。孔子曰。蒲多壯士。又難治。然吾語汝。恭以敬。可以執事。寬以正。可以比衆。恭正以靜。可以報上。初衛靈公有寵姫。曰南子。靈公太子黃暉得過南子。懼誅出奔。及靈公卒。而夫人欲立公子郢。郢不肯曰。亡人太子之子輒在。於是衛立輒爲君。

子路蒲の大夫となり、孔子に辭す。孔子曰く、蒲に壯士多し。又治め難し。然れども吾汝に語ぐ、恭以て敬なれば、以て勇を執るべく、寬以て正なれば以て衆を比すべく、恭正以て靜なれば、以て上に報す可しと。初め衛の靈公寵姫あり、南子と曰ふ。靈公の太子黃暉、過を南子に得、誅を懼れて出でて奔る。靈公卒するに及びて、夫人公子郢を立てんと欲す。郢肯せずして曰く、亡人太子の子輒在りと。是に於て衛輒を立てて君となす。是を出公となす。出公立ちて十二年、其父黃暉外に居て入ることを得ず。子路衛の大夫孔悝の邑宰たり。黃暉乃ち孔悝と亂を作す。謀りて孔悝の家に入る。遂に其徒と與に襲ひて出公を攻む。出公魯に奔る。而して黃暉入りて立つ。是を莊公となす。孔悝亂をなすに方りて、子路外にあり。之を聞きて、馳せ往きて、子羔の衛の城門を出づるに遇ふ。子路に謂ひて曰く、出公去れり、門已に閉ぢたり。子還るべし。空しく其の禍を受くること毋かれと。子路曰く、其の食を食む者は、其の難を

是爲出公。出公立十二年。其父黃職居外不得入。子路爲衛大夫。孔悝之邑宰。黃職乃與孔悝作亂。謀入孔悝家。遂與其徒襲攻出公。出公奔魯。而黃職入立。是爲莊公。方孔悝作亂。子路在外。聞之而馳往。遇子羔出衛城門。謂子路曰。出公去矣。而門已閉。子可還矣。毋空受其禍。子路曰。食其食。不避其難。子羔卒去。有使者入城。城門開。子路隨而入。造黃職。黃職與孔悝登臺。子路曰。君焉用孔悝。請得而殺之。黃職弗聽。於是子路欲橋臺。黃職懼。乃下石乞壺。擊子路。擊斷子路之纓。子路曰。君子死。而冠不免。遂結纓而死。孔子聞衛亂。曰。嗟乎。由死矣。已而果死。故孔子曰。自吾得由。惡言不聞于耳。是時子貢爲魯使於齊。聞之。避之。子羔卒去。使者之入。城門開。子路隨而入。黃職。造臺。登臺。子路曰。君焉用孔悝。請得而殺之。黃職弗聽。於是子路欲橋臺。黃職懼。乃下石乞壺。擊子路。擊斷子路之纓。子路曰。君子死。而冠不免。遂結纓而死。孔子聞衛亂。曰。嗟乎。由死矣。已而果死。故孔子曰。自吾得由。惡言不聞于耳。

● 衛國舊邑の大夫 ● 魯民を比類す ● 上君恩に報ず

宰予。字子我。利口辯辭。既受業。問三年之喪。不曰久乎。君子三年不爲禮。禮必壞。三年不爲樂。樂必崩。舊穀既沒。新穀既升。鑽燧改火。期可已矣。子曰。於汝安乎。曰。安。汝安則爲之。君子居喪。食旨不甘。聞樂不樂。故弗爲也。宰我出。子曰。予之不仁也。子生三年。然後

宰予、字は子我。利口辯辭あり。既に業を受く。問ふ三年の喪は已だ久しからずや。君子三年禮を爲さずんば、禮必ず壞れん。三年樂を爲さずんば、樂必ず崩れん。舊穀既に没きて、新穀既に昇る。燧を鑽りて火を改む。期にして已むべしと。子曰く、汝に於て安きかと。曰く、安しと。汝安くば則ち之を爲せよ。君子の喪に居る、旨きを食へども甘からず、樂を聞けども樂しからず。故に爲さざるなりと。宰我出づ。子曰く、予の不仁なるや。子生れて三年にして、然る後に父母の懷を免る。夫れ三年の喪は天下の通義なり。宰予晝寢す。子曰く、朽木は雕るべからざるなり、糞土の牆は圻すべからざるなりと。宰我五帝の徳を問ふ。子曰く、予は其の人に非ざるなりと。宰我臨菑の大夫となる。田常と亂をなす。以て其の族を夷けらる。孔子之を恥づ。

● 論語陽貨篇に出づ ● 父母死すれば子は三年に亘る間喪に服するが古禮なり ● 燧は火を取るの木。四時によりて其の木を異にす。故に火を改むは、四時木を改めて一年にして一周するをいふ ● 一周年 ● 天子より庶民に至るまで行べき儀 ● 論語公冶長篇に出づ。晝間寢室に居て寢息するは昏惰の至りなり ● 屬りて本性

免於父母之懷。夫三年之喪。天下之通義也。幸予晝寢。子曰。朽木不可雕也。糞土之牆。不可圻也。幸我問五帝之德。子曰。予非其人也。幸我爲臨菑大夫。與田常作亂。以夷其族。孔子恥之。

端木賜。衛人。字子貢。少孔子三十一歲。子貢利口巧辭。孔子常黜其辯。問曰。汝與回也孰愈。對曰。賜也何敢望回。回也聞一以知十。賜也聞一以知二。子貢既已受業。問曰。賜何人也。孔子曰。汝器也。

端木賜は衛の人なり。字は子貢。孔子より少きこと三十一歳なり。子貢は利口巧辭にして、孔子常に其の辯を黜く。問ひて曰く、汝と回と孰れか愈ると。對へて曰く、賜や何ぞ敢て回を望まん。回や一を聞きて以て十を知る。賜や一を聞きて以て二を知ると。子貢既に己に業を受く。問ひて曰く、賜は何なる人ぞやと。孔子曰く、汝は器なりと。曰く、何の器ぞやと。曰く、瑚璉なりと。陳子禽子貢に問ひて曰く、仲尼焉くにか學ぶと。子貢曰く、文武の道未だ地に墜ちず。人に在り。賢者は其の大なる者を識るし、不賢なる者は其の小なる者を識るす。文武の道あらざるなし。夫子焉くにか學ばざらん。而して亦た何の常の師かこれあらん。又問ひて曰く、孔子是の國に適くや、必ず其の政を聞く、之を求めた

を失へる木 ● 朽木不彫の土 ● 圻、鏝(こて)なり、鏝にて築る ● 五帝の德を明かにすべき人に非ずとの意

曰。何器也。曰。瑚璉也。陳子禽問子貢曰。仲尼焉學。子貢曰。文武之道未墜於地。在人。賢者識其大者。不賢者識其小者。莫不有文武之道。夫子焉不學。而亦何常師之有。又問曰。孔子適是國。必聞其政。求之與。抑與之與。子貢曰。夫子溫良恭儉讓。以得之。夫子之求之也。其諸異乎人之求之也。子貢問曰。富而無驕。貧而無詔。何如。孔子曰。可也。不如貧而樂道。富而好禮。

るか、抑之之を與へたるかと。子貢曰く、夫子は溫良恭儉讓以て之を得たり。夫子の之を求むるや、其れ諸れ人の之を求むるに異なり。子貢問ひて曰く、富みて驕ることなく、貧にして詔ふことなきは何如と。孔子曰く、可なり。貧にして道を樂しみ、富みて禮を好むに如かずと。

● 論語公治長篇に出づ ● 論語公治長篇に出づ ● 有用にして聞くべからざる才能ある人 ● 宗廟に參贊を養ふ器、玉を以て飾り、殷重聞くべからざるもの ● 名は元、陳の人 ● 論語子則篇に出づ ● 文王武王の諱したる諱訓、事実に違したる勿烈と、禮樂政教 ● 人人よく之を記して傳ふる者あり ● 論語學而篇に出づ ● 孔子諸國に至れば必ず其の國の國政の相談に與る、これ孔子より相談に與からん處を求めてなるか抑もまた國君自ら孔子に與り治めんことを願ひしか ● 論語學而篇に出づ ● テイ一通りはそれにてよるし、未だ可とするに足らず ● 道に志しては貧を以て憂とみまがして己が道を樂しむ

田常欲作亂

田常亂を齊に作さんと欲し、高國鮑晏を憚る。故に其の兵を移し以て魯を伐た

於齊。憚高國  
 鮑晏。故移其  
 兵。欲以伐魯。  
 孔子聞之。謂  
 門弟子曰。夫  
 魯墳墓所處。  
 父母之國。國  
 危如此。二三  
 子何爲莫出。  
 子路請出。孔  
 子止之。子張  
 子石請行。孔  
 子弗許。子貢  
 請行。孔子許  
 之。遂行至齊。  
 說田常曰。君  
 之伐魯過矣。  
 夫魯難伐之  
 國。其地狹以  
 卑。其地狹以

んと欲す。孔子之を聞き、門弟子に謂ひて曰く、夫れ魯は墳墓の處る所、父母の國なり。國危きこと此の如し。一三子何爲ぞ出づる莫きと。子路出でんと請ふ。孔子之を止む。子張・子石、行かんと請ふ。孔子許さず。子貢行かんと請ふ。孔子之を許す。遂に行きて齊に至る。田常に説きて曰く、君の魯を伐つは過てり、夫れ魯は伐ち難きの國なり。其の城は薄く以て卑し、其の地は狭く以て泄し。其の君は愚にして不仁なり。大臣僞つて用ふるなし、其の士民又甲兵の事を惡む。これ與に戰ふべからず。君吳を伐つに如かず。夫れ吳は城高く以て厚し、地廣く以て深し。甲堅く以て新し、士選びて以て飽く、重器精兵盡く其の中にあり。又明大夫をして之を守らしむ。これ伐ち易きなりと。田常忿然として色を作して曰く、子の難しとする所は、人の易しとする所、子の易しとする所は、人の難しとする所、而るに以て常に教ふるは何ぞやと。子貢曰く、臣之を聞く、憂内にある者は疆きを攻む。憂外にある者は疆きを攻むと。今君の憂は内にあり。

澁。其君愚而  
 不仁。大臣僞  
 而無用。其士  
 民又惡甲兵  
 之事。此不可  
 與戰。君不如此  
 伐吳。夫吳城  
 高以厚。地廣  
 以深。甲堅以  
 新。士選以飽。  
 重器精兵。盡  
 在其中。又使  
 明大夫守之。  
 此易伐也。田  
 常忿然作色  
 曰。子之所難  
 人之所易。子  
 之所易。人之  
 所難。而以教  
 常。何也。子貢曰。臣之。憂在內者攻疆。憂在外者攻弱。今君憂在內。吾聞君三封而三不

吾聞く、君三たび封せられて三たび成らざるものは、大臣聽かざるもの有ればなりと。今君魯を破りて以て齊を廣めんとす。戰勝ちて以て主を驕らし、國を破りて以て臣を尊くす。而るに君の功與からず。則ち交り日に主に疎からん。是れ君上は主の心を驕らし、下は羣臣を恣にし以て大事を成さんと求む。難し。夫れ上驕れば則ち恣なり。臣驕れば則ち争ふ。これ君上は主と卻あり、下は大臣と交り争ふなり。此の如くなれば則ち君の齊に立つや危し。故に曰く、吳を伐つに如かずと。吳を伐ちて勝たざれば、民人外に死し、大臣内に空し。是れ君上は疆臣の敵なく、下は民人の過なし、主を孤にして齊を制するものは、唯君のみなりと。

● 國內の事件の憂ふべきものある者は、疆き國を攻む。憂ふべき事件の他國の事に關する者は疆き國を敵として戰ふ ● 鮑晏等師を帥りて若し魯を破らば臣辱からん ● 部は隨に同じ

成者。大臣有不聽者一也。今君破魯以虜齊。戰勝以虜主。破國以尊臣。而君之功不與焉。則交日疎。於主。是君上驕主心。下恣羣臣。求以成大事。難矣。夫上驕則恣。臣驕則爭。是君上與主有郤。下與大臣交爭也。如此則君之立於齊危矣。故曰。不如伐吳。伐吳不勝。民人外死。大臣內空。是君上無疆臣之敵。下無民人之過。孤主制齊者。唯君也。

田常曰。善。雖加魯矣。去而之。吳。大臣疑我。奈何。子貢曰。君按兵無伐。臣請往使。吳王令之救魯。而伐齊。君因以兵迎之。田常許之。使子貢南見吳王。說曰。臣聞之。王者不絕世。霸者無疆。

田常曰く、善し。然りと雖も、吾が兵業に已に魯に加へたり。去つて吳にゆかば、大臣我を疑はん。奈何と。子貢曰く、君兵を按じて伐つことなかれ。臣請ふ往きて吳王に使い、之をして魯を救ひて齊を伐たしめん。君因りて兵を以て之を迎へよと。田常これを許し、子貢をして南のかた吳王に見えしむ。説きて曰く、臣これを聞く、王者は世を絶たず、霸者は敵を強くすることなし。千鈞の重きも鉄兩を加へて移ると。今萬乗の齊を以て、千乗の魯を私し、吳と疆を争ふ。竊に王の爲めに之を危む。且つ夫れ魯を救ふは名を顯はすなり。齊を伐つは大利なり。以て泗上の諸侯を撫し、暴齊を誅して以て疆晉を服せば、利焉より大なるは莫し。名は亡魯を存し、實は疆齊を困しむ。智者疑はざるなり

敵。千鈞之重。加鉄兩而移。今以萬乘之齊。而私千乘之魯。與吳争之。且夫救魯。顯名也。伐齊。大利也。以撫泗上諸侯。誅暴齊。以服疆晉。利莫大焉。名存亡魯。實困疆齊。智者不疑也。吳王曰。善。雖然。吾嘗與越戰。棲之會稽。越王苦身勞士。有報我心。子待

と。吳王曰く、善し。然りと雖も、吾嘗て越と戦ひ之を會稽に棲せしむ。越王身を苦しめ士を養ひ、我に報ゆる心あり。子我が越を伐つを待て、而して子に聽かんと。子貢曰く、越の勁きこと魯に過ぎず。吳の強きこと齊に過ぎず。王齊を置き越を伐たば、則ち齊已に魯を平けん。且つ王方に亡を存し、絶を繼ぐを以て名となす。夫れ小越を伐つて疆齊を畏るゝは勇にあらざるなり。夫れ勇者は難を避けず、仁者は約を窮せず、智者は時を失はず、王者は世を絶たず、以て其の義を立つ。今越を存し諸侯に示すに仁を以てし、魯を救ひて齊を伐ち、威晉國に加へば、諸侯必ず相率ゐて吳に朝せん。霸業成らん。且つ王必ず越を惡まば、臣請ふ東のかた越王に見え、兵を出して以て從はしめん。此れ實は越を空しくして名は諸侯を從へて以て伐つなりと。

● 王者は他の國が滅じせんとするを見ては之を救ひて其の世系を絶たしめず、弱者は敵國をレ強大ならしむる事なし ● 千鈞の重きものも、鉄兩といふ僅少なる重さを加へても衡の目が變る ● 惡は畏るといふに同じ



我伐越而聽子。子貢曰。越之勁不過魯。吳之彊不過齊。王置齊而伐越。則齊已平魯矣。且王方以存亡繼絕爲名。夫伐小越而畏大齊。非勇也。夫勇者不避難。仁者不窮約。智者不失時。王者不絕世。以立其義。今存越。示諸侯以仁。救魯伐齊。威加晉國。諸侯必相率而朝吳。霸業成矣。且王必惡越。臣請東見越王。令出兵以從。此實空越名。從諸侯以伐也。

吳王大說。乃使子貢之越。越王除道郊迎。身御至舍。而問曰。此蠻夷之國。大夫何以儼然辱而臨之。子貢曰。今者吾說吳王。以救魯伐齊。其志欲之而畏越。曰。待我伐越。乃可。如此破越。必矣。且夫無

吳王大いに説ぶ。乃ち子貢をして越に之かしまむ。越王道を除ひて郊迎す。身づから御して舍に至りて問ひて曰く、此の蠻夷の國、大夫何を以てか儼然として辱なくして之に臨めるやと。子貢曰く、今吾吳王に説くに魯を救ひ齊を伐つを以てす。其の志之を欲して越を畏る。曰く、我越を伐つを待ちて乃ち可なりと。此の如くんば越を破らんと必せり。且つ夫れ人に報ゆるの志、無くして、人をして之を疑はしむるは拙なり。人に報ゆるの意ありて人に之を知らしむるは殆し。事未だ發せざるに先づ聞ゆるは危し。三者は事を舉ぐるの大患なりと。句踐頓首再拜して曰く、孤嘗て力を料らずして乃ち吳と戦ひ、會稽に困しみ、痛骨髓に入る。日夜脣を焦がし、舌を乾かし、徒に吳王と踵を接して死せんと欲するは

報人志。而令入疑之。搢也。有報人之意。使人知之。殆也。事未發而先聞危也。三者。舉事之大患。句踐頓首再拜曰。孤嘗不料力。乃與吳戰。困於會稽。痛入於骨。日夜焦脣乾舌。徒欲與吳王接踵。而遂問子貢。子貢曰。吳王爲人猛暴。羣臣不堪。國家敵

孤の願なりと。遂に子貢に問ふ。子貢曰く、吳王人と爲り猛暴にして羣臣堪へず。國家數々戦ふに敵れ、士卒忍びず、百姓上を怨み、大臣内に變ず。子胥諫を以て死し、太宰嚭事を用ひ、君の過に順ひて以て其の私を安んず。是れ國を殘ふの治なり。今王誠に士卒を發し、之を佐けて以て其の志を徵へ、重寶以て其の心を説ばし、辭を卑くして以て其の禮を尊くせば、其の齊を伐たんこと必せり。彼戦ひ勝たずんば、王の福なり。戦ひ勝たば、必ず兵を以て晉に臨まん。臣請ふ北晉君に見え、共に之を攻めしめん。吳を弱くせんこと必せり。其の銳兵は齊に盡き、重甲は晉に困しまん。而して王其の敵を制せば、此れ吳を滅さんこと必せりと。越王大に説びて許諾し、子貢に金百鎰・劍一・良矛二を送る。

- 郊外まで出て迎ふ
- 馬車の馬を取す
- 志を變ず
- 願ふ、遊ふ
- 一鎰は金二十兩、一説は三十兩といひ、又二十四兩といふ
- 良きはこ。矛は槍の類なり

於數戰。士卒弗忍。百姓怨上。大臣內變。子胥以諫死。太宰嚭用事。願君之過。以安其私。是殘國之治也。今王誠發士卒。佐之以徵其志。重寶以說其心。卑辭以尊其禮。其伐齊必也。彼戰不勝。王之福矣。戰勝。必以兵臨晉。臣請北見晉君。令共攻之。弱吳必矣。其銳兵盡於齊。重甲困於晉。而王制其敵。此滅吳必矣。越王大說。許諾。送子貢金百鎰。劍一。良矛二。

子貢不受。遂行。報吳王曰。臣敬以大王之言告越王。越王大恐曰。孤不幸少失先人。內不自量。抵罪於吳。軍敗身辱。樓子會稽。國爲虛莽。賴大王之賜。使得奉俎豆。而修祭祀。死不敢忘。何謀之敢慮。

子貢受けずして遂に行く。吳王に報じて曰く、臣敬みて大王の言を以て越王に告ぐ。越王大に恐れて曰く、孤不幸にして少くして先人を失ひ、内自ら量らずして罪を吳に抵し、軍敗れて身辱められ、會稽に棲し、國虛莽となる。大王の賜に頼つて俎豆を奉じて祭祀を修むるを得しめたり、死すとも敢て忘れじ、何の謀か之れ敢て慮らんと。後五日、越大夫種をして頓首して吳王に言はしめて曰く、東海の役臣孤句踐の使者臣種、敢て下吏に修めて左右に問ふ。今竊に大王將に大義を興し、彊きを誅し、弱きを救ひ、暴齊を困しめて周室を撫せんとすと聞く。請ふ、悉く境内の士卒三千人を起し、孤請ふ、自ら堅を被り、銳を執り、以て先づ矢石を受けん。越の賤臣種に因つて先人の藏器甲二十領、缺。

後五日。越使大夫種頓首。言於吳王曰。東海役臣孤句踐使者臣種。敢修下吏。問於左右。今竊聞大王將興大義。誅彊而撫弱。周室請悉起境内士卒三千人。孤請自披堅執銳。以先受矢石。因越賤臣種。奉先人藏器甲二十領。缺。屈盧之矛。步光之劍。以

屈盧の矛、步光の劍を奉じて、以て軍吏を賀すと。吳王大に説び、以て子貢に告げて曰く、越王身ら寡人に從ひて齊を伐たんと欲す、可からんかと。子貢曰く、不可なり。夫れ人の國を空しくし、人の衆を悉くし、又其の君を從ふるは不義なり。君其の幣を受け、其の師を許して其の君を辭せよと。吳王許諾し、乃ち越王に謝す。是に於て、吳王乃ち遂に九郡の兵を發して齊を伐つ。子貢因つて去りて晉に之き、晉君に謂ひて曰く、臣之を聞く、慮先づ定めざれば、以て卒に應ずべからず。兵先づ辨ぜざれば、以て敵に勝つべからず。今夫れ、齊吳と將に戰はんとす。彼戰ひて勝たずんば、越之を亂さんこと必せり。齊と戰ひて勝たば必ず其の兵を以て晉に臨まんと。晉君大に恐れて曰く、之を爲すこと奈何と。子貢曰く、兵を修め、卒を休めて以て之を待てと。晉君許諾す。子貢去つて魯に之く。

● 屈盧、鹿角は削取れ、端となり富貴花々となる ● 投鋒の臣 ● 堅甲を著、銳き兵器を持ち ● 斧也。

賀軍吏。吳王大說。以告子貢。曰。越王欲下身。從寡人一伐齊。可乎。子貢曰。不可。夫空二人之國。悉人之衆。又從其君。不義。君受其幣。許其師。而辭其君。吳王許諾。乃謝越王。於是吳王乃遂發九郡兵。伐齊。子貢因去之。晉謂晉君曰。臣聞之。慮不先定。不可。以應卒。兵不先辨。不可。以勝敵。今夫齊與吳將戰。彼戰而不勝。越亂之必矣。與齊戰而勝。必以其兵臨晉。晉君大恐。曰。爲之奈何。子貢曰。修兵休卒。以待之。晉君許諾。子貢去而之魯。

吳王果與齊人戰於艾陵。大破齊師。獲七將軍之兵。而不歸。果以兵臨晉。與晉人相遇。黃池之上。吳晉爭彊。晉人擊之。大敗吳師。越王聞之。涉江

吳王果して齊人と艾陵に戦ひ、大に齊の師を破り、七將軍の兵を獲て歸らず。果して兵を以て晉に臨み、晉人と黃池の上は相遇ひ、吳と晉と彊を争ふ。晉人之を撃ちて大に吳の師を敗る。越王之を聞きて、江を涉りて吳を襲ひ、城を去ること七里にして軍す。吳王之を聞きて、晉を去りて歸り、越と五湖に戦ふ。三たび戦ひて勝たず、城門守らず、越遂に王宮を圍み、夫差を殺して其の相を戮す。吳を破りて三年、東向して霸たり。故に子貢一たび出でて魯を存し、齊を亂し吳を破り、晉を彊くし、而して越を霸とす。子貢一たび使して、勢をして相破れ

襲吳。去城七里而軍。吳王聞之。去晉而歸。與越戰于五湖。三戰不勝。城門不守。越遂圍王宮。殺夫差而戮其相。破吳三年。東向而霸。故子貢一出。存魯亂齊。破吳彊晉。而霸越。子貢一使。使勢相破。十年之中。五國各有變。子貢好廢舉。與時轉貨。賞喜揚人之美。不能匿人之過。常相魯衛。家累千金。卒終于齊。

しむ。十年の中五國各々變あり。子貢廢舉を好みて、時と與に貨貨を轉す。喜みて人の美を揚げ、人の過を匿す能はず。常に魯衛に相たり。家千金を累ね、卒に齊に終る。

● 物値騰しうして之を買い、物値くして之を賣ること ● 時を逐ひ時に隨ひて貨を轉々して其資を増殖するをいふ

言偃。吳人。字子游。少孔子四十五歲。子游既已受業。爲武城宰。孔子過。聞絃歌終于齊。

言偃。吳人。字子游。少孔子四十五歲。子游既已受業。爲武城宰。孔子過。聞絃歌終于齊。

言偃は吳の人なり。字は子游、孔子より少きこと四十五歳なり。子游既に已に業を受けて武城の宰と爲る。孔子過ぎて絃歌の聲を聞く、孔子莞爾として笑ひて曰く、雞を割くに焉んぞ牛刀を用ひんと。子游曰く、昔者偃諸を夫子に聞く、曰く、君子道を學べば則ち人を愛し、小人道を學べば則ち使ひ易しと。孔子

之聲。孔子莞爾而笑曰。割雞焉用牛刀。子游曰。昔者。偃聞諸夫子。曰。君子學道則愛人。小人學道則易使。孔子曰。二三子。偃之言是也。前言戲之耳。孔子以爲子游習於文學。

曰く、「二三子よ。偃の言是なり。前言は之に戯れしのみと。孔子以て子游文學に習へりと爲す。」

● 論語陽貨篇に出づ ● 子游は孔子の意を悟り得ずしてかく反問せしなり ● 論語先進篇に曰く「文鳥子游」

ト商。字子夏。少孔子四十四歲。子夏問。巧笑倩兮。美目盼兮。素以爲絢兮。何謂也。子曰。繪事後素。曰。禮後乎。孔子曰。商始可與言詩。

ト商。字は子夏。孔子より少きこと四十四歳なり。子夏問ふ、巧笑倩たり、美目盼たり、素以て絢を爲すとは何の謂ぞやと。子曰く、繪事は素を後にすと。曰く、禮は後なるかと。孔子曰く、商や、始めて與に詩を言ふ可きのみと。子夏問ふ、師と商とは孰れか賢れると。子曰く、師や過ぎたり、商や及ばすと。然らば則ち師は愈れるかと。曰く、過ぎたるは猶ほ及ばざるがごとし。子夏に謂ひて曰く、汝君子の儒と爲れ、小人の儒となるなかれと。孔子既に没す。子夏西河

に居りて教授す。魏の文侯の師となる。其の子死す。之を哭して明を失す。

● 論語八佾篇に出づ ● 鄭く笑ひて愛稱ある笑聲あり、美しき目は黑白鮮やかにナマリ、この天成の美質に加ふるに白粉を加へば以て文采を添ふ ● 論語先進篇に出づ ● 論語雍也篇に出づ

已矣。子貢問。師與商孰賢。子曰。師也過。商也不及。然則師愈與。曰。過猶不及。子謂子夏曰。汝爲君子儒。無爲小人儒。孔子既没。子夏居西河教授。爲魏文侯師。其子死。哭之失明。

顓孫師。陳人。字子張。少孔子四十八歲。子張問于祿。孔子曰。多聞闕疑。慎言。其則寡尤。多見闕殆。慎行。其餘則寡悔。言寡尤。行寡悔。祿在其中。

顓孫師は陳の人なり。字は子張。孔子より少きこと四十八歳なり。子張祿を干むることを問ふ、孔子曰く、多く聞きて疑はしきを闕き、慎みて其餘を言へば則ち尤寡し。多く見て殆きを闕き、慎しみて其餘を行へば、則ち悔寡し。言尤寡く、行ひ悔寡ければ、祿其の中にありと。他日從ひて陳蔡の間（二）に在り、因りて行はれんことを問ふ。孔子曰く、言忠信、行篤敬ならば蠻貊の國と雖も行はれん。言忠信ならず、行篤敬ならずんば、州里と雖も行はれんや。立てば則ち其の前に參はるを見るなり。輿に在れば則ち其の衡に倚るを見るな

矣。他日從在陳蔡間。因問孔子曰。言忠信。行篤敬。雖蠻貊之國。行也。言不忠信。行不篤敬。雖州里。行乎哉。立則見其參於前也。在行則見其倚於衡也。夫然後行。子張書諸紳。子張問。士何如斯可謂之達矣。孔子曰。何哉。爾所

り。夫れ然る後に行はれんと。子張諸を紳に書す。子張問ふ、士は何如なる斯れ之を達と謂ふべきかと。孔子曰く、何ぞや。爾が謂ふ所の達とはと。子張對へて曰く、國に在りても必ず聞え、家に在りても必ず聞ゆと。孔子曰く、是れ聞なり、達にあらざるなり。夫れ達とは質直にして義を好み、言を察して色を觀、慮り以て人に下る。國及び家に在る、必ず達す。夫れ聞なるものは色仁を取りて行は達ふ。之に居て疑はず、國及び家に在りて必ず聞ゆと。

● 爲政篇に出づ ● 上君主等に對して求むるなり、職位をわかし求むるをいふ ● 多く聞きて、未だ信ぜず未だ安んぜざる所のものを取り除きてかくなり ● 罪の外より至るもの、咎 ● 論語衛靈公篇に出づ、事の障りなく意の如くに行はれんには如何にすべきかと問ふ ● 二千五百家を州となし、五家を隣となし、五隣を里となす ● 立てる時には忠信篤敬がわが前に響りてある如く常に相親み、車に乗れる時には忠信篤敬がわが車の衡の上に倚りてあるを見るが如く須臾も離れずして後始めて行はる ● 大帶 ● 論語顔淵篇に出づ

謂達者。子張對曰。在國必聞。在家必聞。孔子曰。是聞也。非達也。夫達者。質直而好義。察言而觀色。慮以下人。在國及家必達。夫聞也者。色取仁而行違。居之不疑。在國及家必聞。

曾參。南武城人。字子輿。少孔子四十六歲。孔子以爲能通孝道。故授之業。作孝經。死於魯。

曾參は南武城の人なり。字は子輿。孔子より少きこと四十六歳なり。孔子以て能く孝道に通ずとなす。故に之に業を授く。孝經を作る。魯に死す。

澹臺滅明。武城人。字子羽。少孔子三十九歲。狀貌甚惡。欲事孔子。孔子以爲材薄。既已受業。退而修行。行不由徑。非公事不見。荆大夫。南游至江。從弟子三百。

澹臺滅明は武城の人なり。字は子羽。孔子より少きこと二十九歳。狀貌甚だ惡し。孔子に事へんと欲す。孔子以て材薄しとなす。既に己に業を受け退きて行を修む。行くに徑に由らず。公事にあらずんば卿大夫に見えず。南游して江に至る。弟子三百人を從へ、取予去就を設く、名諸侯に施く。孔子之を聞きて曰く、吾言を以て人を取る、之を宰予に失ひ、貌を以て人を取る、之を子羽に失へりと。

● 論語雍也篇に出づ

人。設取予去就。名施乎諸侯。孔子聞之曰。吾以言取人。失之。宰予。以貌取人。失之子羽。宓不齊。字子賤。少孔子四十九歲。孔子謂子賤君子哉。魯無君子。斯焉取斯。子賤爲單父宰。反命於孔子。曰。此國有賢不齊者五人。教不齊所以治者。孔子曰。惜哉。不齊所治者小。所治者大。則庶幾矣。

宓不齊、字は子賤。孔子より少きこと四十九歳。孔子子賤を謂ひて、君子なるかな、魯に君子無くば斯れ焉んぞ斯を取らんと。子賤單父の宰となり、孔子に反命して曰く、此の國不齊より賢なる者五人あり。不齊に治むる所以のものを教ふと。孔子曰く、惜しいかな不齊の治むる所の者は小なり。治むる所のもの大ならば、則ち庶幾からんか。

● 論語公治長篇に出づ、文に少異あり ● 地名 ● 復命、任地の事を報告する也

原憲。字子思。子思問。恥。孔子曰。國有道。國無道。穀也。子思曰。恥也。子思曰。

原憲、字は子思。子思恥を問ふ。孔子曰く、國道あれば穀す。國道なきに穀するは恥なりと。子思曰く、克伐怨欲行はれずんば、以て仁となすべきかと。孔子曰く、以て難しと爲すべし。仁は則ち吾知らざるなりと。孔子卒す。原憲亡け

克伐怨欲不行焉。可以爲仁乎。孔子曰。仁則吾弗知也。孔子卒。原憲亡。在草澤中。子貢相衛。而結駟連騎。排蔡蘧入窮閭。過謝原憲。憲攝敝衣冠。見子貢。子貢恥之曰。夫子豈病乎。原憲曰。吾聞之。無財者謂之貧。學道而不能行者謂之病。若憲貧也。非病也。子貢慙不憚而去。終身恥其言之過也。

公治長は齊の人なり。字は子長。孔子曰く、長妻はすべきなり。累繼の中に在りと雖も、其の罪にあらざるなりと。其の子を以て之に妻はす。

● 論語公治長篇に出づ ● 緯義に同じ、原憲にて擧ぐの義。古へ賦中に「罪人を原憲にて拘繫せしむり」

以<sub>二</sub>其子<sub>一</sub>妻<sub>レ</sub>之。  
南宮括。字子容。問<sub>二</sub>孔子<sub>一</sub>曰。羿善射。冥盪舟。俱不<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>其死<sub>一</sub>。然禹稷躬稼而有<sub>二</sub>天下<sub>一</sub>。孔子弗<sub>レ</sub>答。容出。孔子曰。君子哉若人。上<sub>レ</sub>德哉若人。國有道不<sub>レ</sub>廢。國無<sub>レ</sub>道免<sub>二</sub>於刑戮<sub>一</sub>。三復白珪之玷。以<sub>二</sub>其兄之子<sub>一</sub>妻<sub>レ</sub>之。

孔子其の女を以て長に妻はせしなり  
南宮括、字は子容。孔子に問ひて曰く、羿射を善くし、冥舟を盪かす。俱に其の死を得ざる事然り。禹稷躬稼して天下を有つと。孔子答へず。容出づ。孔子曰く、君子なるかな、若のごとき人。徳を上ぶかな、若のごとき人。國道有れば廢せられず、國道無きも刑戮に免ると。白珪の玷たるを三復す。其の兄の子を以て之に妻はす。

● 論語憲問篇に出づ。 ● 論語公冶長篇に出づ。 ● 論語先進篇に出づ。詩經大雅抑篇に「白珪之玷、不可磨也、斯言之玷、不可磨也」 ● 此の詩を誦する毎に再三反覆して其の意を味ふ ● 孔子の兄の女を子容の妻とす

公皙哀。字季次。孔子曰。天下無<sub>レ</sub>行。多爲<sub>二</sub>家臣<sub>一</sub>。仕<sub>二</sub>於都<sub>一</sub>。

公皙哀、字は季次。孔子曰く、天下行ひ無し。多く家臣となつて都に仕ふ。唯々季次のみ未だ嘗て仕へずと。

● 未だ嘗て節を屈して人臣とならざ故に孔子之を賞嘆せしなり

唯季次未嘗仕。

曾蒧。字皙。侍<sub>二</sub>孔子<sub>一</sub>。孔子曰。言<sub>二</sub>爾志<sub>一</sub>蒧曰。春服既成。冠者五六人。童子六七人。浴乎沂。風乎舞雩。詠而歸。孔子喟爾歎曰。吾與蒧也。

曾蒧、字は皙。孔子に侍す。孔子曰く、爾の志を言へと。蒧曰く、春服既に成る。冠者五六人、童子六七人、沂に浴し、舞雩に風し、詠じて歸らんと。孔子喟爾として歎じて曰く、吾は蒧に與せんと。

● 論語先進篇に出づ ● 河の名。沂に浴すは沂水の濱に出て沐浴するなり ● 天を祭りて雨乞などを祈る小高き處に上りて、風に吹かれて歌を詠る

顔無繇。字路。路者顔回父。父子嘗各異<sub>レ</sub>時。事<sub>二</sub>孔子<sub>一</sub>。顔回死。顔路貧。請<sub>二</sub>孔子<sub>一</sub>車<sub>一</sub>以<sub>レ</sub>葬。孔子曰。材不材。亦各言<sub>二</sub>

顔無繇、字は路。路は顔回の父なり。父子嘗て各々時を異にして孔子に事ふ。顔回死す。顔路貧し。孔子の車を請ひて以て葬らんとす。孔子曰く、材も不材も亦各々其の子と言ふ。鯉や死せしとき、棺ありて槨無かりき。吾徒行して以つて之が槨を爲らざりしは、吾大夫の後に從ひて、以つて徒行すべからざるを以つてなりと。

其子也。鯉也。死。有棺而無槨。吾不徒行。以爲之槨。以下。吾從大夫之後。不可徒行。

● 論語先進篇に出づ ● 孔子乗用の車を調ひうけて、賣りて以て顔回の槨を作らんと調ひしなり ● 子に才不才の別あれど、父よりして視れば、親の情は異なるなし ● 孔子の子。孔子に先だちて死す ● 死したる臣に槨を作らんがため乗用の車を賣りて葬行する事はなかりき ● 孔子時に大夫たり。大夫の後に従ふ云々は孔子の諱なり

商瞿。魯人。字子木。少孔子二十九歲。孔子傳易於瞿。瞿傳楚人馯臂子弘。弘傳江東人矯子庸疵。疵傳燕人周子家豎。豎傳淳于人。光子乘羽。羽傳齊人田子莊何。何傳東武人王子中同。同傳菑川人楊何。何元朔中。以治易爲漢中大夫。

商瞿は魯の人。字は子木。孔子より少きこと二十九歳なり。孔子易を瞿に傳ふ。瞿楚の人馯臂子弘に傳ふ。弘江東の人矯子庸疵に傳ふ。疵燕の人周子家豎に傳ふ。豎淳子の人光子乘羽に傳ふ。羽齊人田子莊何に傳ふ。何東武の人王子中同に傳ふ。同菑川の人楊何に傳ふ。何元朔中、易を治むるを以て漢中の大夫と爲る。

● 漢の武帝の年表

高柴。字子羔。少孔子三十歲。子羔長不盈五尺。受業孔子。孔子以爲愚。子路使子羔爲費。子宰。孔子曰。賊夫人之子。子路曰。有民人焉。有社稷焉。何必讀書。然後爲學。孔子曰。是故惡二夫。佞者一。

高柴、字は子羔、孔子より少きこと三十歳。子羔長五尺に盈たず。業を孔子に受く。孔子以て愚となす。子路子羔をして費郈の宰とならしむ。孔子曰く、夫の人の子を賊はんと。子路曰く、民人あり、社稷あり、何ぞ必ずしも書を讀みて然る後に學と爲さんと。孔子曰く、是の故に夫の佞者を惡むと。

● 論語先進篇に出づ ● 地名

漆彫開。字子開。孔子開をして仕へしむ。對へて曰く、吾斯れを之れ未だ信

する能はずと。孔子説ふ。

● 論語公冶長篇に出づ ● 仕ふるの道、未だ能く究めずはざるをいふ

漆彫開。字子開。孔子使開仕對曰。吾斯之未だ能信。孔子説。公伯僚。字子周。周子路を季孫に愬ふ。子服景伯以て孔子に告げて曰く、夫子固僚に惑へる志あり。吾が力猶ほ能く諸を市朝に肆さんと。孔子曰く、道

公伯僚、字は子周。周子路を季孫に愬ふ。子服景伯以て孔子に告げて曰く、夫子固僚に惑へる志あり。吾が力猶ほ能く諸を市朝に肆さんと。孔子曰く、道



景伯以告孔子。子曰。夫子固有志。志。僚也。吾力猶能肆諸市朝。孔子曰。道之將行。命也。道之將廢。命也。公伯僚其如命何。

の將に行はれんとするや命なり。道の將に廢れんとするも命なり。公伯僚其れ命を如何せん。

● 論語憲問篇に出づ

司馬耕。字子牛。牛多言而躁。問仁於孔子。孔子曰。仁者其言也訥。曰。其言也訥。斯可謂之仁乎。子曰。爲之難。言之得無訥乎。問君子。子曰。君子不憂不懼。曰。不

司馬耕、字は子牛。牛多言にして躁なり。仁を孔子に問ふ。孔子曰く、仁者は其の言や訥すと。曰く、其の言や訥す。斯れ之を仁と謂ふ可きかと。子曰く、之を爲すこと難し。之を言ふこと訥することなきを得んやと。君子を問ふ。子曰く、君子は憂へず、懼れずと。曰く、憂へず、懼れず。斯れこれを君子と謂ふべきかと。子曰く、内に省みて疚しからずんば、夫れ何をか憂へ、何をか懼れんと。

● 論語顔淵篇に出づ

● 訥は難なり。口言はんと欲して心に之を言ふをばつかるなり

● 論語顔淵篇に出づ

憂不懼。斯可謂之君子乎。子曰。内省不疚。夫何憂何懼。

樊須。字子遲。少孔子三十六歲。樊遲請學稼。孔子曰。吾不如老農。請學圃。曰。吾不如老圃。樊遲出。孔子曰。小人哉。樊須也。上好禮。則民莫敢不敬。上好義。則民莫敢不服。上好信。則民莫敢不用情。夫如是。則四方之民。襁負其子而

樊須、字は子遲。孔子より少きこと三十六歲。樊遲稼を學ばんことを請ふ。孔子曰く、吾老農に如かずと。圃を學ばんことを請ふ。曰く、吾老圃に如かずと。樊遲出づ。孔子曰く、小人なるかな樊須や。上禮を好めば、則ち民敢て敬せざるなし。上義を好めば則ち民敢て服せざる莫し。上信を好めば則ち民敢て情を用ひざる莫し。夫れ是の如くんば則ち四方の民其の子を襁負して至らん、焉んぞ稼を用ひんと。樊遲仁を問ふ。子曰く、人を愛すと。智を問ふ。曰く、人を知る

- 論語子路篇に出づ
- 五穀を種うるること
- 蔬菜を種うるること
- 器量小なる人
- むつきにて小兒を背に負ふこと
- 論語顔淵篇に出づ

有若。少孔子

有若、孔子より少きこと十三歲なり。有若曰く、禮の用、和を貴しと爲す。

十三歲。有若曰。禮之用和爲貴。先王之遺斯爲美。小大由之。有所不行。知和而和。不以禮節之。亦不可行也。信近於義。言可復也。恭近於禮。遠恥辱也。因不失其親。亦可宗也。孔子既沒。弟子思慕。有若狀似孔子。立爲師。師之如夫子時也。他日弟子進

先王の道斯れ美となす。小大之に由る。行はれざる所あり。和を知つて和するも禮を以て之を節せざれば、亦た行はるべからざるなり。信義に近づけば言復むべきなり。恭禮に近づけば恥辱に遠ざかるなり。因ること其の親を失はざれば、亦た宗むべきなりと。孔子既に没し、弟子思慕す。有若の狀孔子に似たり。弟子相與に共に立てて師となす。之を師とすること夫子の時の如し。他日弟子進み問ひて曰く、昔夫子行くに當り、弟子をして雨具を持たしむ。已にして果して雨ふる。弟子問ひて曰く、夫子何を以てか之を知ると。夫子曰く、詩に云はずや、月畢に離り滂沱たらしむと、昨暮月畢に宿らずやと。他の日月畢に宿る、竟に雨ふらず。商瞿年長じて子なし。其の母爲めに室を取らんとす。孔子之を齊に使せしむ。瞿が母之を請ふ。孔子曰く、憂ふることなかれ。瞿年四十の後、當に五丈夫の子有るべしと。已にして果して然り。敢て問ふ、夫子何を以て此を知る。有若默然として以て應ふるなし。弟子起ちて曰く、有子之を避けよ、此れ子

の座にあらざるなりと。

● 餘語也篇に出づ ● 詩經小雅漸漸之石、畢は星の名 ● 大雨の降るさま ● 昨暮月畢に宿りたるに非ずや、故に我今日の雨を知ると ● 然るに他日月畢に宿りながら雨ふらぬ事ありき、その詳如何

問曰。昔夫子當行。使弟子持雨具。已而果雨。弟子問曰。夫子何以知之。夫子曰。詩不云乎。月離于畢。俾滂沱矣。昨暮月不宿畢乎。他日月宿畢。竟不雨。商瞿年長無子。其母爲取室。孔子使之齊。瞿母請之。孔子曰。無憂。瞿年四十後。當有五丈夫子。已而果然。敢問。夫子何以知此。有若默然無以應。弟子起曰。有子避之。此非子之座也。

公西赤、字は子華、孔子より少きこと四十二歳なり。子華齊に使す。冉有其母の爲めに粟を請ふ。孔子曰く、之に釜を與へよと。釜を請ふ。曰く、之に庾を與へよと。冉子之に粟五秉を與ふ。孔子曰く、赤の齊に適くや、肥馬に乗り、輕裘を衣たり。吾聞く、君子は急に周して富めるに繼がずと。

● 餘語也篇に出づ ● 六斗四升即ち我が五升七合餘 ● 十六斗即ち我が一斗四升三合餘 ● 乘は十六斛五秉は六十斛。我が七石一斗八升六合餘 ● 剛に同じ。足らざるを補ふ。救済す

公西赤、字子華、少孔子四十二歳。子華使於齊。冉有爲其母請粟。孔子曰。與之釜。請益。曰。與之庾。冉子與之粟五秉。孔子曰。赤之適齊也。乘肥馬。衣輕裘。吾聞君子周急不繼富。

巫馬施。字子旗。少孔子三十歲。陳司敗問孔子曰。魯昭公知禮乎。孔子曰。知禮。退而揖巫馬旗曰。吾聞君子不黨。君子亦黨乎。魯君娶吳女爲夫人。命之爲孟。子孟子姓姬。諱稱同姓。故謂之孟子。魯君而知禮。孰不知禮。施以告孔子。孔子曰。丘也幸。苟有過人必知。

巫馬施、字は子旗。孔子より少きこと三十歳。陳の司敗孔子に問ひて曰く、魯の昭公禮を知れるかと。孔子曰く、禮を知れりと。退きて巫馬旗を揖して曰く、吾聞く、君子は黨せずと。君子も亦黨するか。魯君吳の女を娶りて夫人となし、之を命けて孟子と爲す。孟子の姓は姬。同姓を稱するを諱む。故に之を孟子と謂ふ。魯君にして禮を知らば、孰か禮を知らざらんと。施以て孔子に告ぐ。孔子曰く、丘や、幸なり、苟も過あれば、人必ず之を知ると。臣君親の惡を言ふべからず。爲めに諱む者は禮なり。

梁鱣、字は叔魚。孔子より少きこと二十九歳。

顔幸、字は子柳。孔子より少きこと四十六歳。

冉孺、字は子魯。孔子より少きこと五十歳。

曹卹、字は子循。孔子より少きこと五十歳。

伯虔、字は子析。孔子より少きこと五十歳。

之。臣不可言君親之惡。爲諱者禮也。

梁鱣。字叔魚。少孔子二十九歳。顔幸。字子柳。少孔子四十六歳。冉孺。字子魯。少孔子五十歳。曹卹。字子循。少孔子五十歳。伯虔。字子析。少孔子五十歳。公孫龍。字子石。孔子より少きこと五十三歳。

公孫龍、字は子石。孔子より少きこと五十三歳。

● 論語述而篇に出づ ● 官名、刑名なり

自子石已右三十五人。顯有二年名。及受業。聞見于書傳。其四十有二人。無年。及不見書傳者。紀于左。冉季。字子產。公祖句茲。字子之。秦祖。字子南。

子石より已右の三十五人、顯に年名あり、及び業を受けしこと書傳に聞見す。其の四十有二人年なく、及び書傳に見えざる者は左に紀す。

冉季、字は子産。

公祖句茲、字は子之。

秦祖、字は子南。

漆雕哆、字は子斂。

顔高、字は子驕。

漆雕哆。字子斂。  
 顏高。字子驕。  
 漆雕徒。父。  
 壤駟赤。字子  
 徒。  
 商澤。  
 石作蜀。字子  
 明。  
 任不齊。字選。  
 公良孺。字子  
 正。  
 后處。字子里。  
 秦冉。字開。  
 公夏首。字乘。  
 奚容蒧。字子  
 皙。  
 公堅定。字子  
 中。  
 顏祖。字襄。

漆雕徒父。  
 壤駟赤、字は子徒。  
 商澤。  
 石作蜀、字は子明。  
 任不齊、字は選。  
 公良孺、字は子正。  
 后處、字は子里。  
 秦冉、字は開。  
 公夏首、字は乘。  
 奚容蒧、字は子皙。  
 公堅定、字は子中。  
 顏祖、字は襄。

鄒單。字子家。  
 句井疆。  
 罕父黑。字子  
 索。  
 秦商。字子丕。  
 申黨。字周。  
 顏之僕。字叔。  
 榮旂。字子祺。  
 縣成。字子祺。  
 左人郢。字行。  
 燕伋。字思。  
 鄭國。字子徒。  
 秦非。字子之。  
 施之常。字子  
 恆。  
 顏贍。字子聲。  
 步叔乘。字子  
 車。  
 原尤籍。  
 樂欬。字子聲。

鄒單、字は子家。  
 句井疆。  
 罕父黑、字は子索。  
 秦商、字は子丕。  
 申黨、字は周。  
 顏之僕、字は叔。  
 榮旂、字は子祺。  
 縣成、字は子祺。  
 左人郢、字は行。  
 燕伋、字は思。  
 鄭國、字は子徒。  
 秦非、字は子之。

廉絜。字庸。  
 叔仲會。字子期。  
 顏何。字冉。  
 狄黑。字皙。  
 邾戾。字子斂。  
 孔忠。  
 公西與如。字子上。  
 公西蒧。字子上。

施之常。字是子恆。  
 顏噲。字是子聲。  
 步叔乘。字是子車。  
 原亢籍。  
 樂歎。字是子聲。  
 廉絜。字是庸。  
 叔仲會。字是子期。  
 顏何。字是冉。  
 狄黑。字是皙。  
 邾選。字是子斂。  
 孔忠。  
 公西與如。字是子上。

太史公曰。學者多稱七十子之徒。譽者或過其實。毀者或損其真。鈞之未視。厥容貌。則論言。弟子籍。出孔氏古文。近是。余以弟子名。姓文字。悉取。論語弟子問。并次爲篇。疑者闕焉。

公西蒧。字是子上。

● 年齡と姓名と顯はに書傳に聞見す

太史公曰く、學者多く七十子の徒を稱するに、譽むる者或は其の實に過ぎ、毀る者或は其の眞を損す。之を鈞くするに、未だ厥の容貌を視す。則ち論言す。弟子籍は孔氏の古文より出づ。是に近し。余弟子の姓名文字を以て、悉く論語の弟子問より取り、并せ次いで篇と爲す。疑はしきものは闕きたり。

● 毀譽の評論をなすもの均しく一概にして言ふに、蓋し七十子の容貌をも見ずして蓋りに評論するものなり  
 ● 論語中にある諸弟子の質問問答

卷六十八

商君列傳第八

商君者。衛之諸庶孽公子也。名鞅。姓公孫氏。其祖本姬姓也。鞅少好刑名之學。事魏相公叔座。爲中庶子。公叔座知其賢。未及進。會座病。魏惠王親往問病。曰。公叔病有如不可諱。將奈何。

商君は、衛の諸庶孽公子なり。名は鞅。姓は公孫氏。其の祖は本姬姓なり。鞅少くして刑名の學を好む。魏の相公叔座に事へ、中庶子となる。公叔座其の賢を知り、未だ進むるに及ばずして、座の病むに會ふ。魏の惠王親ら往きて病を問ふ。曰く、公叔病む。諱むべからざる如きことあらば、將に社稷を奈何せん。公叔曰く、座の中庶子公孫鞅、年少しと雖も、奇才あり。願くは王國を擧げて之に聽けと。王嘿然たり。王且に去らんとす。座人を屏けて言ひて曰く、王即し鞅を用ふるを聽さずんば、必ず之を殺し、境を出でしむるなかれと。王許諾して去る。公叔座鞅を召し謝して曰く、今王以て相となすべき者を問ふ。我若を言ふ。王色我に許さず。我方に君を先にし、臣を後にす。因りて王に即し鞅を用

社稷何。公叔曰。座之中庶子公孫鞅。年雖少有奇才。願王舉國而聽之。王嘿然。王且去。座屏人言曰。王即不聽。用鞅。必殺之。無令出境。王許諾而去。公叔座召鞅謝曰。今者王問。可以爲相者。我言若。王色不許。我我方先君後臣。因謂王。即弗用鞅。當殺之。王許我。汝可疾去矣。且見禽。鞅曰。彼王不能用君之言。任也。臣又安能用君之言。殺臣乎。卒不去。惠王既去而謂左右曰。公叔病甚。悲乎。欲令寡人以國聽公孫鞅也。豈不悖哉。公叔既死。

ひずんば當に之を殺すべしと謂ふ。王我に許す。汝疾く去るべし。且に禽せられんとすと。鞅曰く、彼の王君の言を用ひて臣に任する能はずんば、又安んぞ能く君の言を用ひて臣を殺さんやと。卒に去らず。惠王既に去つて左右に謂ひて曰く、公叔病甚し。悲しいかな。寡人をして國を以て公孫鞅に聽かしめんと欲す。豈悖らざらんやと。公叔既に死す。

- 僇非子の唱へたる愚説、形名の義、其名を以て其實を賣め免も假借する事なき愚説
- 大夫の家の役名
- 萬一死する如きことあらば
- 默然
- 王の顔色が意見を容れざるが如くなり
- 疾重くして精神亂れ狂
- へるならざらんやと也

修下經公之業。東復侵地。逄四入秦。因孝公寵臣景監以求見孝公。孝公既見衛鞅。語事良久。孝公時時睡弗聽。罷而孝公怒景監曰。子之客妄人耳。安足用邪。景監以讓衛鞅。衛鞅曰。吾說公以帝道。其志不閉。悟矣。後五日復求見鞅。鞅復見孝公。益愈。然而未中

公に見えんことを求む。孝公既に衛鞅を見て事を語ることも良久し。孝公時時睡りて聽かず。罷めて孝公景監を怒りて曰く、子の客は妄人のみ。安んどう用ふるに足らんやと。景監以て衛鞅を讓む。衛鞅曰く、吾公に説くに帝道を以てす。其の志、開悟せずと。後五日復鞅を見えしめんを求む。鞅復た孝公に見えて益々愈々す。然り而して未だ旨に中らず。罷めて孝公復た景監を讓む。景監また鞅を讓む。鞅曰く、吾公に説くに王道を以てす、而して未だ入らざるなり。請ふ復鞅を見えしめよと。鞅復た孝公に見ゆ。孝公之を善みす。而れども未だ用ひず。罷めて去る。孝公景監に謂ひて曰く、汝の客善し。與に語る可しと。鞅曰く、吾公に説くに霸道を以てす。其の意之を用ひんと欲せり。誠に復た我を見えしめよ、我之を知れりと。衛鞅復た孝公に見ゆ。公與に語つて、自ら鄰の席より前むを知らず。語ることも數日にして厭かず。景監曰く、子何を以てか吾が君に中つ。吾が君の驩べる甚しきやと。鞅曰く、吾君に説くに、帝王の道三代に比ぶを以てす。而して君

旨。罷而孝公復讓景監。景監亦讓鞅。鞅曰。吾説公以王道。而未入也。請復見鞅。鞅復見孝公。孝公善之。而未用也。罷而去。孝公謂景監曰。汝客善。可與語矣。鞅曰。吾説公以霸道。其意欲用之矣。誠復見我。我知之矣。衛鞅復見孝公。公與語。不自知鄰之席也。語數日。不厭。景監曰。子何以中吾君。吾君之驩甚也。鞅曰。吾説君以帝王之道。比三代。而君曰。久遠。吾不能待。且賢君者。各及其身。顯名天下。安能邑邑待數十年。以成帝王乎。故吾以強國之術説君。君大説之耳。然亦難以比德於殷周矣。

曰く、久遠なり、吾待つ能はず。且つ賢君は、各々其の身に及びて名を天下に顯はせり、安んぞ能く邑邑として數十百年を待ちて以て帝王を成さんやと。故に吾國を強くするの術を以て、君に説く。君大に之を説ぶのみ。然れども亦た以て徳を殷周に比し難しと。

● 責む ● 王の心中を刺刺し得たり ● 睡 ● 數ぶ ● 要ふる説。悞々

孝公既用衛鞅。鞅欲變法。恐天下議己。衛鞅曰。疑行無名。疑事無

孝公既に衛鞅を用ふ。鞅法を變げんと欲すれども天下の己を議せんことを恐る。衛鞅曰く、疑行は名無く、疑事は功無し。且つ夫れ人より高きの行ある者は固より世に非らる。獨知の慮有る者は必ず民に敖らる。愚者は成事に闇く、知

功。且夫有高人之行者。固見非於世。有獨知之慮者。必見放於民。愚者闇於成事。知者見於未明。民不可與慮始。而不可與樂成。論至德者不和於俗。成大功者不謀於衆。是以聖人苟可以彊國。不以其故。苟可以利民。不循其禮。孝公曰。善。甘龍曰。不然。聖人不易民

者は未だ萌さざるに見る。民は與に始を慮るべからず、而して與に成るを樂しむべし。至徳を論ずる者は俗に和せず、大功を成す者は衆に謀らず。是を以て、聖人苟も以て國を彊くすべきは、其の故きに法らず、苟も以て民を利すべきは、其の禮に循はずと。孝公曰く、善しと。甘龍曰く、然らず。聖人は民を易へずして教ふ。知者は法を變せずして治む。民に因つて教ふれば、勞せずして功を成す。法に縁つて治むる者は、吏習ひて民之に安んずと。衛鞅曰く、龍の言ふ所は世俗の言なり。常人は故俗に安んじ、學者は聞く所に溺る。此の兩者を以て官に居り法を守るは可なり。與に法の外に論ずる所に非ざるなり。三代禮を同じくせずして王たり。五伯は法を同じくせずして霸たり。智者は法を作り、愚者は制せらる。賢者は禮を更め、不肖者は拘はると。杜摯曰く、利百ならざれば法を變せず、功十ならざれば器を易へず。古に法れば過なく、禮に循へば邪無しと。衛鞅曰く、世を治むる一道ならず。國に便なれば古に法らず。

而教。知者不變法而治。因民而教。不勞而成。功。緣法而治者。吏習而民安之。衛鞅曰。龍之所言。世俗之言也。常人安於故俗。學者溺於所聞。以此兩者。居官守法。可也。非所與論於法之外也。三代不同禮而王。五伯不同法而霸。智者作法。愚者制焉。賢者更禮。不肖者拘焉。杜摯曰。利不百。不變法。功不十。不易器。法古無過。循禮無邪。衛鞅曰。治世不一道。便國不法古。故湯武不循古而王。夏殷不易禮而亡。反古者不可非。而循禮者不足多。孝公曰。善。

故に湯武古に循はずして王たり。夏殷禮を易へずして亡ぶ。古に反く者は非とすべからず、而して禮に循ふ者は多とするに足らずと。孝公曰く、善しと。

● 成否を疑ひて事を行へば決して名譽を得る能はず、是非を疑ひて必ず事業には成功なし ● 輕侮せらる ● 其の國在來の故事を典として従ひよらず ● 其の民の行へる禮義に循ひ守らず ● 夏桀王、殷紂王

以衛鞅爲左庶長。卒定變法之令。令民爲什伍。而相收司連坐。不告姦者腰斬。告姦者與斬

衛鞅を以て左庶長となし、卒に變法の令を定む。民をして什伍をなして相收司連坐せしむ。姦を告げざる者は腰斬す。姦を告ぐる者は敵の首を斬ると賞を同じくす。姦を匿す者は敵に降ると罰を同じくす。民二男以上ありて分異せざる者は其の賦を倍す。軍功ある者は各々率を以て上爵を受く。私闘をなす者は、各々



敵首同賞。匿者與降敵同罰。民有二男以上不分異者。倍其賦。有軍功者。各以率受上爵。爲私鬪者。各以輕重被刑。大小僇力。本業耕織。致粟帛多者。復其身。事末利及怠而貧者。舉以爲收斂。宗室非有軍功。論不得爲屬籍。明尊卑爵秩等級。各以差次。名田宅。

輕重を以て刑せらる。大小力を僇せ、耕織を本業とし、粟帛を致すこと多き者は其の身を復す。末利を事とし、及び怠りて貧しき者は擧げて以て收斂となす。宗室軍功有るにあらざれば論じて屬籍となすを得ず。尊卑爵秩等級を明にするに各々差次を以てす。田宅臣妾衣服を名づくるに家次を以てす。功ある者は顯榮に、功なき者は富めりと雖も芬華する所なし。令既に具はりて未だ布かず。民の己を信ぜざらんことを恐る。乃ち三丈の木を國都市の南門に立て、民に募りて、能く徙して北門に置く者あらば、十金を予へんと。民之を怪みて敢て徙すものなし。復曰く、能く徙す者は五十金を予へんと。一人あり、之を徙す。輒ち五十金を予へ、以て欺かざるを明かにす。卒に令を下す。令民に行はるる莽年、秦の民國都に之き、初令の便ならざるを言ひし者、千を以て數ふ。是に於て太子法を犯す。衛鞅曰く、法の行はれざる、上より之を犯せばなり。將に太子を法にせんとす。太子は君の嗣なり。刑を施すべからずと。其の傅公子虔を

臣妾衣服。以家次。有功者。顯榮。無功者。雖富。無所芬華。令既具。未布。恐民之不信。已乃立三丈之木於國都市南門。募民有能徙置北門者。予二十金。民怪之。莫敢徙。復曰。能徙者予五十金。有一人徙之。輒予五十金。以明不欺。卒下令。行於民二年。秦民之國都。言初令之不便者。以千數。於是太子犯法。衛鞅曰。法之不行。自上犯之。將法太子。太子君嗣也。不可施刑。刑其傅公子虔。戮其師公孫賈。明日秦人皆趨令。行之十年。秦民大說。道不拾遺。山無盜賊。家給人足。民勇於公戰。怯於私鬪。鄉邑大治。秦民初言令不便者。有來言令便者。衛鞅曰。此皆亂化之民也。盡

刑し、其の師公孫賈を戮す。明日秦人皆な令に趨く。之を行ふこと十年、秦の民大に説び、道遺ちたるを拾はず、山に盜賊無く、家々給し、人々足る。民は公戰に勇み、私鬪に怯る。郷邑大に治まる。秦の民初め令の便ならざるをいひし者來りて令の便なるを言ふ者あり。衛鞅曰く、此れ皆化を亂るの民なりと。盡く之を邊城に遷す。其の後民敢て令を議するものなし。

● 五家を伍といひ、二伍を什といふ。五家を連ねて什となして民の組合とすること ● 民の組合の中にて一家即を犯せば、他の九家にて罪を犯して許さず ● 盜者一ノを告訴すれば爵一級を進めらる ● 律に、敵に降る者は其の身を護して一家を没す ● 家を別ちて生計を別に託むことをせざる者 ● 其の身一代の租稅夫役等を免ぜらる ● 工商をいふ、耕織を本とするに對していふ ● 沒收す ● 妻子を沒收して官の奴婢となす ● 王家の宗族にして軍功あるにあらざれば、王族の爵秩の屬籍に入る、を得ず ● 差等順次 ● 家格 ● 華美にすること ● 商鞅の所に改革したる新法令 ● 歸向す、從ふ ● 教化を亂すの民

遷之於邊城其後民莫敢議令。

於是以致鞅爲大良造將兵圍魏安邑降之。居三年。作爲築冀闕宮庭於咸陽。秦自雍徙都之。而令民父子兄弟同室內息者爲禁。而集小都鄉邑聚爲縣。置令丞。凡三十一縣。爲田開阡陌封疆。而賦稅平。平斗桶權衡丈尺。行之四年。公子

是に於て鞅を以て大良造となし、兵に將として魏の安邑を圍みて之を降す。居ること三年、作爲して冀闕宮庭を咸陽に築く。秦雍より徙りて之に都す。而して民の父子兄弟室を同じくし内息する者をして禁となさしむ。而して、小都郷邑衆を集めて縣と爲し、令丞を置くこと凡そ三十一縣。田の爲めに阡陌封疆を開きて賦稅平かなり。斗桶權衡丈尺を平かにす。之を行ふこと四年、公子虔復た約を犯す。之を劓す。居ること五年、秦の人富彊にして天子胙を孝公に致し、諸侯畢く賀す。

● 秦の第十六爵の名、當時人臣の極官なり ● 魏闕なり、魏然たる宮闕。又冀は記なり、教令を記列して此の門闕に於て民に公布するもの ● 田開のあぢみち。南北を阡といひ、東西を陌といふ。一説、古代井田の制より起れる田地の區劃 ● 土を築きて境界の標となす ● 景器の名、秤 ● 鼻をそぎ斬る刑罰を科す ● 功績に報ゆるために祭肉を贈りしなり

虔復犯約。劓之。居五年。秦人富彊。天子致胙於孝公。諸侯畢賀。

其明年齊敗魏兵於馬陵。其太子申。殺將軍龐涓。其明年。衛鞅說孝公曰。秦之與魏。譬若人之有腹心疾。非魏并秦。秦即并魏。何者。魏居嶺阨之西。都安邑。與秦界河。而獨擅山東之利。利則西侵。秦病則東收。地。今以君之

其の明年齊魏兵を馬陵に敗り、其の太子申を虜にし、將軍龐涓を殺す。其の明年、衛鞅孝公に説きて曰く、秦の魏に與ける、譬へば人の腹心の疾あるが若し。魏秦を并するに非ずんば、秦即ち魏を并せん。何となれば、魏は嶺阨の西に居り、安邑に都す。秦と河を界にして、獨山東の利を擅にす。利なれば則ち西秦を侵し、病めば則ち東地を收む。今君の賢聖を以て國頼りて以て盛なり。而して魏往年大に齊に破られ、諸侯之に畔く。此の時に因りて魏を伐つべし。魏秦を支へずんば必ず東に徙らん。東に徙らば、秦河山の固に據り、東郷して以て諸侯を制せん、此れ帝王の業なりと。孝公以て然りとなし、衛鞅をして將として魏を伐たしむ。魏公子卬をして將として之を撃たしむ。軍既に相距ぐ。衛鞅魏の將公子卬に書を遺りて曰く、吾始め公子と驩す。今俱に兩國の將となりて相攻む

賢聖國賴以盛。而魏往年大破於齊。諸侯時之。可因不支秦。必東徙。東徙。秦據河山之固。東鄉以制諸侯。此帝王之業也。孝公以為然。使衛鞅將而伐魏。魏使公子卬將而擊之。軍既相距。衛鞅遣魏將公子卬書曰。吾始與公子驩。今俱為兩國將。不忍相攻。可下與公子面相見。盟。樂飲而罷兵。以安秦魏。魏公子卬以為然。會盟已飲。而衛鞅伏甲士而襲。魏公子卬。因攻其軍。盡破之。以歸秦。魏惠王兵數破於齊秦。國內空。日以削。恐乃使使割河西之地。獻於秦。以和。而魏遂去。安邑。徒都大梁。梁惠王曰。寡人恨不用公叔座之言也。衛鞅既破魏還。秦封之於商十五邑。號為商君。

るに忍びず。公子と面に相見えて盟ひ、樂飲して兵を罷め、以て秦魏を安んずべしと。魏の公子卬以て然りとなし、會盟し、已に飲む。而して衛鞅甲士を伏せて襲ひて魏の公子卬を虜にす。因りて其の軍を攻め、盡く之を破りて以て秦に歸る。魏の惠王兵數々齊秦に破られ、國內空しく、日々以て削らる。恐れて乃ち使をして河西の地を割きて秦に獻せしめ以て和す。而して魏遂に安邑を去り、徒りて大梁に都す。梁の惠王曰く、寡人恨むらくは、公叔座の言を用ひざりしをと。衛鞅既に魏を破りて還る。秦之を商の十五邑に封じ、號して商君となす。

● 與は於此同じ ● 目に見えずして而も大事なる個所の疾病にして醫せざれば人命危きが如し ● 山嶺險阨の地 ● 魏は晉に同じ、東に向きてなり ● 拒に同じ

商君相秦十年。宗室貴戚多怨望者。趙良見商君。商君曰。鞅之得見也。從孟蘭。今鞅請得交。可乎。趙良曰。僕弗敢願也。孔丘有言。曰。推賢而戴者進。聚不肖而王者退。僕不肖。故不敢受命。僕聞之。曰。非其位而居之曰貪位。非其名而有之曰貪名。僕聽君之義。則

商君秦に相たること十年、宗室貴戚怨望する者多し。趙良商君を見る。商君曰く、鞅の見ゆることを得るや、孟蘭單に従る。今鞅請ふ交るを得ん、可ならんかと。趙良曰く、僕敢へて願はざるなり。孔丘言へるあり、曰く、賢を推して戴く者は進む。不肖を聚めて王たる者は退くと。僕不肖なり、故に敢て命を受けず。僕之を聞く、曰く、其の位にあらずして、之に居るを貪位といひ、其の名にあらずして、之を有つを貪名といふ。僕君の義を聽けば、則ち僕の貪位貪名を恐る。故に敢へて命を聞かずと。商君曰く、子吾が秦を治むるを説ばざるかと。趙良曰く、反聽を之れ聰と謂ひ、内視を之れ明と謂ひ、自勝を之れ強と謂ふ。虞舜言へるあり、曰く、自ら卑うするや尚しと。君虞舜の道を道ふに若かず。僕に問ふことを爲すなかれと。商君曰く、始め秦は戎翟の教にして、父子別なく、室を同じくして居る。今我其の教を更制して、其の男女の別を爲る。大に冀闕を築き、營むこと魯衛の如くす。子我が秦を治むるを觀るや、五殺大

恐僕食位食名也。故不致。開命。商君曰。子不說吾治。秦與。趙良曰。反聽之謂聰。內視之謂明。自勝之謂遷。虞舜有言曰。自卑也尚矣。君不若道。其舜之道。無爲。問僕矣。商君曰。始秦戎翟之教。父子無別。同室而居。

今我更制其教。而爲其男女之別。大築冀闕。營如魯衛矣。子觀我治秦也。孰與五殺大夫賢。趙良曰。千羊之皮。不如一狐之腋。千人之諾諾。不如一士之諤諤。武王諤諤以昌。殷紂墨墨以亡。君若不非武王乎。則僕請終日正言無誅。可乎。商君曰。語有之矣。貌言華也。至言實也。苦言藥也。甘言疾也。夫子果肯終日正言。鞅之樂也。鞅將事子。子又何辭焉。

夫の賢に孰れぞやと。趙良曰く、千羊の皮は一狐の腋に如かず。千人の諾諾は一士の諤諤に如かず。武王は諤諤として以て昌え、殷紂は墨墨として以て亡ぶ。君若し武王を非とせざらんか、則ち僕請ふ、終日正言して誅する無けん。可ならんかと。商君曰く、語に之あり。貌言は華なり。至言は實なり。苦言は藥なり。甘言は疾なり。夫子果して終日正言するを肯せば、鞅の樂なり。鞅將に子に事へんとす。子又何ぞ辭せん。

● 人の言を聽かんとするに、先づ自ら反省しく聽くことを勉めよ ● 物を見るに外目を以てせず、内心を以て視るを明といふ ● 謙遜の徳を守りて情慾に克つを強しといふ ● 自ら謙遜卑下するは反つて其の身を尊くする所以なり ● 戎狄 ● 百里奚、秦本記參照 ● 趙世家に出づ ● 腋に同じ ● 駟駟に同じ。正言を以てマカましく申ふ ● 周の王室を廢にす ● 默黙に同じ ● 表面を飾飾していふ言

趙良曰。夫五殺大夫。荆之鄙人也。聞秦繆公之賢。而願望見。行而無資。自粥於秦。客被褐食牛。期年。繆公知之。舉之牛口之下。而加之百姓之上。秦國莫敢望焉。相秦六七年。而東伐鄭。三置晉國之君。一救荆國之禍。發教封內。而巴人致貢。施德諸侯。而八戎來服。

趙良曰く、夫れ五殺大夫は荆の鄙人なり。秦の繆公の賢を聞きて望見せんことを願ひ、行かんとして資なし、自ら秦の客に粥ぎ、褐を被、牛を食ふ。期年にして、繆公之を知り、之を牛口の下より舉げて、之を百姓の上に加ふ。秦國敢て望むものなし。秦に相たること六七年にして、東鄭を伐つ。三たび晉國の君を置き、一たび荆國の禍を救ふ。教を封内に發して巴人貢を致す。徳を諸侯に施して、八戎來り服す。由余之を聞きて關を款いて見えんことを請ふ。五殺大夫の秦に相たるや、勞すれども坐乗せず、暑けれども蓋を張らず、國中に行くに車乘を從へず、干戈を操らず。功名府庫に藏まり、徳行後世に施す。五殺大夫死して、秦國の男女流涕し、童子歌謠せず。春く者は杵を相せず。此れ五殺大夫の徳なり。今君の秦王に見ゆるや、嬖人景監に因りて以て主となす。名となす所以にあらざるなり。秦に相として百姓を以て事となさずして、大に冀闕を築く。功となす所以にあらざるなり。太子の師傅を刑戮し、民を殘傷するに駭

由余聞之。款關請見。五殺大夫之相。秦也。勞不坐乘。暑不張蓋。行於國中。不從。車乘。不操。干戈。功名。藏於府庫。德行。施於後世。五殺大夫。死。秦國男女。流涕。童子。不歌謠。昏者。不相杵。此五殺大夫之德也。今君之見秦王也。因壁人景監。以爲主。非所以爲名也。相秦

刑を以てす。是れ怨を積み禍を畜ふるなり。教の民を化するや、命よりも深く、民の上に効ふや、命よりも捷し。今君又左建外易す、教となす所以にあらざるなり。君又南面して寡人と稱し、日々秦の貴公子を縋せり。詩に曰く、鼠を相るに體あり、人として禮なからんや。人として禮なくんば、何ぞ過かに死せざる。詩を以て之を觀れば、壽をなす所以にあらざるなり。公子虔門を杜きて出でざること已に八年なり。君又祝權を殺し、公孫賈を黥す、詩に曰く、人を得る者は興る、人を失ふ者は崩ると。此の數事は人を得る所以にあらざるなり。

- 百里奚は南陽宛の人、地楚に屬す故に荆の人といふ
- 雲に同じ
- 牛飼より登用す
- 惡露す
- 晉の惠公、顯公、文公を立てたるをいふ
- 人名、賢者なり
- 欵は叩なり
- 安坐して車に乗ること
- きぬがさ、日傘
- 昏く時に杵を動かすにかけ杵をなまざ
- 欵は轆に通ず、嚴刑
- 教は商鞅の教令、命は秦君の命令、民教を恐る、こと秦君よりも甚しきをいふ
- 上は商鞅の所爲、令は秦君の教令
- 邪道を以て威權を建つるをいふ
- 外に在りて君命を敢て易ふるをいふ
- 糾なり、惡事をたらし調ぶると

詩經鄘風相鼠の章

不以百姓爲事。而大築冀闕。非所以爲功也。刑黥太子之師傅。殘傷民。以峻刑。是積怨畜禍也。教之化民也深。於命。民之效上也捷。於令。今君又左建外易。非所以爲教也。又南面而稱寡人。日繩秦之貴公子。詩曰。相鼠有體。人而無禮。人而無禮。何不遺死。以詩觀之。非所以爲壽也。公子虔杜門不出。已八年矣。君又殺祝權。而黥公孫賈。詩曰。得人者興。失人者崩。此數事者。非所以得人也。

君之出也。後車十數。從車載甲。多力而駢脅者。爲驂乘。持矛而操關。載者。旁車而趨。此一物不具。君固不出。書曰。恃德者昌。恃力者亡。君之危若朝露。尙將欲延年益壽乎。

君の出づるや、後車十數、從車甲を載せ、多力にして駢脅なる者を驂乗と爲し、矛を持して關戟を操る者、車に旁うて趨る。此の一物具らざれば、君固より出でず。書に曰く、徳を恃む者は昌え、力を恃む者は亡ぶ。君の危きこと朝露の若し。尙ほ將に年を延べ壽を益さんと欲せんか、則ち何ぞ十五都を歸し園に灌がざる。秦王に勸めて巖穴の士を顯はし、老を養ひ、孤を存し、父兄を敬し、有功を序し、有徳を尊び、以て少しく安かるべし。君尙ほ將に商の富を貪り秦國の教を籠し、百姓の怨を畜へんとす。秦王一旦賓客を捐て朝に立たずんば、秦國の君を收むる所以の者豈其れ微ならんや。亡ぶること足を翹けて待つべしと。商君

則何不歸二十  
五都。灌中關於  
鄆。勸秦王一顯  
巖穴之士。養  
老存孤。教父  
兄。序有功。尊  
有德。可以少  
安。君尙將下食  
商之富。寵秦  
國之教。育甲百  
姓之怨。秦王  
一旦捐寶客  
而不立朝。秦  
國之所以收  
君者。豈其微  
哉。亡可翹足  
而待。商君弗  
從。後五月而  
秦孝公卒。太  
子立。公子虔

從はず、後五月にして秦の孝公卒す。太子立つ。公子虔の徒、商君反せんと欲すと告ぐ。吏を發して商君を捕ふ。商君亡けて關下に至り、客舎に舎せんと欲す。客人其の是れ商君なるを知らず。曰く、商君の法、人の驗なき者を舎するは之に坐すと。商君喟然として歎じて曰く、嗟乎、法を爲るの敵一に此に至るか。去つて魏に之く、魏の人其の公子印を欺きて魏の師を破りしを怨みて受けず。商君他國に之かんと欲す。魏の人曰く、商君は秦の賊なり。秦強くして賊魏に入る。歸さざれば不可なりと。遂に秦に内る。商君既にして復た秦に入り、商邑に走る。其の徒屬と與に邑の兵を發し、北に出でて鄭を撃つ。秦兵を發して商君を攻め、之を鄭の黽池に殺す。秦の惠王商君を車裂して以て徇へて曰く、商鞅の如き反者莫しと。遂に商君の家を滅す。

● 後より車に乗りて堅固するもの數十輛あり、陪從するもの甲冑を身にす ● 酸醜の骨の並び附きて一枚の如くなる者 ● 關へ乗り ● 子の頸 ● 商君の封邑十五都を歸し邊鄙なる田舎に歸りて田園に灌ぐ ● 山

之徒告商君  
欲反。發吏捕  
商君。商君亡

至關下。欲舍客舎。客人不知其是商君也。曰。商君之法。舍人無驗者。一坐之。商君喟然歎曰。嗟乎。爲法之敵。一至此哉。去之。魏人怨其欺公子印。破中魏師。弗受。商君欲之。他國。魏人曰。商君秦之賊。秦彊而賊入。魏弗歸。不可。遂内秦。商君既復入秦。走商邑。與其徒屬。發二邑兵。北出擊鄭。秦發兵攻商君。殺之於鄭黽池。秦惠王車裂商君。以徇。曰。莫如商鞅。反者。遂滅商君之家。

林巖穴に隠れたる有徳の君子 ● 功勞ある者を爵位に叙す ● 君國を恃みて秦國の教令を擬にす ● 賈客を跡に遺す、死するをいふ ● 罪人として捕へて賣む ● 客舎の人

太史公曰。商  
君其天資刻  
薄人也。跡其  
欲干孝公。以  
帝王術。挾持  
浮說。非其質  
矣。且所因由  
嬖臣。及得用  
刑。公子虔。欺  
魏將。印。不師  
趙良之言。亦

太史公曰く、商君は其の天資刻薄の人なり。其の孝公に干めんと欲するに帝王の術を以てするを跡ぬるに、浮説を挾持す、其の質にあらざるなり。且つ囚る所は嬖臣に由り、用ひらるゝを得るに及びて、公子虔を刑し、魏將印を欺き、趙良の言を師とせず。亦商君の恩少きを發明するに足る。余嘗て商君開塞耕戰の書を讀むに、其の人の行事と相類す。卒に惡名を秦に受くる、以あるかな。

● 五帝三王の天下を治むる術 ● 尋 ● 自己本來の持論にあらざる虚偽の説を持して孝公に取り入りたるも、のほて、固より帝王仁義の道は其天性本質に非ず ● 初めたよりたる嬖臣景監をさす ● 明かにす ● 農利

足發明商君之少恩矣。余嘗讀商君開塞耕戰書。與其人行事。相類。卒受惡名於秦。有以也夫。

を以てすれば故事の化開け、恩徳を布れば政化盛るといふ説を述べたる書。● 耕戰を本として國を富まして兵が強くし以て外敵と戦ふの術を述べたる書

### 卷六十九

#### 蘇秦列傳第九

蘇秦者。東周雒陽人也。東事師於齊。而習之於鬼谷先生。出游數歲。大困而歸。兄弟嫂妹妻妾。竊皆笑之。曰。周人之俗。治產業。力工商。逐什二以爲務。今子釋本而事口古。困不亦宜乎。

蘇秦は東周雒陽の人なり。東師に齊に事へて、之を鬼谷先生に習ふ。出游する數歲、大に困んで歸る。兄弟嫂妹妻妾竊かに皆之を笑ひて曰く、周人の俗、産業を治め、工商を力め、什の二を逐ひて、以て務となす。今子は本を釋てて口舌を事とす。困しむ、亦宜ならずやと。蘇秦之を聞きて慙ぢて自ら傷む。乃ち室を閉ぢて出でず。其の書を出して徧く之を觀て曰く、夫れ士業に已に首を屈して書を受け、而して以て尊榮を取る能はずんば、多しと雖も亦奚ぞ以て爲さんと。是に於て、周書の陰符を得て、伏して之を讀む。期年にして、以て揣摩を出して曰く、此れ以て當世の君に説くべしと。周の顯王に説かんことを求む。顯王の左右素より蘇秦を習知し、皆之を少として信ぜず。乃ち西秦に至る。秦の孝公卒

蘇秦聞之。而慙自傷。乃閉室不出。出其書。獨觀之。曰。夫士業已風。首受書。而不能以取尊榮。雖多亦奚以爲。於是得周書陰符。伏而讀之。期年。以出揣摩。曰。此可以說當世之君矣。求說之。君一矣。求說之。周顯王。顯王左右素習。知蘇秦。皆少之。弗信。乃西至秦。秦孝公卒。說惠王曰。秦四塞之國。被山帶渭。東有闕河。西有漢中。南有巴蜀。北有代馬。此天府也。以秦士民之衆。兵法之教。可以吞天下。稱帝而治。秦王曰。毛羽未成。不可高蜚。文理未明。不可并兼。方許商鞅。疾辯士。弗用。乃東之趙。趙肅侯令其弟成爲相。號奉陽君。奉陽君弗說之。去游燕。

蘇秦聞之。而慙自傷。乃閉室不出。出其書。獨觀之。曰。夫士業已風。首受書。而不能以取尊榮。雖多亦奚以爲。於是得周書陰符。伏而讀之。期年。以出揣摩。曰。此可以說當世之君矣。求說之。君一矣。求說之。周顯王。顯王左右素習。知蘇秦。皆少之。弗信。乃西至秦。秦孝公卒。說惠王曰。秦四塞之國。被山帶渭。東有闕河。西有漢中。南有巴蜀。北有代馬。此天府也。以秦士民之衆。兵法之教。可以吞天下。稱帝而治。秦王曰。毛羽未成。不可高蜚。文理未明。不可并兼。方許商鞅。疾辯士。弗用。乃東之趙。趙肅侯令其弟成爲相。號奉陽君。奉陽君弗說之。去游燕。

● 類川の陽城に鬼谷といふ所あり、其處に居たりし隱者 ● 十分の二の利を收むること即ち商業 ● 太公の著兵法の書 ● 篇の名。或は曰く人主の情を揣り、摩つて之に中つる手段と ● 蘇秦辯說多くは世に適切ならざるを知る ● 秦の智謀達しとして之を輕んず ● 天然の府庫、財物多く産する沃土 ● 高飛 ● 文教道理

歲餘而後得見。說燕文侯曰。燕東有朝鮮。遼東。北有林胡。樓煩。西有雲中。九原。南有噤沱。易水。地方二千餘里。帶甲數十萬。車六百乘。騎六千匹。粟支數年。南有碣石。鴈門之饒。北有燕之利。民雖不佃作。而足於粟。粟矣。此所謂天府者也。夫安樂無事。不見覆軍。

歲餘にして後見ゆることを得たり。燕の文侯に説きて曰く、燕は東に朝鮮遼東有り。北に林胡樓煩あり。西に雲中九原あり。南に噤沱易水あり。地方二千餘里。帶甲數十萬。車六百乘。騎六千匹。粟數年を支ふ。南碣石鴈門の饒かなる有り。北に粟の利あり。民佃作せずと雖も、粟に足れり。此れ所謂天府なる者なり。夫れ安樂無事にして軍を覆へし、將を殺すを見ざることを燕に過ぐるものなし。大王其の然る所以を知るか。夫れ燕の寇に犯されて甲兵を被らざる所以の者は、趙の其の南を蔽ふが爲めを以てなり。秦趙五たび戦ひて、秦再び勝ち趙三たび勝ち、秦趙相斃る。而して王全燕を以て其の後を制す。此れ燕の寇に犯されざる所以なり。且つ夫れ秦の燕を攻むるや、雲中九原を踰え、代上谷を過ぐ、地を彌たること數千里、燕城を得と雖も、秦の計固より守る能はざるなり。秦の燕を害する能はざる亦明かなり。今趙の燕を攻むるや、號を發し、令を出す、十日に至らずして數十萬の軍、東垣に軍す。噤沱を渡り、易水を涉り、四五日に至らず



殺將。無過燕者。大王知其所以然。夫燕之所以不三犯寇。被甲兵一者。以趙之爲蔽。其南也。秦趙五戰。秦再勝。而趙三勝。秦趙相斃。而王以全燕一制。其後。此燕之所。以不犯寇也。且夫秦之攻燕也。踰雲中九原。過代上谷。彌地數千里。雖得燕城。秦計固不能守也。秦之不能害燕。亦明矣。今趙之攻燕也。發號出令。不至二十日。而數十萬之軍。軍於東垣矣。渡漉。涉易水。不至四五日。而距國都矣。故曰。秦之攻燕也。戰於千里之外。趙之攻燕也。戰於百里之內。夫不憂百里之患。而重千里之外。計無過於此者。是故顧大王與趙從親。天下爲一。則燕國必無患矣。文侯曰。子言則可。然吾國小。西迫彊趙。南近齊。齊趙彊國也。子必欲合從。以安燕。寡人請以國從。

して國都に距る。故に曰く、秦の燕を攻むるや、千里の外に戦ふなり。趙の燕を攻むるや、百里の内に戦ふなり。夫れ百里の患を憂へずして、千里の外を重くす。計此より過てる者無し。是の故に願くは、大王趙と從親して天下一とならば、則ち燕國必ず患無からんと。文侯曰く、子の言は則ち可なり。然れども吾が國小にして、西は、彊趙に迫り、南は齊に近し。齊趙は彊國なり。子必ず合從して以て燕を安んぜん」と欲せば、寡人請ふ、國を以て從はんと。

● 鎧を着たる兵士、甲兵 ● なつめ粟などの産物 ● 天の府庫、天産物の豊かなるをいふ ● 共に罷弊して隣る ● 合從して親交す、韓魏趙齊楚燕の縦に連れる六國同盟親睦して秦に對抗するをいふ

於是資蘇秦車馬金帛。以至趙。而奉陽君已死。即因說趙肅侯曰。天下卿相人臣。及布衣之士。皆高賢君之行義。皆願奉教陳忠於前。之日久矣。雖然。奉陽君妬。君而不任。事。是以賓客游士。莫敢自盡。於前者。今奉陽君捐館舍。君乃今復與士民相親也。臣故敢進

是に於て蘇秦に車馬金帛を資して以て趙に至らしむ。而して奉陽君已に死せり。即ち因つて趙の肅侯に説きて曰く、天下の卿相人臣及び布衣の士、皆賢君の行義を高しとし、皆教を奉じ、忠を前に陳べんと願ふの日久し。然りと雖も、奉陽君妬み、君にして而も事に任ぜず。是を以て賓客游士、敢て自ら前に盡す者莫し。今奉陽君館舍を捐つ、君乃ち今復た士民と相親しむなり。臣故に敢て其の愚慮を進む。竊に君の爲めに計れば、民を安んじて事無きに若く無し。且らく庸て民に事あらしむるなけれ。民を安んずるの本は交りを選ぶにあり。交りを選び得れば、則ち民安んじ、交りを選び得ざれば則ち民身を終ふるまで安からず。請ふ、外患を言はん。齊秦兩敵とならば、民安きを得ず。秦に倚りて齊を攻むるも、民安きを得ず。齊に倚りて秦を攻むるも、民安きを得ず。故に夫れ人の主を謀りて人の國を伐つ、常に辭を出して人の交りを斷絶するに苦しむ。願くは君慎みて口より出すなけれ。請ふ、白黒を別たん。陰陽を異にする所以のみ。君誠に能く

其愚慮。竊爲君計者。莫若安民無事。且無庸有。事於民也。安民之本。在於擇交。擇交而得。則民安。擇交而不得。則民終身不安。請言。外患。齊秦爲兩敵。而民不得安。倚秦攻齊。而民不得安。倚齊攻秦。而民不得安。故夫謀二人之主。伐二人之國。常苦三出辭。斷二絕人之交也。願君慎勿出於口。請別白黑。所以異陰陽而已矣。君誠能聽臣。燕必致三。旃裘狗馬之地。齊必致三。魚鹽之海。楚必致三。橘柚之園。韓魏中山。皆可使致。湯沐之奉。而貴叔父。兄皆可以受封侯。夫割地包利。五伯之所以。平禽將而求也。封侯貴戚。湯武之所以。放弑而爭也。今君高拱而兩有之。此臣之所。以爲君願也。

臣に聴かば、燕は必ず旃裘狗馬の地を致さん。齊は必ず魚鹽の海を致さん、楚は必ず橘柚の園を致さん、韓魏中山皆湯沐の奉を致さしむ可し。而して貴戚父兄は皆以て封侯を受くべし。夫れ地を割き、利を包ぬるは、五伯の軍を覆へし、將を禽にして求むる所以なり。貴戚を封侯にするは湯武の放弑して争ふ所以なり。今君高拱して兩ながら之を有つ。此れ臣の君の爲めに願ふ所以なり。

- 死す ● 趙國の利害を明かにすること白黒を區別する如くせん、これ陰陽相別なる如く分明なるとの義か。
- 其他數語あれども今略に従ふ ● 毛の織物皮ざるもや、犬馬などの牧畜の土地 ● 湯沐の賢に備ふべき財物を賈せしむべし ● 獲ね取る ● 五屬 ● 一敵軍を打破り敵將を捕虜とす ● 殷湯王は夏桀王を放逐し、周武王は殷紂王を滅して成王としたる事なり ● 何事をも爲さず兩手をこまぬき居ること

今大王與秦。則秦必弱。韓魏與齊。則齊必弱。楚魏。魏弱則割。河外。韓弱則效。宜陽。陽。宜陽。效。則上郡。絕。河外。割。則道不通。楚弱。則無援。此三策者。不可不執計也。夫秦下。軹道。則南陽危。劫。韓。包。周。則趙氏自操。兵。據。齊。取。淇。卷。則秦必入。朝。秦。秦欲。已。得。乎。山東。則必舉。

今大王秦に與せば、則ち秦必ず韓魏を弱めん。齊に與せば、則ち齊必ず楚魏を弱めん。魏弱ければ、則ち河外を割かん。韓弱ければ、則ち宜陽を致さん。宜陽致さるれば、則ち上郡絶えん。河外割かるれば、則ち道通ぜず。楚弱ければ、則ち援無からん。此の三策は執計せざるべからざるなり。夫れ秦軹道を下らば、則ち南陽は危からん。韓を劫し周を包ねば、則ち趙氏自ら兵を操らん。衛に據りて淇卷を取らば、則ち齊必ず秦に入朝せん。秦已に山東を得んと欲せば、則ち必ず兵を舉げて趙に嚮はん。秦の甲河を渡り、漳を踰え、番吾に據らば、則ち兵必ず邯鄲の下に戦はん。此れ臣の君の爲めに患ふる所以なり。今の時に當り山東の建國趙より強きは莫し、趙は地方二千餘里、帶甲數十萬、車千乘、騎萬匹、粟數年を支ふ。西に常山有り、南に河漳有り、東に清河有り、北に燕國有り。燕は固より弱國にして、畏るゝに足らざるなり。秦の天下に害とする所の者は、趙に如くは莫し。然り而して、秦敢て兵を舉げて趙を伐たざるものは、何ぞや。韓

兵而擣趙矣。秦甲渡河。漳。據番吾。則兵必戰於邯鄲之下矣。此臣之所以為君患也。當今之時。山東之建國。莫彊於趙。趙地方二千餘里。帶甲數十萬。車千乘。騎萬匹。粟支數年。四有常山。南有清河。東有清河。北有燕國。燕固弱國。不足畏也。秦之所害於天下者。莫如趙。然而秦不敢舉兵伐趙者。何也。畏韓魏之譖其後也。然則韓魏趙之南蔽也。秦之攻韓魏也。無有名山大川之限。稍置食之。傳二國都而止。韓魏不能支秦。必入臣於秦。秦無韓魏之規則禍必中於趙矣。此臣之所為君患也。

魏の其の後を議するを畏るればなり。然れば則ち韓魏は趙の南蔽なり。秦の韓魏を攻むるや、名山大川の限り有る無し。稍く之を蠶食し、國都に傳きて止まん。韓魏秦を支ふる能はずんば、必ず入りて秦に臣たらん。秦、韓魏の規無くば、則ち禍必ず趙に中らん。此れ臣の君の爲めに患ふる所なり。

● 秦の兵、秦軍 ● 黄河 ● 黄河と漳水 ● 秦の後を伐たんとことを相謀るを畏る ● 兩方の防壁 ● 到る ● 趙國管「隔」に作る、秦と趙とのへだてを爲す所の障壁が取れたらんにはこの意

臣聞堯無三夫之分。舜無三尺之地。以

臣聞く、堯三夫の分なく、舜三尺の地無くして、以て天下を有つ。禹百人の聚無くして以て諸侯に王たり。湯武の士三千に過ぎず、車三百乘に過ぎず、卒三萬に

有天下。禹無百人。之聚。以王諸侯。湯武之士。不過三千。車。不過三百。乘。卒。不過三萬。立爲天子。誠得其道也。是故明主。外料其敵之疆弱。內度其土卒賢不肖。不待兩軍相當。而勝敗存亡之機固已形於智中矣。豈揀於衆人之言。而以冥冥決事哉。臣竊以天下之

過ぎずして、立ちて天子となる。誠に其の道を得ればなり。是の故に明主は外其の敵の疆弱を料り、内其の士卒の賢不肖を度る。兩軍相當るを待たずして、勝敗存亡の機固より己に智中に形る。豈衆人の言に揀はれて、冥冥を以て事を決せんや。臣竊かに天下の地圖を以て之を案するに諸侯の地秦に五倍す。諸侯の卒を料度するに、秦に十倍す。六國一となり、力を并せ西郷して秦を攻めば、秦必ず破れん。今西面して之に事へば、秦に臣とせられん。夫れ人を破ると人に破らるゝと、人を臣とすると人に臣とせらるゝと、豈日を同じうして論ずべけんや。夫れ衛人は皆諸侯の地を割き、以て秦に予へんと欲す。秦成らば、則ち臺榭を高くし、宮室を美にし、竿瑟の音を聴き、前には樓閣軒轅有り、後には長妓美人あり。國は秦の患を被りて其の憂に與らず。是の故に夫の衛人は日夜務めて、秦の權を以て諸侯を恐愕し、以て地を割かんことを求む。故に大王之を孰計せんことを願ふ。

地圖一案之。諸侯之地。五倍於秦。料二度諸侯之卒。十二倍於秦。六國爲一。并力四鄉而攻秦。秦必破矣。今四面而事之。見臣於秦。夫破人之與見破於人也。臣人之與見臣於人也。豈可同日而論哉。夫衛人者。皆欲割諸侯之地以予秦。秦成。則高臺榭。美宮室。聽琴瑟之音。前有樓閣軒轅。後有長姣美人。國被秦患。而不與其憂。是故夫衛人日夜務以秦權恐傷諸侯。以求割地。故願三大王執計之二也。

- 兵三人
- 自己の明を蔽はれ
- かしはかる、計算す
- 西に向ひて
- 六國を連衡して秦に屬せしめんとする人、術は拙なり
- 秦六國を征服してその功をなせば
- 字は箭の類なり
- 高き城門と衛宮
- 晉のすぢりとしたる美人、姣は美也

臣聞明主絕疑去讒。屏流言之迹。塞朋黨之門。故孽主廣地。彊兵之計。臣得陳忠於前矣。故竊爲大王計。莫如下一韓魏。齊楚燕趙。以從親以畔秦。

臣聞く、明主は疑を絶ち、讒を去り、流言の迹を屏け、朋黨の門を塞ぐと。故に主を尊び、地を廣め、兵を彊くするの計、臣忠を前に陳ぶるを得ん。故に竊かに大王の爲めに計るに、韓魏齊楚燕趙を一にし、以て從親して、以て秦に畔くに如くは莫し。天下の將相をして洹水の上に會せしめ、質を通じ、白馬を刳いて盟ひ、要約して曰はん、秦楚を攻めば、齊魏各々、銳師を出して以て之を佐け、韓其の糧道を絶ち、趙河漳を涉り、燕常山の北を守らん。秦韓魏を攻めば、則ち楚其の

令天下之將相會於洹水之上。通質割白馬一而盟。要約曰。秦攻楚。齊魏各出銳師以佐之。韓絕其糧道。趙涉河漳。燕守常山之北。秦攻韓魏。則楚絕其後。齊用銳師而佐之。趙涉河漳。燕守雲中。秦攻齊。則楚絕其後。韓守其道。秦魏塞其道。趙涉河博關。燕出銳師以佐之。

後を絶ち、齊銳師を出して之を佐け、趙河漳を涉り、燕雲中を守らん。秦齊を攻めば、則ち楚其の後を絶ち、韓城阜を守り、魏其道を塞ぎ、趙河博關を涉り、燕銳師を出して以て之を佐けん。秦燕を攻めば、則ち趙常山を守り、楚武關に軍し、魏河外に軍し、齊清河を涉り、燕銳師を出して以て之を佐けん。諸侯約の如くならざる者あらば、五國の兵を以て共に之を伐たん。六國從親して以て秦を賓けば、則ち秦の甲必ず敢へて函谷より出で、以て山東を害せざらん。此の如くにして則ち霸王の業成らんと。趙王曰く、寡人年少、國に立つこと、日淺く、未だ嘗て社稷の長計を聞くを得ざるなり。今上客、天下を存し、諸侯を安んずるに意あり。寡人敬みて國を以て從はんと。乃ち車百乘、黄金千鎰、白璧百雙、錦繡千純を飾り、以て諸侯に約せしむ。是の時周の天子文武の胙を秦の惠王に致す。惠王犀首をして魏を攻めしめ、將龍賈を禽にし、魏の雕陰を取り、且つ兵を東せんと欲す。蘇秦秦兵の趙に至らんことを恐れ、乃ち張儀を激怒せしめて、之を

秦に入らしむ。

● 風説 ● 六國の軍共合従して相親しみ秦を以て敵となして共に之を伐たんとすといふ ● 實は撰に通ず  
 ● 秦と他六國との界にある函谷關をいふ ● 純は東也 ● 文王武王を祭る時に供へたる牛羊豕の肉 ● 張  
 儀列傳に詳かなり

之。秦攻<sub>レ</sub>燕則趙守<sub>二</sub>常山<sub>一</sub>。楚軍<sub>二</sub>武關<sub>一</sub>。魏軍<sub>二</sub>河外<sub>一</sub>。齊涉<sub>二</sub>清河<sub>一</sub>。燕出<sub>二</sub>銳師<sub>一</sub>以佐<sub>レ</sub>之。諸侯有不<sub>レ</sub>如<sub>レ</sub>約者。以<sub>二</sub>五國<sub>一</sub>之兵共伐<sub>レ</sub>之。六國從親以賓<sub>レ</sub>秦。則秦甲必不<sub>レ</sub>敢出<sub>二</sub>於函谷<sub>一</sub>。以害<sub>二</sub>山東<sub>一</sub>矣。如此則霸王之業成矣。趙王曰。寡人年少。立<sub>レ</sub>國日淺。未<sub>レ</sub>嘗得<sub>レ</sub>聞<sub>二</sub>社稷<sub>一</sub>之長計也。今上客有意<sub>レ</sub>存<sub>二</sub>天下<sub>一</sub>。安<sub>レ</sub>諸侯。寡人敬以<sub>レ</sub>國從。乃飾<sub>二</sub>車百乘<sub>一</sub>。黃金千鎰。白璧百雙。錦繡千純。以約<sub>二</sub>諸侯<sub>一</sub>。是時周天子致<sub>二</sub>文武之詐<sub>一</sub>於秦。惠王。惠王使<sub>二</sub>犀首<sub>一</sub>攻<sub>レ</sub>魏。禽<sub>二</sub>將龍賈<sub>一</sub>。取<sub>二</sub>魏之雕陰<sub>一</sub>。且欲<sub>レ</sub>東<sub>レ</sub>兵。蘇秦恐<sub>二</sub>秦兵之至<sub>一</sub>趙也。乃激<sub>二</sub>怒張儀<sub>一</sub>。入<sub>二</sub>之于秦<sub>一</sub>。

於是說<sub>二</sub>韓宣惠王<sub>一</sub>曰。韓北有<sub>二</sub>鞏洛成臯<sub>一</sub>之固。西有<sub>二</sub>宜陽商阪之塞<sub>一</sub>。東有<sub>二</sub>宛穰洧水<sub>一</sub>。南有<sub>二</sub>陘山<sub>一</sub>。地方九百餘

是に於て韓の宣惠王に説きて曰く、韓北に鞏洛成臯の固あり、西に宜陽商阪の塞あり、東に宛穰洧水有り、南に陘山有り。地方九百餘里、帶甲數十萬、天下の強弓勁弩、皆韓より出づ。谿子少府の時力距來は皆六百歩の外に射る。韓卒足を超けて射る百發暇止せず。遠き者は括蔽ひて臂を洞し、近き者は鏑心を弁ふ。韓卒の劍戟皆冥山より出づ。棠谿、墨陽、合鄆、鄧師、宛馮、龍淵、太阿、皆陸に牛

里。帶甲數十萬。天下之強弓勁弩。皆從<sub>レ</sub>韓出。谿子少府時力距來者。皆射<sub>二</sub>六百步<sub>一</sub>之外。韓卒超<sub>レ</sub>足而射。百發不<sub>レ</sub>暇止。遠者括蔽洞臂。近者鏑心。韓卒之劍戟。皆出<sub>二</sub>於冥山<sub>一</sub>。棠谿。墨陽。合鄆。鄧師。宛馮。龍淵。太阿。皆陸斷<sub>二</sub>牛馬<sub>一</sub>。水截<sub>二</sub>鵠雁<sub>一</sub>。當<sub>レ</sub>敵則斬<sub>二</sub>堅甲鐵幕<sub>一</sub>。革抉<sub>二</sub>呶芮<sub>一</sub>。

馬を斷ち、水に鵠雁を截り、敵に當れば、則ち堅甲鐵幕を斬る。革抉呶芮畢く具はらざる無く、韓卒の勇を以て堅甲を被り、勁弩を蹠み、利劍を帶ぶ。一人百に當るは言ふに足らざるなり。夫れ韓の勁と大王の賢とを以て、乃ち西面して秦に事へ、臂を交へて服す。社稷を羞しめて天下の笑となること此より大なる者無し。是の故に願くは大王之を孰計せよ。大王秦に事へば、秦必ず宜陽成臯を求めん。今茲之を效さば、明年又復地を割かんこと求めん。與ふれば則ち地以て之に給する無けん。與へずんば則ち前功を棄てて後禍を受けん。且つ大王の地盡く有つて、秦の求<sub>レ</sub>已む無し。盡くる有るの地を以て已む無きの求めに逆ふ。此れ所謂怨を市ひ、禍を結ぶ者なり。戰はずして地已に削られん。臣聞く、鄙諺に曰く、寧ろ雞口となるとも牛後となるなかれと。今西面し、臂を交へて秦に臣事するは、何ぞ牛後に異ならんや。夫れ大王の賢を以て、強韓の兵を挾んで、而も牛後の名ある、臣竊かに大王の爲めに之を羞づと。是に於て韓王勃然

無不畢具。以韓卒之勇。被堅甲。蹙勁弩。帶利劍。一人當百。不足言也。夫以韓之勁。與大王之賢。乃西面事秦。交臂而服。羞社稷。而為天下笑。無大

於此者上矣。是故顧大王孰計之。大王事秦。秦必求宜陽成臯。今茲效之。明年又復求割地。與則無地以給之。不與則前功而受後禍。且大王之地有盡。而秦之求無已。以有盡之地。而逆無已之求。此所謂市怨結禍者也。不戰而地已削矣。臣聞鄒諺曰。寧為雞口。無為牛後。今四面交臂。而臣事秦。何異於牛後乎。夫以大王之賢。挾彊韓之兵。而有牛後之名。臣竊為大王羞之。於是韓王勃然作色。攘臂瞋目。按劍仰天。太息曰。寡人雖不肖。必不能事秦。今主君詔以趙王之教。敬奉社稷。以從。

又說魏襄王

又魏の襄王に説きて曰く、大王の地、南に鴻溝・陳・汝南・許・鄆・昆陽・召陵・舞陽・

● 道の塞りたる要所、障塞。● 南方蠻夷の名。良弩を出す、箭子弩といふ。● 職工の役所。韓少府弩を製す。● 韓少府造る所の二種の弩。之を造るに時を得ば力常に倍す故に時力といひ、弩勁利以て來敵を距ぐに足る故に距來といふ。● 超距して勢を用ひて射る。弩を躍みて射る。● たわみ止まず。● 箭、矢はず、矢末。● 名劍の名。● 鐵衣。● 革製の射衣(ユガケ)。● 楯と楯をつなぎ紐。● 小なりとも人主となれの意。● 既秦をさしていふ語。卿大夫は主といふ。今蘇秦が諸侯を合従するを嘉して美稱して主君といふ。

として色を作し、臂を攘ひ、目を瞋らし、劍を按じ、天を仰ぎて、太息して曰く、寡人不肖なりと雖も、必ず能く秦に事へざらん。今主君詔ぐるに趙王の教を以てす。敬みて社稷を奉じて以て従はん」と。

曰。大王之地。南有鴻溝・陳・汝南・許・鄆・昆陽。召陵・舞陽。新都・新鄆。東有淮・潁・煮棗。無胥。西有長城之界。北有河外。卷・衍・酸。地方千里。地名雖小。然而田舍廬廡之數。曾無所二。芻牧人民之衆。車馬之多。日夜行不絕。輪軸殷殷。若有三軍之衆。臣竊量。大王之國不下楚。

新都・新鄆有り、東に淮・潁・煮棗・無胥有り、西に長城の界有り、北に河外・卷・衍・酸棗あり。地方千里、地名は小なりと雖も、然れども田舎廬廡の數曾て芻牧する所無し。人民の衆き、車馬の多き、日夜行きて絶えず。輪軸殷殷として、三軍の衆有るが若し。臣竊かに量るに、大王の國楚に下らず。然るに衡人王を怵し、彊き虎狼の秦に交り、以て天下を侵す。卒に秦の患あるも、其の禍を顧みず。夫れ彊秦の勢を挟み、以て内其の主を劫かす、罪此に過ぐる者無し。魏は天下の彊國なり。王は天下の賢王なり。今乃ち西面して秦に事へて、東藩と稱し、帝宮を築き、冠帯を受け、春秋に祠するに意有り。臣竊かに大王の爲めに之を恥づ。臣聞く、趙王句踐、戦敵れて、卒三千人にして、夫差を干遂に禽にす。武王卒三千人、革車三百乘にして、紂を牧野に制す。豈其の士卒衆からんや。誠に能く其の威を奮へばなり。今竊かに聞く、大王の卒、武士二十萬、蒼頭二十萬、奮擊二十萬、旃徒十萬、車六百乘、騎五千匹と。此れ其の越王句踐・武王に過ぐ

然衛人怵王。交疆虎狼之秦。以侵天下。卒有秦患。不顯其禍。夫挾疆秦之勢。以內劫其主。罪無過此者。魏天下之疆國也。王天下之賢王也。今乃有意四面而事秦。稱東藩。築帝宮。受冠帶。祠春秋。臣竊爲大王恥之。臣聞越王句踐戰敵卒三千人。禽夫差於干遂。武

ること遠し。今乃ち羣臣の説を聽きて、秦に臣事せんと欲す。夫れ秦に事へば、必ず地を割きて以て實を效さん。故に兵未だ用ひずして、國已に虧く。凡そ羣臣の秦に事へんと言ふ者は、皆姦人にして忠臣にあらざるなり。夫れ人臣となりて、其の主の地を割き、以て外交を求め、一時の功を偷取して、其後を顧みず、公家を破りて私門を成し、外疆秦の勢を挾み、以て内其の主を劫かし、以て地を割かんことを求む。願くは大王之を孰察せよ、周書に曰く、繇繇にして絶たずんば蔓蔓たるを奈何にせん。毫釐にして伐らざれば將に斧柯を用ひんとす。前慮定らずんば、後大患有らん。將に之を奈何せんとすと。大王誠に能く臣に聽き、六國從親し、心を専らにし、力を并せ、意を壹にせば、則ち必ず疆秦の患無からん。故に敵邑の趙王臣をして愚計を效して明約を奉ぜしむ。大王の詔之を詔ぐるにありと。魏王の曰く、寡人不肖、未だ嘗て明教を聞くを得ず。今主君趙王の詔を以て之に詔ぐ。敬みて國を以て從はんと。

王卒三千人。革車三百乘。制於野。豈其士卒衆哉。誠能奮其威也。今竊聞大王之卒、武士二十萬、蒼頭二十萬、奮擊二十萬、斷徒十萬、車六百乘、騎五千匹。此其過越王句踐武王遠矣。今乃聽於羣臣之說、而欲臣事秦。夫事秦必割地以效實。故兵未用而國已虧矣。凡羣臣之言事秦者、皆姦人非忠臣也。夫爲人臣、割其主之地、以求外交、偷取一時之功、而不顧其後、破公家而成私門、外挾疆秦之勢、以內劫其主、以求割地、願大王孰察之。周書曰、繇繇不絶、蔓蔓奈何。亮釐不伐、將用斧柯。前慮不定、後有大患。將奈何。大王誠能聽臣、六國從親、專心并力、壹意則必無疆秦之患。故敵邑趙王使臣效愚計、奉明約。大王之詔詔之、魏王曰、寡人不肖、未嘗得聞明教。今主君以趙王之詔詔之、敬以國從。

因東說齊宣

因りて東齊の宣王に説きて曰く、齊南に泰山あり、東に琅邪あり、西に清河有

- 人家稠密にして牛馬を牧畜する間隙無し
- 車鑿、野車の音の盛なるをいふ
- 秦の爲めに宮を築き、秦王巡狩の時の舎とす故に帝宮といふ
- 冠帯の制度、秦の法を受け、春秋賞を奉つて秦の祭祀を助く
- 兵革
- 武卒。魏氏の武卒は三屬の甲を衣、十二石の弩を操り、矢を貢ふこと五十、戈を其の上に置き、背を冠り、劍を帯び、三日の糧を顧らし、日中にして百里に趨くもの
- 齊中を以て頭を覆ひたる歩卒
- 先鋒に充つる精銳の兵卒
- 所獲の卒。炊烹饗役をなすもの
- 地を割きて秦に獻じて其の誠實を明にせん
- 綿々に同じ、草木の萌え出づること。草木綿々のうちに刈らざれば蔓蔓するを如何にせん
- 蔓のはびこること
- 斧の小さき一毫一釐。大木も毫釐の小さき芽生のうちに、伐らざれば、遂に生長して、斧柯を用ひざれば伐る能はざるに至る

王曰。齊南有泰山。東有琅琊。北有勃海。此所謂四塞之國也。齊地方二千餘里。帶甲數十萬。粟如丘山。三軍之良。五家之兵。進如鋒矢。戰如雷霆。解如風雨。即有軍役。未嘗倍泰山。絕清河。涉勃海上也。臨菑之中。七萬戶。臣竊度之。不下三戶。三男子。三七二十

り、北に勃海あり。此れ所謂四塞の國なり。齊の地方二千餘里、帶甲數十萬、粟丘山の如し。三軍の良、五家の兵、進むこと鋒矢の如く、戰ふこと雷霆の如く、解くこと風雨の如し。即ち軍役有るも未だ嘗て泰山に倍き、清河を絶り、勃海を涉らす。臨菑の中七萬戶、臣竊かに之を度るに、戸ごとに三男子に下らず。三七二十一萬、遠縣より發するを待たずして、臨菑の卒固より已に二十一萬あり。臨菑甚だ富みて實つ。其の民竿を吹き、瑟を鼓し、琴を弾じ、筑を撃ち、雞を闘はし、狗を走らせ、六博蹴鞠せざる者無し。臨菑の塗車轂擊ち、人肩摩し、枉を連ねて帷を成し、袂を舉げて幕を成し、汗を揮ひて雨を成す。家々般んに人々足り、志高く、氣揚る。夫れ大王の賢と齊の強とを以て、天下能く當るものなし。今乃ち西面して秦に事ふ。臣竊かに大王の爲めに之を羞づ。且つ夫れ韓魏の秦を重畏する所以の者は、秦と境壤界を接するが爲めなり。兵出でて相當らば、十日を出でずして戰勝存亡の機決す。韓魏戰ひて秦に勝たば、則ち兵

一萬。不待發。於遼縣。而臨菑之卒。固已二十一萬矣。臨菑甚富。而實。其民無不吹竽。鼓瑟。彈琴。擊筑。鬪雞。走狗。六博。蹴鞠。者。臨菑之塗。車。轂。擊。人。肩。摩。連。衽。成。帷。擊。鞞。成。幕。揮。汗。成。雨。家。殷。人。足。志。高。氣。揚。夫。以。三。大。王之賢。與。齊。之彊。天下。莫。能。當。今。乃。西。面。而。事。秦。臣

半ば折け、四境守られず。戰ひて勝たざれば、則ち國已に危く、亡ぶること其の後に隨はん。是の故に韓魏の秦と戰ふを重んじて之が臣となるを輕んずる所以なり。今秦の齊を攻むるは則ち然らず。韓魏の地に倍いて、衛の陽晉の道を過ぎ、亢父の險を徑り、車軌を方ふるを得ず、騎行を比ふるを得ず、百人險を守れば、千人敢へて過ぎざるなり。秦深く入らんと欲すと雖も、則ち狼顧す。韓魏の其の後を議せんことを恐るればなり。是の故に恫疑虛喝驕矜して敢へて進まず。則ち秦の齊を害する能はざるや亦明かなり。夫れ深く秦の齊を奈何ともする無きを料らすして、西面して之に事へんと欲す。是れ羣臣の計過てるなり。今秦に臣事するの名無くして、國を彊くするの實あり。臣是の故に、大王の少しく意を留めて之を計らんことを願ふと。齊王曰く、寡人不敏、遼東海を守る。窮道東境の國なり。未だ嘗て餘教を聞くを得ず。今足下趙王の詔を以て之に詔ぐ。敬みて國を以て從はん」と。



竊爲大王羞之。且夫韓魏之所三以重畏秦者、爲三與秦接境壤界也。兵出而相當。

不出二十日而戰勝存亡之機決矣。韓魏戰而勝秦。則兵半折。四境不守。戰不勝。則國已危。亡隨其後。是故韓魏之所三以重與秦戰。而輕爲之臣也。今秦之攻齊。則不然而倍韓魏之地。過衛陽晉之道。徑乎亢父之險。車不得方軌。騎不得比行。百人守險。千人不敢過也。秦雖欲深入。則狼顧。恐韓魏之議其後也。是故惘疑虛喝。騎矜而不敢進。則秦之不能害齊亦明矣。夫不深料秦之無奈何。而然四面而事之。是羣臣之計過也。今無臣事秦之名。而有疆國之實。臣是故願大王少留意計之。齊王曰。寡人不敏。僻遠守海。窮道東境之國也。未嘗得聞餘教。今足下以趙王詔詔之。敬以國從。

乃西南說楚威王曰。楚天下之疆國也。王天下之賢王也。西有黔

乃西南楚之威王に説きて曰く、楚は天下の疆國なり。王は天下の賢王なり。西に黔中巫郡有り、東に夏州・海陽有り。南に洞庭蒼梧有り。北に陘塞・郢陽有り。地方五千餘里。帶甲百萬車千乘、騎萬匹、粟十年を支ふ。此れ霸王の資なり。

中巫郡。東有夏州海陽。南有洞庭蒼梧。北有陘塞。郢陽。地方五千餘里。帶甲百萬車千乘。騎萬匹。粟支二十年。此霸王之資也。夫以楚之疆。與王之賢。天下莫能當也。今乃欲四面而事秦。則諸侯莫不三四面而朝於章臺之下矣。秦之所害。莫如楚。楚疆則秦弱。秦疆則

夫れ楚の疆と王の賢とを以て天下能く當るもの莫きなり。今乃ち西面して秦に事へんと欲せば、則ち諸侯西面して章臺の下に朝せざる莫けん。秦の害とする所、楚に如く莫し。楚疆ければ則ち秦弱く、秦疆ければ、則ち楚弱からん。其の勢、兩立せず。故に大王の爲めに計るに、從親し以て秦を孤にするに如く莫し。大王從はずんば、秦必ず兩軍を起さん。一軍武關に出で、一軍黔中に下らば、則ち郢鄢動かん。臣聞く、之を其の未だ亂れざるに治め、之を其の未だ有らざるに爲すと。患、至りて其の後に之を憂ふるも、則ち及ぶなきのみ。故に願はくは大王蚤く之を孰計せよ。大王誠に能く臣に聽かば、臣請ふ山東の國をして四時の獻を奉じ、以て大王の明詔を承けしめ、社稷を委し、宗廟を奉じ、士を練り、兵を厲し、大王の之を用ふる所に在らしめん。大王誠に能く臣の愚計を用ひば、則ち韓魏齊燕趙衛の妙音美人必ず後宮に充ち、燕代の羣駝良馬必ず外厩に實たん。故に從合はば則ち楚王たらん、衛成らば則ち秦帝たらん。今霸王の業を釋てて

● 四方に要塞ある國 ● 良は良士。よき武士 ● 管子の制したる兵隊の名 ● 齊兵の進むこと鋒巴の刀、良弓の矢の如く進みて退くなきに喩ふ。取國策に疾如錐矢に作る ● 行ごとに六事ある遊戯 ● 國勢。武士を練りて有材を知る所以のものにて、遊戯によりて之を練習する意といふ ● 懼り恐る ● 故の字或は下文の所以の二字衍文ならんとの説あり ● 兩軍並び行く能はず ● 兩騎並び行く能はず ● たゆみひて進み得ず、習性慣性にして、走るとき常に顧みゆくに喩ふ ● 道のはてなる東の國境の國

楚弱其勢不立。故爲大王計。莫如從親以孤秦。大王不從。秦必起兩軍。一軍出武關。一軍無及已。故願明詔委社稷。奉宗廟。練士厲兵。在大王之所用之。大王誠能用臣之愚計。則韓魏齊燕趙衛之妙音美人。必充後宮。燕代驪駒良馬。必實外廄。故從合則楚王。衛成秦帝。今釋霸王之業。有事人之名。臣竊爲大王不取也。

- 秦の強、威臨にあり
- 未だ事の亂れざる間に早く之を治め、事の未だ起らざる中に早く之が處置をなす
- 春夏秋冬其の季節に其の土地の産物を献上すること
- 巧妙なる音楽
- 燕及び代の地方に産する驪駒又は良き馬

夫秦虎狼之國也。有吞天下之心。秦天下之仇讎也。衛人皆欲下割諸侯之地。以事秦。此所謂養仇而奉讎也。夫秦虎狼之國なり。天下を呑むの心有り。秦は天下の仇讎なり。衛人皆諸侯の地を割き以て秦に事へんと欲す。此れ所謂仇を養ひて讎に奉ずる者なり。夫れ人臣と爲りて、其の主の地を割き、以て外強き虎狼の秦に交り、以て天下を侵し、卒に秦の患有りととも、其の禍を顧みず。夫れ外強秦の威を挾み以て内其の主を劫かし、以て地を割かんことを求む。大逆不忠此に過ぐる者無し、

夫秦虎狼之國也。有吞天下之心。秦天下之仇讎也。衛人皆欲下割諸侯之地。以事秦。此所謂養仇而奉讎也。

夫れ秦は虎狼の國なり。天下を呑むの心有り。秦は天下の仇讎なり。衛人皆諸侯の地を割き以て秦に事へんと欲す。此れ所謂仇を養ひて讎に奉ずる者なり。夫れ人臣と爲りて、其の主の地を割き、以て外強き虎狼の秦に交り、以て天下を侵し、卒に秦の患有りととも、其の禍を顧みず。夫れ外強秦の威を挾み以て内其の主を劫かし、以て地を割かんことを求む。大逆不忠此に過ぐる者無し、

者也。夫爲二人臣。割其主之地。以外交彊虎狼之秦。以侵天下。卒有秦患。不顧其禍。夫外挾彊秦之威。以內劫其主。以求割地。大逆不忠。無過此者。故從親則諸侯割地以事楚。衡合則楚割地以事秦。此兩策者。相去遠矣。二者大王何居焉。故敝邑趙王。使臣效愚計。

故に從親せば、則ち諸侯地を割きて以て楚に事へ、衡合せば則ち楚地を割きて以て秦に事へん。此の兩策は相去ること遠し。二者大王何れにか焉れ居る。故に敝邑の趙王臣をして愚計を效し明約を奉せしむ。大王の之に詔ぐるにありと。楚王曰く、寡人の國、西秦と境を接す。秦巴蜀を擧げ、漢中を并するの心有り。秦は虎狼の國にして親しむべからざるなり。而して韓魏秦の患に迫られ、與に深く謀るべからず。與に深く謀らば、恐らくは人に反き以て秦に入らん。故に謀未だ發せずして國已に危し。寡人自ら料るに、楚を以て秦に當る、勝つとを見ざるなり。内羣臣と謀る、恃むに足らざるなり。寡人臥するも席に安んぜず。食へども味を甘しとせず。心搖搖然として縣旌の如くしにて、終に薄る所無し。今主君天下を一にし、諸侯を收めて危國を存せんと欲す。寡人謹みて社稷を奉じて以て從はんと。

- 合從せば
- 連衡せば
- 吊り下げたる旌旗
- とまり着く

奉明約。在大王詔之。楚王曰。寡人之國。西與秦接境。秦有舉巴蜀。并漢中之心。秦虎狼之國。不可親也。而韓魏迫於秦。患不可與深謀。與深謀。恐反人。以入於秦。故謀未發。而國已危矣。寡人自料。以楚當秦。不見勝也。內與羣臣謀。不足恃也。寡人臥不安席。食不甘味。心搖搖然。如縣旌。而無所終薄。今主君欲一天下。收諸侯。存危國。寡人謹奉社稷。以從。

於是六國從合。而并力焉。蘇秦爲從約長。并相六國。北報趙王。乃行過雒陽。車騎輻重。諸侯各發使送之。甚衆。擬於王者。周顯王聞之。恐懼。除道。使人郊勞。蘇秦之昆弟妻嫂側目。不敢仰視。俯伏侍

是に於て六國從合して力を并す。蘇秦從約の長となり。六國に并せ相たり。北趙王に報ず。乃ち行きて雒陽を過ぐ。車騎輻重。諸侯各々使を發して之を送るもの甚だ衆く。王者に擬す。周の顯王之を聞きて恐懼し。道を除きて人をして郊勞せしむ。蘇秦の昆弟妻嫂目を側て敢へて仰ぎ視ず。俯伏し侍して食を取る。蘇秦笑ひて其の嫂に謂ひて曰く。何ぞ前には倨りて後には恭しきやと。嫂委蛇蒲服し。面を以て地を掩ひて謝して曰く。季子の位高く金多きを見ればなりと。蘇秦喟然として歎じて。曰く。此れ一人の身のみ。富貴なれば則ち親戚も之を畏懼し。貧賤なれば則ち之を輕易す。況や衆人をや。且つ我をして雒陽負郭の田二頃を有せしめば。吾豈六國の相印を佩びんやと。是に於て千金を散じて以て

取食。蘇秦笑謂其嫂曰。何前倨而後恭也。嫂委蛇蒲服。以面掩地。而謝曰。見季子位高金多。也。蘇秦喟然歎曰。此一人之身。富貴則親戚長懼之。貧賤則輕易之。況衆人乎。且使我有雒陽負郭田二頃。吾豈能佩六國相印乎。於是散千金。以賜宗族朋友。初蘇秦之

宗族朋友に賜ふ。初め蘇秦の燕に之くや。百錢を貸りて資と爲せり。富貴を得るに及び。百金を以て之を償ふ。徧く諸の嘗て德せられし所の者に報ゆ。其の從者一人有り。獨り未だ報を得ず。乃ち前みて自ら言ふ。蘇秦曰く。我子を忘れたるにあらす。子の我と燕に至るに。再三我を易水の上に去らんと欲す。是の時方に我困しむ。故に子を望むこと深し。是を以て子を後にす。子今亦得んと。蘇秦既に六國に約して從親して趙に歸る。趙の肅侯封じて武安君と爲し。乃ち從約の書を秦に投ず。秦の兵敢へて函谷關を闚はざる。十五年なり。其後秦犀首をして齊魏を欺き。與に共に趙を伐たしめて。從約を破らんと欲す。齊魏。趙を伐つ。趙王蘇秦を讓む。蘇秦恐れ。燕に使用して必ず齊に報いんと請ふ。蘇秦趙を去つて從約皆解く。

● 實近郊に至れば、君主其の卿をして朝服して東向を以て之を勞はしむ ● 正視する能はざるなり ● 身を屈めて蛇の行くが如くす。恐るく歩くさま ● 旬旬、はちばふこと ● 季子は蘇秦の字と云ひ、又は嫂小叔を呼んで季子と云ふと ● 貢は背なり、城に近き郊外の地 ● 一頃は百畝 ● 器は器

燕貸二百錢爲資。及得富貴。以二百金償之。徧報諸所嘗見德者。其從者有一人。獨未得報。乃前自言。蘇秦曰。我非忘子。子之與我至燕。再三欲去。我易水之上。方是時。我困。故望子深。是以後子。子亦得矣。蘇秦既約六國。從親歸趙。趙肅侯封爲武安君。乃投從約書於秦。秦兵不敢關函谷關十五年。其後秦使犀首欺齊魏。與共伐趙。欲破從約。齊魏伐趙。趙王讓蘇秦。蘇秦恐。請使燕。必報齊。蘇秦去趙。而從約皆解。

秦惠王以其女爲燕太子婦。是歲。文侯卒。太子立。是爲燕易王。易王初立。齊宣王因燕喪。伐燕。取十城。易王謂蘇秦曰。往日先生至燕。而先王資先生。見趙。遂約六國。從。今

秦の惠王其の女を以て燕の太子の婦と爲す。是の歳文侯卒す。太子立つ。是を燕の易王と爲す。易王初めて立つや、齊の宣王燕の喪に因り、燕を伐ちて十城を取る。易王蘇秦に謂ひて曰く、往日先生燕に至る。先王先生に資して趙に見えしむ。遂に六國の從を約す。今齊先づ趙を伐ち次いで燕に至る。先生の故を以て天下の笑と爲る。先生能く燕の爲めに伎地を得んかと。蘇秦大に慙ちて曰く、請ふ、王の爲めに之を取らんと。蘇秦齊王に見え、再拜して俯して慶し、仰いで弔す。齊王曰く、是れ何ぞ慶弔相隨ふの速かなるやと。蘇秦曰く、臣聞く、飢人飢ゑて烏啄を食はざる所以の者は、其の愈々腹に充ちて而かも餓死すると愚を

齊先伐趙。次至燕。以先生之故。爲天下笑。先生能爲燕得侵地乎。蘇秦大慙曰。請爲王取之。蘇秦見齊王。再拜俯而慶。仰弔。齊王曰。是何慶弔相隨之速也。蘇秦曰。臣聞。飢人所以飢而不可食。烏啄者。爲其愈充腹。而與餓死同也。今燕雖弱。小即秦王之少婿也。大

同じくするが爲めなり。今燕弱小なりと雖も即ち秦王の少婿なり。大王其の十城を利して長く彊秦と仇を爲す。今弱燕をして鴈行を爲して、彊秦をして其の後を敵ひて以て天下の精兵を招かしめば、是れ烏啄を食ふの類なりと。齊王愀然として色を變じて曰く、然らば則ち奈何と。蘇秦曰く、臣聞く古の善く事を制する者は、禍を轉じて福となし、敗に因りて功をなすと。大王誠によく臣が計を聽かば、即ち燕の十城を歸せ。燕故無くして十城を得ば、必ず喜ばん。秦王己の故を以て燕の十城を歸すを知らば、亦必ず喜ばん。此れ所謂仇讎を弃てて石交を得る者なり。夫れ燕秦俱に齊に事へば、則ち大王の號令天下敢へて聽かざる莫けん。是れ王虛辭を以て秦を附け、十城を以て天下を取る。此れ霸王の業なりと。王曰く、善しと。是に於て乃ち燕の十城を歸す。

● 侵略せられたる土地。百が齊に取られたる地 ● 毒草、烏頭(トリカブト)の一名 ● 年、死と相若く者と共に道を行くとき、序行してや、後を退きゆくこと。跟從すること ● 怒ひて顔色の變ずるさま ● 堅き交り、

王利其十城。而長與遷秦。爲仇。今使弱燕爲鷹行。而彊秦敵其後。以招天下之精兵。是食鳥喙之類也。齊王愀然變色。曰。然則奈何。蘇秦曰。臣聞古之善制事者。轉禍爲福。因敗爲功。大王誠能聽臣計。即歸燕之十城。燕無故而得二十城。必喜。秦王知以己之故而歸燕之十城。亦必喜。此所謂齊仇讎而得石交者也。夫燕秦俱事齊。則大王號令天下。莫敢不聽。是王以虛辭附秦。以二十城取天下。此霸王之業也。王曰。善。於是乃歸燕之十城。

劉文 實の損失なく軍に辭のみを以て妾を附く

人有毀蘇秦者。曰。左右賣國。反覆之臣也。將作亂。蘇秦恐得罪歸。而燕王不復信也。蘇秦見燕王曰。臣東周之鄙人也。無有分寸之功。而王親拜

人蘇秦を毀る者あり。曰く、左右に國を賣るは反覆の臣なり。將に亂を作さんとす。蘇秦罪を得んことを恐れて歸る。而れども燕王官を復せず。蘇秦燕王に見えて曰く、臣は東周の鄙人なり。分寸の功有る無くして、王親ら之を廟に拜し、之を廷に禮す。今臣王の爲めに齊の兵を却けて、攻めて十城を得たり。宜しく以て益々親しくせらるべし。今來れども王臣を官せざるは、人必ず不信を以て臣を王に傷る者あらん。臣の不信なるは、王の福なり。臣聞く、忠信なる者は自ら爲めにする所以なり。進取する者は人の爲めにする所以なり。且つ臣の齊王に説

之於廟。而禮之於廷。今臣爲王却齊之兵。而攻得十城。宜以益親。今來而王不官臣者。人必有以不信。傷臣於王者。臣之不信。王之福也。臣聞忠信者。所以自爲也。進取者。所以爲人也。且臣之說齊王。皆非欺之也。臣奔老母於東周。圖去自爲。而行進取也。今有孝

くや、曾て之を欺くにあらざるなり。臣老母を東周に棄つ。固より自ら爲めにするを去つて、進取を行ふなり。今孝なること曾參の如く、廉なること伯夷の如く、信なること尾生の如くなる有り。此の三人の者を得て、以て大王に事へば何若と。王曰く、足れりと。蘇秦曰く、孝なること曾參の如き、義其の親を離れて外に一宿せず。王又安んぞ能く之をして千里に步行して、弱燕の危王に事へしめんや。廉なること伯夷の如き、義孤竹君の嗣と爲らず。肯て武王の臣とならず、封侯を受けずして、首陽山の下に餓死す。廉なること此の如きあり。王又安んぞ能く之をして千里に步行して齊に進取するを行はしめんや。信なること尾生の如き、女子と梁下に期し、女子來らず。水至れども去らず。柱を抱きて死す。信なること此の如き有り。王又安んぞ能く之をして千里に步行して、齊の彊兵を却けしめんや。臣は所謂忠信を以て罪を上に出る者なりと。

● 言行表裏ある臣 ● 天子の宗廟に於て位を授け職に任ず ● 朝廷に於て禮遇す ● 義を守りて親の例を

如甘參、廉如、伯夷、信如、尾生、得此三人

者。以事大王何若。王曰。足矣。蘇秦曰。孝如甘參。義不離其親。一宿於外。王又安能使之步。行千里。而事弱燕之危。王上哉。廉如伯夷。義不爲孤竹君之嗣。不肯爲武王臣。不受封侯。而餓死首陽山下。有廉如。此王又安能使之步行千里。而行也。進取於齊哉。信如尾生。與女子期於梁下。女子不來。水至不去。抱柱而死。有信如。此王又安能使之步行千里。却齊之疆兵上哉。臣所謂以忠信得罪於上者也。

燕王曰。若不忠信耳。豈有以忠信而得罪者乎。蘇秦曰。不然。臣聞客有遠爲吏。而其妻私於人者。其夫將來。其私者憂之。妻曰。勿憂。

燕王曰。若忠信ならざるのみ。豈忠信を以て罪を得る者あらんやと。蘇秦曰。然らず。臣聞く、客に遠く吏となりて、其の妻人に私する者あり。其の夫將來に來らんとす。其の私する者之を憂ふ。妻曰く、憂ふる勿れ、吾已に藥酒を作りて之を待てりと。居ること三日、其の夫果して至る。妻、妾をして藥酒を舉げて之を進めしむ。妾、酒の藥有るを言はんと欲すれば則ち其の主母を逐はんことを恐る。言ふ勿からんと欲せんか、則ち其の主父を殺さんことを恐る。是に於てか、

離れず、一夜も外に宿ることなし。女と隣の下に會せんことを約し、女來らず、爵下水澗り來れども約を守りて去らず、遂に腐杖を抱きて溺死す。

吾已作藥酒。待之矣。居三日。其夫果至。妻使妾舉藥酒進之。妾欲言酒之有藥。則恐其逐主母也。欲勿言乎。則恐其殺主父也。於是乎。詳價而奔酒。主父大怒。答之五十。故妾一價而覆酒。上存主父。下存主母。然而不免於答。惡在乎。忠信之無罪也。夫臣之過。不幸

詳り僞れて酒を棄つ。主父大に怒りて之を答つこと五十。故に妾一たび僞れて酒を覆へし、上は主父を存し、下は主母を存す。然り而して答たるを免れず。惡んぞ忠臣の罪無きに在らんや。夫れ臣の過は不幸にして是に類するかと。燕王曰く、先生復び故の官に就けと。益々厚く之を遇す。易王の母は文侯の夫人なり。蘇秦と私かに通ず。燕王之を知りて之に事ふること加々厚し。蘇秦誅を恐れて乃ち燕王に説きて曰く、臣燕に居らば燕をして重からしむる能はず。而して齊に在らば則ち燕必ず重からんと。燕王曰く、唯先生の爲す所のまよふこと。是に於て蘇秦詳りて罪を燕に得たりと爲して、亡けて齊に走る。齊の宣王以て客卿と爲す。齊の宣王卒し、潛王位に即く。潛王に説きて葬を厚くし以て孝を明かにせしめ、宮室を高くし、苑囿を大にし以て得意を明かにせしむ。齊を破散して燕の爲めにせんと欲するなり。燕の易王卒す。燕の噲立ちて王となる。其の後齊の大夫蘇秦と寵を争ふ者多し。而して人をして蘇秦を刺さしむ。死せず。

而類是乎。燕王曰。先生復就故官。益厚遇之。易王母。文侯夫人也。與蘇秦私通。蘇秦恐之。而燕王知之。而事之加厚。蘇秦恐之。乃說蘇秦曰。臣居燕。不能使燕重。而在齊。則燕必重。燕王曰。唯先生之所為。於是蘇秦詳為得罪於燕。而亡走齊。齊宣王以為客卿。齊宣王卒。潘王即位。說潘王。厚葬以明孝。高宮室。大苑囿。以明得意。欲破敵齊。而為燕。燕易王卒。燕噲立為王。其後齊大夫多與蘇秦爭寵。而使三人刺蘇秦。不殺。而蘇秦死。蘇秦死。而齊王使二人求賊。不得。蘇秦且死。乃謂齊王曰。臣即死。車裂臣。以徇於市。曰。蘇秦為燕作亂於齊。如此。則臣之賊必得矣。於是如其言。而殺蘇秦者果自出。齊王因而誅之。燕聞之曰。甚矣。齊之為蘇秦報仇也。蘇秦既死。其事大泄。齊後聞之。乃恨怒燕。燕甚恐。

● 密通す、私通す ● 詐なり、佯なり ● 殊は死なり、不死死而定といふは、即死せざれども之れ致命の過なるをいふ

蘇秦の弟を代と曰ふ。代の弟蘇厲、兄の遂けたるを見て、亦皆學ぶ。蘇秦死するに及び、代乃ち燕王に見えんことを求め、故事を襲がんと欲す。曰く、臣は東周の鄙人なり。竊かに大王の義甚だ高きを聞く、鄙人不敏、鉏耨を釋てて大王に干む。邯鄲に至り、見る所の者は、東周にて聞きし所より細す。臣竊かに其の志に負く。燕廷に至るに及び、王の羣臣下吏を觀るに、王は天下の明王なり。燕王曰く、子の所謂明王とは何如と。對へて曰く、臣聞く、明王は其の過を聞かんことを務め、其の善を聞かんことを欲せずと。臣請ふ、王の過を詢けん。夫れ齊趙は燕の仇讎なり。楚魏は燕の援國なり。今王仇讎を奉じ、以て援國を伐つ。燕に利する所以にあらざるなり。王自ら之を慮れ。此れ則ち計過てり。以て聞する者なきは忠臣にあらざるなりと。王曰く、夫れ齊は固寡人の讎にして、伐たんと欲する所なり。直に國敵え力足らざるを患ふるなり。子能く燕を以て齊を伐たば、則ち寡人國を擧げて子に委ねんと。對へて曰く、凡そ天下

蘇秦の弟曰く、代。代弟蘇厲。見兄遂亦皆學。及蘇秦死。代乃求見燕王。王欲襲故事。曰。臣東周之鄙人也。竊聞大王義甚高。鄙人不敏。釋鉏耨而于大王。王至於邯鄲。所見者細於所聞於東周。臣竊負其志。及至燕廷。觀王之羣臣下吏。王天下之明王也。燕王曰。子所謂明

王者何如也。對曰。臣聞明王。務開其過。不欲聞其善。臣請謁王之過。夫齊趙者。燕之仇讎也。楚魏者。燕之援國也。今王奉仇讎以伐援國。非所以利燕也。王自慮之。此則計過無以聞者。非忠臣也。王曰。夫齊者。固寡人之讎。所欲伐也。直患國敵力不足也。子能以燕伐齊。則寡人舉國委子。對曰。凡天下戰國七。燕處弱焉。獨戰則不能。有所附則無不重。南附楚楚重。西附秦秦重。中附韓魏韓魏重。且苟所附之國重。此

の戰國七あり。燕弱に處る。獨り戰へば則ち能はず。附く所あらば則ち重からざる無けん。南楚に附けば楚重く、西秦に附けば秦重く、中韓魏に附けば韓魏重し。且つ苟も附く所の國重ければ、此れ必ず王をして重からしめん。今夫れ齊は長主にして自ら用ふるなり。南、楚を攻むること五年、畜聚竭き、西、秦に困しむこと三年、士卒罷散す。北、燕人と戦ひて三軍を覆へし、二將を得たり。然り而して其餘兵を以て、南面して五千乘の大宋を擧げて十二諸侯を包ぬ。此れ其の君の欲得たれども、其民の力竭きたり。惡んぞ取るに足らんや。且つ臣之を聞く、數々戰へば則ち民勞し、久しく師すれば則ち兵散ると。

● 兄の成功を見て ● 鉅は鉅なり、舞は舞なり、田の草を刈る如 ● 屈に同じ、及ばざる意 ● 諸國に附けば、諸國を尊重して諸國の國となるをいふ ● 齊王年長にして我が計を専ら用ふるの意 ● 積み貯へたる軍資 ● 衰れやぶる ● 君の欲望は遂げられたり

必使王重矣。今夫齊長主而自用也。南攻楚五年。畜聚竭。西困秦三年。士卒罷散。北與燕人戰。覆三軍。得二將。然而以其餘兵南面舉五千乘之大宋。而包十二諸侯。此其君欲得其民力竭。惡足取乎。且臣聞之。數戰則民勞。久師則兵散矣。

燕王曰。吾聞齊有清濟濁河。可以爲固。長城鉅防。足以爲塞。誠有之乎。對曰。天時不與。雖有清濟濁河。惡足以爲固。民力罷散。雖有長城鉅防。惡足以爲塞。且異日濟西不師。所以備趙也。河北不師。所以備燕也。今齊西北。

燕王曰く、吾聞く、齊に清濟濁河有り、以て固めと爲すべし。長城鉅防以て塞と爲すに足ると。誠に之れ有りやと。對へて曰く、天の時與せざれば、清濟濁河有りとも雖も、惡んぞ以て固めと爲すに足らん。民力罷散すれば、長城鉅防有りとも雖も、惡んぞ以て塞と爲すに足らん。且つ異日濟西に師せざりしは、趙に備ふる所以なり。河北に師せざりしは、燕に備ふる所以なり。今濟西・河北盡く已に役せり。封内敵れたり。夫れ驕君は必ず利を好み、亡國の臣は必ず財を貪る。王誠に能く、寵子母弟以て質となし、寶珠玉帛以て左右に事ふるを羞づる無くんば、彼將に燕を德として、輕しく宋を亡すこと有らんとす。則ち齊は亡ほすべきのみと。燕王曰く、吾終に子を以て命を天に受くと。燕乃ち一子をして齊に質たらしむ。蘇厲燕の質子に因つて齊王に見えんことを求む。齊王蘇秦を怨みて蘇厲



盡已役矣。封內敵失。夫厲君必好利。而亡國之臣必貪於財。王誠能無羞寵子母弟以爲質。寶珠玉帛以事左右。彼將有德。燕而輕亡。宋則齊可亡。已。燕王曰。吾終以子。受命於天。矣。燕乃使一子質於齊。而蘇厲因二燕質子。而求見齊王。齊王怨蘇秦。欲囚蘇厲。蘇厲質子爲謝。已遂委質爲齊臣。燕相子之與蘇代。婚。而欲得二燕權。乃使蘇代侍質子於齊。齊使代報燕。燕王噲問曰。齊王其歸乎。曰。不能。曰。何也。曰。不信其臣。於是燕王專任子之。已而讓位。燕大亂。齊伐燕。殺二王噲子之。

● 巨大なる防壁の壘壁 ● 清河の西に於て民を軍役に徴發せざりしをいふ ● 營に同じ、聘物を君に擧げて臣となる ● 燕王子之位を譲る

燕昭王を立てて蘇代・蘇厲遂に敢へて燕に入らず、皆終に齊に歸る。齊善く之を待つ。蘇代魏を過ぐ。魏、燕の爲めに代を執ふ。齊、人をして魏王に謂はしめて曰

終歸齊。齊善待之。蘇代過魏。魏爲燕執。代。齊使三人謂魏王曰。齊請以宋地封中涇陽君。秦必不。受。秦非不利。有齊而得宋地也。不信齊王與蘇子也。今齊魏不和。如此其甚。則齊不欺秦。秦信齊。齊秦合。涇陽君有宋地。非魏之利也。故王不如也。蘇子。秦必疑齊。而不信

く、齊、宋の地を以て涇陽君を封せんと請ふ。秦必ず受けじ。秦、齊を有ちて宋の地を得るを利とせざるに非ざるなり。齊王と蘇子とを信ぜざればなり。今齊魏和せざること此の如く其れ甚し。則ち齊秦を欺かず、秦齊を信ぜば、齊秦合はん。涇陽君宋の地を有するは魏の利にあらざるなり。故に王、蘇子を東せしむるに如かず、秦必ず齊を疑ひて蘇子を信ぜざらん。齊秦合はずんば、天下變無く、齊を伐つの形成らんと。是に於いて蘇代を出す。代宋に之く。宋善く之を待つ。齊、宋を伐つ。宋急なり。蘇代乃ち燕の昭王に書を遺りて曰く、夫れ列して萬乘に在りて質を齊に寄す。名卑しうして權輕し。萬乘を奉じ、齊を助けて宋を伐つ。民勞して實費の。夫れ宋を破り、楚の淮北を殘ひ、齊を肥大にせば、疆くして國害あり。此の三者は皆國の大敗なり。然も且つ王之を行ふ者は將に以て信を齊に取らんとすればなり。齊加々王を信ぜず、燕を忌むこと愈々甚しからん。是れ王の計過てり。夫れ宋を以て之を淮北に加ふるは萬乘の國を疆く

蘇子矣。齊秦不合。天下無變。伐齊之形成矣。於是出蘇代。代之宋。宋善待之。齊伐宋。宋急。蘇代乃遣燕昭

王書曰。夫列在萬乘。而寄質於齊。名卑而權輕。奉萬乘。助齊伐宋。民勞而實費。夫破宋。殘楚。淮北。肥大齊。疆而國害也。此三者。皆國之大敗也。然且王行之者。將以取信於齊也。齊加不信於王。而忌燕愈甚。是王之計過矣。夫以宋加之。淮北。疆萬乘之國也。而齊并之。是益一齊也。北夷方七百里。加之。以魯衛。疆萬乘之國也。而齊并之。是益二齊也。夫一齊之疆。燕猶狼顧。而不能支。今以三齊。臨燕。其禍必大矣。

雖然。智者舉事。因禍爲福。轉敗爲功。齊紫敗素也。而買十倍。越王句踐棲於會

するなり。而して齊之を并はす。是れ一齊を益すなり。北夷の方七百里、之に加ふるに魯衛を以てす、萬乘の國を疆くするなり。而して齊之を并はす。是れ二齊を益すなり。夫れ一齊の疆きすら、燕猶ほ狼顧して支ふる能はず。今三齊を以て燕に臨む、其の禍必す大ならん。

● 秦王之弟、名は悝。涇陽は雍州の縣 ● 山戎北狄の齊に附く者をいふ

然りと雖も、智者は事を舉ぐれば、禍に因りて福と爲し、敗を轉じて功と爲す。齊の紫は敗素なり。而して買十倍す。越王句踐會稽に棲して復び疆吳を殘して天下に霸たり。此れ皆禍に因りて福と爲し、敗を轉じて功と爲すもの

種。復殘疆吳。而霸天下。此皆因禍爲福。轉敗爲功者也。今王若欲因禍爲福。轉敗爲功。則莫若挑釁齊而尊之。使使盟於周室。焚秦符曰。其大上計破秦。其次必長資之。秦挾資以待破。秦王必患之。秦五世伐諸侯。今爲齊下。秦王之志。苟得窮齊。不憚以國爲功。然

なり。今王若し、禍に因りて福と爲し、敗を轉じて功となさんと欲せば挑みて齊を霸として之を尊ぶに若く莫し。使をして周室に盟はしめ、秦の符を焚きて曰へ、其の大上計は秦を破らん、其の次は必ず長く之を資せんと。秦資せらるるを挾み、以て破るゝを待たば、秦王必ず之を患へん。秦五世諸侯を伐つ。今齊の下たり。秦王の志、苟くも齊を窮せしむるを得ば、國を以て功となすに憚らず。然れば則ち王何ぞ辯士をして此の言を以て秦王に説かしめざる。曰く、燕趙宋を破り、齊を肥し、之を尊び、之が下となるものは、燕趙之を利とするにあらざるなり。燕趙利とせざれども、勢ひ之を爲すものは、秦王を信ぜざるを以てなり。然れば則ち王何ぞ信す可き者をして燕趙を接收せしめざる。涇陽君高陵君をして燕趙に先んせしめよ。秦變有らば因つて以て質と爲せば、則ち燕趙秦を信ず、秦西帝となり、燕北帝となり、趙中帝と爲らん。三帝を立てて以て天下に令す。韓魏聽かざれば、則ち秦之を伐ち、齊聽かざれば、則ち燕趙之を伐たん。天

則王何不使下  
辯士以三言一  
說秦王曰。燕  
趙破宋。肥齊  
尊之。爲之。下  
者。燕趙非利  
之也。燕趙不  
利。而勢爲之  
者。以不信秦  
王也。然則王  
何不使下辯士  
者。接收燕趙。  
令涇陽君。高  
陵君。先於燕  
趙。秦有變。因  
以爲質。則燕  
趙信秦。秦爲  
四帝。燕爲北  
帝。趙爲中帝。  
立三帝。以令

下孰敢不聽。天下服聽。因驅韓魏以伐齊。曰。必宋地。歸楚淮北。反宋地。歸楚淮北。燕趙之所利也。立三帝。燕趙之所願也。夫實得所利。尊得所願。燕趙奔齊。如脫履矣。今不收燕趙。齊必成。諸侯贊齊。而王不從。是國伐也。諸侯贊齊。而王從之。是名卑也。今收燕趙。國安而名尊。不收燕趙。國危而名卑。夫去尊安。而取危卑。智者不爲也。秦王聞若說。必若刺心。然則王何不使下辯士。以三苦言說秦。秦必取齊。必伐矣。夫取秦厚交也。伐齊正利也。尊厚交。務正利。聖主之事也。

○齊の桓公好みて繁服を着る。下之にならひて一國盡く繁を着す。故に繁服の類きものを染めて繁とし其價十倍

す。敗を轉じて功と爲すに喩ふ。敗案は飽饑なる白粥 ○ 敗れて引籠る ○ 誘ひ起す、動かし起す ○ 最も  
良好の計策は秦を破るにあり。次の計策は水久に國西に攘斥するにあり。實は攘なり ○ 秦王の母弟、涇陽君名  
は涇、高陵君名は涇 ○ 實利とする所の土地を得、願ふ所の帝といふ尊位を得 ○ 國に通ず、草履 ○ 痛苦  
を感ずることを及以て胸を刺さるゝが如くなるん

於天下。韓魏  
不聽。則秦伐  
之。齊不聽。則  
燕趙伐之。天  
下孰敢不聽。  
天下服聽。因  
驅韓魏以伐  
立三帝。燕趙  
成。諸侯贊齊  
不收燕趙。國  
何不使下辯士  
利。聖主之事也。

燕昭王善其書曰。先人嘗有德蘇氏。子之之亂。而蘇氏去燕。燕欲報仇於齊。非蘇氏莫可。乃召蘇代。復善燕昭王其書。善其書。蘇代曰。先人嘗有德蘇氏。子之之亂。而蘇氏去燕。燕欲報仇於齊。非蘇氏莫可。乃召蘇代。復善

待之。與謀伐齊。竟破齊。潘王出走。久之。秦召燕王。燕王欲往。蘇代約燕王曰。楚得枳而國亡。齊得宋而國亡。齊楚不得。以有積宋。而事秦者。何也。則有功者。秦之深讎也。秦取天下。非行義也。暴也。秦之行暴。正告天下。告楚曰。蜀地之甲。乘船浮於汶。乘夏水而下江。

得ざる者は何ぞや。則ち功ある者は秦の深讎なり。秦天下を取るは義を行ふにあらざるなり。暴なり。秦の暴を行ふや。天下に正告す。楚に告げて曰く、蜀地の甲、船に乗りて汶に浮び、夏水に乗じて江を下らば五日にして郢に至らん。漢中の甲、船に乗りて巴に出で、夏水に乗じて漢を下らば四日にして五渚に至らん。寡人甲を宛に積み、東隨に下らば、智者も謀るに及ばず、勇士も怒るに及ばず。寡人軍を射るが如し。王乃ち天下の函谷を攻むるを待たんと欲す、亦遠からずやと。楚王是が爲めの故に、十七年秦に事ふ。秦韓に正告して曰く、我少曲より起たば、一日にして大行を断たん。我宜陽より起ちて平陽に觸れば、二日にして盡く繇がざる莫けん。我兩周を離て、鄭に觸れば、五日にして國舉らんと。韓氏以て然りと爲す。故に秦に事ふ。秦魏に正告して曰く、我安邑を擧げ、女戟を塞がば、韓氏の太原は卷せられん。我軹道・南陽・封冀に下り、兩周を包ね、夏水に乗じ、輕舟を浮べ、彊弩前に在り、鉞戈後に在り。穀口を決せば魏に大梁

無けん。白馬の口を決せば、魏に外黄・濟陽無けん。宿胥の口を決せば、魏に盧頓丘無けん。陸攻は則ち河内を撃ち、水攻は則ち大梁を滅さんと。魏氏以て然りと爲す。故に秦に事ふ。

- 巴郡枳縣
- 固然として天下に告ぐるをいふ
- 軍
- 夏時雨水盛にして漲る時に乘ず
- 易に、射
- 集于高城之上、種之無不利と。秦王楚を伐たば必ず捷を得るを喻へいふ。集は鶴、はやぶさ
- 地名、宜陽に近し
- 太行山。並國たる坂道の上高を過ぎる
- 宜陽平陽みな韓の都
- 搖なり、動なり
- 懸なり
- 國を抜くべしと
- 斷絶せられん
- 鉞は利なり。鉞戈はよく切れる戈
- 葵澤の口、其水深くして大梁に灌ぐべし
- 白馬津の口

五日而至郢。漢中之甲。乘船出於巴。乘夏水而下漢。四日而至五渚。寡人積甲宛。東下隨。智者不及謀。勇士不及怒。寡人如射準矣。王乃欲待三天。下之攻函谷。不亦遠乎。楚王爲是故十七年事秦。秦正告韓曰。我起乎少曲。一日而斷大行。我起乎宜陽。而觸平陽。二日而莫不盡繇。我離兩周。而觸鄭。五日而國舉。韓氏以爲然。故事秦。秦正告魏曰。我舉安邑。塞女戟。韓氏太原卷。我下軹道。南陽封冀。包兩周。乘夏水。浮輕舟。彊弩在前。鉞戈在後。決大梁。決白馬之口。魏無外黄。濟陽。決宿胥之口。魏無盧頓丘。陸攻則擊河内。水攻則滅大梁。魏氏以爲然。故事秦。

秦欲攻安邑。

秦安邑を攻めんと欲すれども、齊の之を救はんことを恐る。則ち宋を以て齊に委

恐齊救之。則以宋委於齊。曰。宋王無道。爲木人以寫寡人。射其面。寡人地絕兵遠。不能攻也。王苟能破宋。有之。寡人如自得之。已得安邑。塞女戟。因以破宋。爲齊罪。秦欲攻之。則以齊委於天下。曰。齊王四與寡人約。四欺寡人。必率天下以攻寡人者三。

して曰く、宋王無道、木人を作りて以て寡人を寫し、其の面を射る。寡人地絶え、兵遠くして、攻むる能はざるなり。王苟も能く宋を破りて之を有たば、寡人自ら之を得る如しと。已に安邑を得て、女戟を塞げば、因りて宋を破るを以て齊の罪となさん。秦韓を攻めんと欲すれども、天下の之を救はんことを恐る。則ち齊を以て天下に委して曰く、齊王四たび寡人と約し、四たび寡人を欺く。必ず天下を率ゐて以て寡人を攻むる者三たび。齊有らば秦無からん、秦有らば齊無からん。必ず之を伐ち、必ず之を亡せよと。已に宜陽少曲を得て、蘭石を致せば、因りて齊を破るを以て天下の罪と爲さん。秦魏を攻めんと欲し、楚を重る。則ち南陽を以て楚に委して曰く、寡人固韓と且に絶たんとす。均陵を殘し、鄆郢を塞げよ。苟くも楚に利ならば、寡人自ら之を有つが如しと。魏與國を弃てて秦に合すれば、因りて鄆郢を塞ぐを以て楚の罪となす。兵林中に困しみ、燕趙を重りて、膠東を以て燕に委し、濟西を以て趙に委す。趙魏に講ずるを得れば、公子延

有齊無秦。有秦無齊。必伐之。必亡之。已得宜陽少曲。致蘭石。因以破齊。爲天下罪。秦欲攻魏。重楚。則以二南陽。委於楚。曰。寡人固與韓且絶矣。殘均陵。塞鄆郢。苟利於楚。寡人如自有之。魏奔與國。而合於秦。因以塞鄆郢。爲楚罪。兵困於林中。重燕趙。以膠東。委於燕。以二濟西。委於趙。趙得講於魏。至公子延。因犀首。屬行而攻趙。兵傷於讎石。遇敗於陽馬。而重魏。則以二葉蔡。委於魏。已得講於趙。則劫魏。不爲割。困則使二太后弟穰侯。爲和。贏則兼二欺舅與母。

を至とし、犀首に因りて、行を屬して趙を攻む。兵讎石に傷つき、陽馬に敗られ、魏を重りて則ち葉蔡を以て魏に委す。已に趙に講ずるを得れば、則ち魏を劫かして爲めに割かず、困しめば則ち太后の弟穰侯をして和をなさしめ、贏てば則ち舅と母とを兼ね欺く。

- もくざう、木像
- かたどる
- 楚魏を救はんことを畏る、をいふ
- 居る
- 同盟の國、楚をさす
- 河南苑陵の林郷
- 趙の字衍文か
- 和なり、秦魏と和するをいふ
- 質となすをいふ
- 勝つに同じ
- 舅は穰侯魏冉、母は太后を斥す

適燕者曰以膠東。適趙者曰以二濟西。適魏者曰以二葉

燕を適むる者は膠東を以てすと曰ひ、趙を適むる者は濟西を以てすと曰ひ、魏を適むる者は葉蔡を以てすと曰ひ、楚を適むる者は鄆郢を塞ぐを以てすと曰ひ、齊

蔡適楚者曰以塞鄆。適齊者曰以宋。此必令言如循環。用兵如刺。豈母不能制。舅不能約。龍買之戰。岸門之戰。封陵之戰。高商之戰。趙莊之戰。秦之所殺。三晉之民。數百萬。今其生者。皆死秦之孤也。西河之外。上雒之地。三川晉國之禍。禍如。此其大也。而燕趙之秦者。皆以爭事秦。說其主。此臣之所大患也。燕昭王不行。蘇代

を適むる者は宋を以てすと曰ふ。此れ必ず言はしむる循環の如く、兵を用ふる刺豈の如し。母も制する能はず、舅も約する能はず。龍賈の戦、岸門の戦、封陵の戦、高商の戦、趙莊の戦、秦の殺す所、三晉の民數百萬。今其の生くる者皆秦に死したるの孤なり。西河の外、上雒の地、三川、晉國の禍、三晉の半なり。秦の禍此の如く其れ大なり。而るに燕趙の秦に之く者、皆以て秦に事へんことを争ひて、其の主に説く。此れ臣の大に患ふる所なりと。燕の昭王行かず。蘇代復び燕に重んぜらる。燕諸侯の從親を約せしむること蘇秦の時の如くす。或ひは從ひ、或は不らず。而して天下此より蘇氏の從約を宗とす。代厲皆壽を以て死し、名諸侯に顯はる。

● 賈むる ● 西河・上雒・三川は皆秦の併呑したる三晉の地にして、秦の加へたる禍によりて三晉の過半は亡失したるをいふ ● 昭王遂に秦に行くことをなまざ

復重於燕。燕使約諸侯。從親一如蘇秦時。或從或不。而天下由此宗蘇氏之從約。代厲皆以壽死。名顯諸侯。

太史公曰。蘇秦兄弟三人。皆游說諸侯。以顯其名。其術長於權變。而蘇秦被反間。以死。天下共笑之。諱學其術。然世言蘇秦多異。異時事有類之者。皆附之蘇秦。夫蘇秦起閭閻。連六國從親。此其智有過人者。吾故列其行事。次其時序。毋令獨蒙惡聲一焉。

太史公曰く、蘇秦兄弟三人、皆諸侯に游説し以て名を顯はす。其の術權變に長ず。而して蘇秦反間を被り以て死す。天下共に之を笑ひ、其の術を學ぶを諱む。然れども世に蘇秦を言ふ異なる多し。異時の事之に類する者あれば、皆之を蘇秦に附く。夫れ蘇秦は閭閻より起りて、六國の從親を連ぬ。此れ其の智人に過ぐる者あればなり。吾故に其の行事を列ね、其の時序を次で、獨り惡聲を蒙らしむる毋し。

● 權略、國際應變の謀計 ● 齊の大夫の爲めに反間の計にかゝりて殺さる ● 蘇秦をいふもの區々にして同多し ● 卑門、民間の意にいふ

卷七十

張儀列傳第十

張儀者魏人也。始嘗與蘇秦俱事鬼谷先生。學術。蘇秦自以不及張儀。張儀已學而游說諸侯。嘗從楚相飲。已而楚相亡璧。門下意張儀曰。儀貧無行。必此盜相君之璧。共執張儀。掠笞數百。不服。解

張儀は魏の人なり。始め嘗て蘇秦と俱に鬼谷先生に事へて術を學ぶ。蘇秦自ら以へらく、張儀に及ばずと。張儀已に學びて諸侯に游説す。嘗て楚の相に從ひて飲す。已にして楚の相璧を亡ふ。門下張儀を意して曰く、儀貧しうして行なし。必ず此れ相君の璧を盗みしならんと。共に張儀を執へて掠笞すること數百。服せず。之を解す。其の妻曰く、嘻、子書を讀み、游説すること毋くんば、安んぞ此の辱しめを得んやと。張儀其の妻に謂ひて曰く、吾が舌を視よ、尙ほ在りや、否やと。其の妻笑ひて曰く、舌在りと。儀曰く、足れりと。蘇秦已に趙王に説きて從親を相約するを得たり。然れども秦の諸侯を攻めて、約を敗り、後に負かしむるを恐れ、秦に用ひしむべき者莫きを念ふ。乃ち人をして微かに張儀

之。其妻曰。嘻。子毋讀書。游說。安得此辱乎。張儀謂其妻曰。視吾舌。尙在不。其妻笑曰。舌在也。儀曰。足矣。蘇秦已説趙王。而得相。約從親。然恐秦之攻諸侯。敗約。後負。念莫可。使用於秦者。乃使三人微感張儀。曰。子始與蘇秦善。今秦已當路。子何不往游。以求通子之願。張儀於是之趙。上謂求見蘇秦。蘇秦乃誡門下人。不爲通。又使不得去者數

を感ぜしめて曰く、子始め蘇秦と善し。今秦已に路に當る。子何ぞ往いて遊び以て子の願を通ずるを求めざると。張儀是に於て趙に之き、謁を上りて蘇秦に見えんことを求む。蘇秦乃ち門下の人を誡めて爲めに通せしめず。又去るを得ざらしむるもの數日。已にして之を見る。之を堂下に坐せしめ、僕妾の食を賜ふ。因つて數々之を讓めて曰く、子の材能を以てして乃ち自ら困辱此に至らしむ。吾寧ろ言ひて子を富貴にする能はざらんや。子收むるに足らざるなりと。謝して之を去らしむ。張儀の來るや、自ら以へらく故人なりと。益を求めて反つて辱しめらる。怒る。念ふに諸侯事ふべきもの莫し。獨り秦のみ能く趙を苦しめんと。乃ち遂に秦に入る。

- 王謂、老子の道を學び、清溪の鬼谷に隱る、鬼谷先生と號す
- 意に疑を拂む
- 苦めて將問す
- 釋す
- 蘇秦從約の長となり、六國の相印を假べるをいふ
- 名刺
- 責むるなり

日。已而見之。坐之堂下。賜僕妾之食。因而數讓之。曰。以子之材能。乃自令困辱至此。吾寧不能言。而當貴子。子不足收也。謝去之。張儀之來也。自以爲故人。求益。反見辱。怒。念諸侯莫可事。獨秦能苦趙。乃遂入秦。

蘇秦已而告其舍人曰。張儀天下賢士。吾殆弗如也。今吾幸先用。而能用秦柄者。獨張儀可耳。然貧無因。以進吾恐其樂小利而不遂。故召辱之。以激其意。子乃言趙王。發金幣車馬。使人微隨張儀。與同宿舍。稍

蘇秦已にして其の舍人に告げて曰く、張儀は天下の賢士なり。吾殆んど如かざるなり。今吾幸に先に用ひらる。而して能く秦の柄を用ふる者は獨り張儀可なるのみ。然れども、貧しくして因りて以て進む無し。吾其の小利を樂しんで遂げざるを恐る。故に召して之を辱しめ、以て其の意を激す。子我が爲めに陰かに之を奉ぜよと。乃ち趙王に言ひて金幣車馬を發し、人をして微かに張儀に隨ひて與に同じく舍に宿し、稍稍近づきて之に就かしむ。奉ずるに車馬金錢を以てし、用ひんと欲する所、爲めに給を取りて告げず。張儀遂に以て秦の惠王に見ゆるを得たり。惠王以て客卿と爲し、與に諸侯を伐たんことを謀る。蘇秦の舍人乃ち辭し去る。張儀曰く、子に頼りて顯はるゝを得たり。方に且に德に報いんとす。何の故にか去ると。舍人曰く、臣君を知るにあらず。君を知るは乃ち蘇君なり。蘇君、秦

稍近就之。奉以車馬金錢。所欲用爲取。給而弗告。張儀遂得三以見。秦惠王。惠王以爲客卿。與謀伐諸侯。蘇秦之舍人乃辭去。張儀曰。頼子得顯。方且報德。何故去也。舍人曰。臣非知君。知君乃蘇君。蘇君憂秦伐趙。敗從約。以爲非君莫能得秦柄。故感怒君。使臣陰奉三給君資。盡蘇君之計謀。今君已用。請歸報。張儀曰。嗟乎。此吾在術中。而不悟。吾不及蘇君明矣。吾又新用。安能謀趙乎。爲吾謝蘇君。蘇君之時。儀何敢言。且蘇君在。儀寧渠能乎。

趙を伐ちて從約を敗らんことを憂ふ。以爲らく君にあらずんば能く秦の柄を得る莫しと。故に君を感怒せしめ、臣をして陰かに君に資を奉給せしむ。盡く蘇君の計謀なり。今君已に用ひらる。請ふ、歸り報せんと。張儀曰く、嗟乎此れ吾術中に在りて悟らず。吾蘇君に及ばざること明かなり。吾又新に用ひらる。安んぞ能く趙を謀らんや。吾が爲めに蘇君に謝せよ。蘇君の時、儀何ぞ敢へて言はん。且つ蘇君在らば、儀寧ろ渠ぞ能くせんやと。

● 家の人。從者をいふ ● 秦に相となりて權柄を執る者 ● 奉給す

張儀既相秦。爲文檄告楚。相曰。始吾從

張儀既に秦に相たり。文檄を爲りて楚の相に告げて曰く、始め吾若に從ひて飲す。我壁を盜まざるに若我を答てり。若善く汝の國を守れ。我願つて且に



若飲。我不盜。而璧若答我。若善守汝國。我願且盜。而城直蜀相攻。擊各來告。急於秦。秦惠王欲發兵以伐。蜀以爲道險狹難至。而韓又來侵秦。秦惠王欲先伐。韓後伐。蜀恐。不利。欲先伐。蜀。恐。韓。秦。之敵。猶。豫。未。能。決。司。馬。錯。與。張。儀。爭。論。於。惠。王。之。前。司。馬。錯。欲。伐。

而の城を盗まんとすと。直蜀相攻撃す。各々來りて急を秦に告ぐ。秦の惠王兵を發し以て蜀を伐たんと欲し、以爲らく道險狹にして至り難しと。而して韓又來りて秦を侵す。秦の惠王先づ韓を伐ち後蜀を伐たんと欲すれども利ならざるを恐る。先づ蜀を伐たんと欲すれば、韓秦の敵を襲はんことを恐る。猶豫して未だ決する能はず。司馬錯張儀と惠王の前に爭論す。司馬錯蜀を伐たんと欲す。張儀曰く、韓を伐つに如かずと。王曰く、請ふ、其の説を聞かんと。儀曰く、魏に親しみ、楚に善くし、兵を三川に下し、斜谷の口を塞ぎ、屯留の道に當らば、魏南陽を絶ち、楚南鄭に臨み、秦新城宜陽を攻め、以て二周の郊に臨み、周王の罪を誅め、楚魏の地を侵さば、周自ら救ふ能はざるを知り、九鼎寶器必ず出でん。九鼎に據り、圖籍を案じ、天子を挟み以て天下に令せば、天下敢て聽かざる莫からん。此れ王業なり。今夫れ蜀は西僻の國にして戎翟の倫なり。兵を敵らし、衆を勞するも、以て名を成すに足らず、其の地を得るも以て利と爲すに足らず。

蜀。張儀曰。不。如。伐。韓。王。曰。請。開。其。說。儀。曰。親。魏。善。楚。下。兵。三。川。塞。斜。谷。之。口。當。屯。留。之。道。魏。絕。南。陽。楚。臨。南。鄭。秦。攻。新。城。宜。陽。以。臨。周。之。郊。誅。楚。魏。之。地。周。自。知。不。能。救。九。鼎。寶。器。必。出。據。二。九。鼎。案。圖。籍。挾。天。子。以。令。於。天。下。天。下。莫。敢。不。聽。此。王。業。也。今。夫。蜀。西。僻。之。國。而。戎。翟。之。倫。也。敵。兵。勞。衆。不。足。以。成。名。得。其。地。不。足。以。爲。利。臣。聞。爭。名。者。於。朝。爭。利。者。於。市。今。三。川。周。室。天。下。之。朝。市。也。而。王。不。爭。焉。願。爭。於。戎。翟。去。王。業。遠。矣。

臣聞く、名を争ふ者は朝に於てし、利を争ふ者は市に於てすと。今三川周室は天下の朝市なり。而るに王争はずして、願つて戎翟に争ふは、王業を去ること遠しと。

● 封をたさざるふれ状。魏は魏の文書、古昔は尺二寸の木簡を用ひき ● 魏の名より轉じて眞疑し、決せざるにいふ ● 禹の時九州より金を貢せしめて歸たる期。夏殷周傳へて國の寶器とす ● 天子の記録帳簿 ● 戎狄

司馬錯曰。不。然。臣。聞。之。欲。富。國。者。務。廣。其。地。欲。彊。兵。者。務。富。其。民。欲。王。者。務。博。

司馬錯曰く、然らず。臣之を聞く、國を富さんと欲する者は、其の地を廣めんことを務む。兵を彊くせんと欲する者は、其の民を富さんことを務む。王たらんと欲する者は、其の徳を博くせんことを務む。三資備つて王之に隨ふと。今王の

其德。三資者備。而王隨之矣。今王地小民貧。故臣願先從事於易。夫蜀西僻之國也。而戎翟之長也。有桀紂之亂。以秦攻之。譬如使豺狼逐羣羊。得其地。足以廣國。取其財。足以富民。繕兵不傷衆。而彼已服焉。拔一國而天下不以爲暴。利盡四海而天下不以爲貪。

地小にして民貧し。故に臣願はくは、先づ事に易きに從はん。夫れ蜀は西僻の國なり。而して戎翟の長なり。桀紂の亂有り、秦を以て之を攻む。譬ふれば、豺狼をして羣羊を逐はしむるが如し。其の地を得れば、以て國を廣むるに足り、其の財を取れば、以て民を富すに足る。兵を繕むるのみにして衆を傷らすして彼已に服せん。一國を抜くも天下以て暴となさず、利西海を盡くすも、天下以て貪となさず。是れ我一舉にして名實附くなり。而して又暴を禁じ、亂を止むるの名有り。今韓を攻め、天子を劫かさば、惡名なり。而して未だ必ずしも利あらず、又不義の名有り。而して天下の欲せざる所を攻むるは危し。臣請ふ其の故を論ぜん。周は天下の宗室なり。齊は韓の與國なり。周自ら九鼎を失ふを知り、韓自ら三川を亡ふを知る。將に二國力を并せ、謀を合せ、以て齊趙に因りて解を楚魏に求めんとし、鼎を以て楚に與へ、地を以て魏に與ふるも、王止むること能はざるなり。此れ臣の危しと謂ふ所なり。蜀を伐つての完きに如かずと。惠王

是我一舉而名實附也。而又有禁暴止亂之名。今攻韓劫天子。惡名也。而未必利也。又有不義之名。而攻天下所不欲

曰く、善し、寡人請ふ、子に聽かんと。卒に兵を起して蜀を伐つ。十月之を取る。遂に蜀を定め、蜀王を貶し、更め號して侯となして、陳莊をして蜀に相たらしむ。

● 治め備ふ ● 西海は蜀をいふ。海は珍産聚り生ずる所の義。一説、海は僻なり、西夷僻無知なり、故に海といふ ● 名は其の徳を博くするをいひ、實は土地財寶を得るをいふ ● 論は告なり、陳なり。伐つべからざるの理由を陳べんとする ● 秦の攻めに對し教を楚魏に求めんとするの意

天下所不欲危矣。臣請論其故。周天下之宗室也。齊韓之與國也。周自知失九鼎。韓自知亡三川。將以二國并力合謀。以因乎齊趙。而求解乎楚魏。以鼎與楚。以地與魏。王弗能止也。此臣之所謂危也。不如伐蜀。蜀完。惠王曰。善。寡人請聽子。卒起兵伐蜀。十月取之。遂定蜀。貶蜀王。更號爲侯。而使陳莊相蜀。

蜀既屬秦。秦以益張。富厚輕諸侯。秦惠王十年。使公子華與張儀圍蒲陽。降之。

蜀既に秦に屬す。秦以て益々強く、富厚にして諸侯を輕んず。秦の惠王の十年、公子華をして張儀と蒲陽を圍ましめて之を降す。儀因りて秦に言ひて復魏に與へて公子繇をして魏に質たらしむ。儀因りて魏王に説きて曰く、秦王の魏を遇す

儀因言秦復與魏而使三公子繇質於魏。儀因說魏王曰。秦王之遇魏甚厚。魏不可入。上郡少梁。謝秦惠王。惠王乃以張儀爲相。更二名少梁。曰夏陽。儀相秦四歲。立惠王爲王。居一歲。爲秦將。取陝。築上郡塞。其後二年。使與齊楚之相會。蓄桑東。還而免相。

ること甚だ厚し。魏以て禮無かる可からずと。魏因りて、上郡少梁を入れて秦の惠王に謝す。惠王乃ち張儀を以て相となし、少梁を更め名づけて夏陽と曰ふ。儀秦に相たること四歲。惠王を立てて王となす。居ること一歲、秦の將となりて陝を取り、上郡の塞を築く。其後二年、使して齊楚の相と蓄桑の東に會す。還りて相を免じ、魏に相として以て秦の爲めにす。魏をして先づ秦に事へて諸侯をして之に效はしめんと欲す。魏王儀に聽くことを肯せず。秦王怒り、伐ちて魏の曲沃平周を取る。復陰かに張儀に厚くすること益々甚し。張儀慙ぢ、以て歸り報する無し。魏に留まること四歲にして、魏の襄王卒す。哀王立つ。張儀復た哀王に説く。哀王聽かず。是に於て張儀陰かに秦をして魏を伐たしむ。魏秦と戦ひて敗る。明年齊又來りて魏を觀津に敗る。秦復た魏を攻めんと欲す。先づ韓の申差の軍を敗り、首を斬ること八萬、諸侯震恐す。而して張儀復た魏王に説きて曰く、魏は地方千里に至らず、卒三十萬に過ぎず、地四平、

相魏以爲秦。欲令魏先事秦而諸侯效之。魏王不肯聽儀。秦王怒。伐取魏之曲沃平周。復陰厚張儀。益甚。張儀慙無以歸報。留魏四歲。而魏襄王卒。哀王立。張儀復說哀王。哀王不聽。於是張儀陰令秦伐魏。魏與秦戰敗。明年齊又來敗魏於觀津。秦復欲攻魏。先敗韓。申差軍斬首八萬。諸侯震恐。而張儀復說魏王曰。魏地方不至千里。卒不過三十萬。地四平。諸侯四通。輻湊。無名山大川之限。從鄭至梁。二百餘里。車馳人走。不待力而至。梁南與楚境。西與韓境。北與趙境。東與齊境。卒戍四方。守亭障者不下二十萬。梁之地勢固戰場也。梁南與楚而不與齊。則齊攻其東。東與齊而不與趙。則趙攻其北。不合同於韓。則韓攻其西。不親於楚。則楚攻其南。此所謂四分五裂之道也。

諸侯四通。輻湊。名山大川の限無く、鄭より梁に至る二百餘里、車馳せ、人走り、力を待たずして至る。梁は南楚と境し、西は韓と境し、北は趙と境し、東は齊と境し、卒四方を戍り、亭障を守る者十萬を下らず。梁の地勢固と戰場なり。梁南楚に與して齊に與せざれば、則ち齊其の東を攻めん。東齊に與して趙に與せざれば、則ち趙其の北を攻めん。韓に合せざれば、則ち韓其の西に攻めん。楚に親しまざれば、楚其の南を攻めん。此れ所謂四分五裂の道なり。

● とりて、懸壁をいふ

且夫諸侯之從爲者、將以て社稷を安んじ、主を尊び、兵を彊くし、

爲從者。將以安社稷。一尊主。強兵。顯名也。今從者一二天下。約爲昆弟。刑白馬。以盟。涇水之上。以相堅也。而親昆弟同父母。尙有爭錢財。而欲恃詐。僞反。覆蘇秦之餘謀。其不可成。亦明矣。大王不事秦。秦下兵攻河外。據卷。衝酸。劫衛。取陽晉。則趙不南。趙不南。則梁不

名を顯はさんとするなり。今從者天下を一にし、約して昆弟となり、白馬を刑し、以て涇水の上に盟ひ、以て相堅くす。而れども親昆弟・同父母すら尙ほ錢財を爭ふあり。而るに詐僞反覆の蘇秦の餘謀を恃まんと欲す。其の成る可からざること亦明かなり。大王秦に事へずんば、秦兵を下して河外を攻めん。卷・衝・酸・叢に據り、衛を劫かし、陽晉を取らば、則ち趙南せざらん。趙南せざれば則ち梁北せず。梁北せざれば則ち從道絶えん。從道絶ゆれば、則ち大王の國危き母からんと欲するも得べからざるなり。秦韓を折りて梁を攻めん。韓秦を怯れ、秦韓一とならば、梁の亡びんこと立ちて須つ可きなり。此れ臣の大王の爲めに患ふる所なり。大王の爲めに計るに、秦に事ふるに如く莫し。秦に事へば、則ち楚韓必ず敢て動かざらん。楚韓の患無くんば、則ち大王枕を高くして臥し、國必ず憂無からん。且つ夫れ秦の弱くせんと欲する所は楚に如く莫く、而して能く楚を弱くする者は、梁に如くなし。楚富大の名有りと雖も、而も實は空虚なり。其の卒多しと雖

北。梁不北。則從道絶。從道絶。則大王之國欲毋危。不可得也。秦折韓而攻梁。韓怯於秦。秦韓爲一。梁之亡。可立而須也。此臣之所爲也。大王患也。爲大王計。莫如事秦。事秦則楚韓必不敢動。無楚韓之患。則大王高枕而臥。國必無憂矣。且夫秦之所欲弱莫如楚。而能

も、然れども輕くしく走り、北け易くして堅く戰ふ能はず。梁の兵を悉し、南面して楚を伐たば之に勝たんこと必せり。楚を割きて梁に益し、楚を虧きて秦に適す。禍を嫁して國を安んず。此れ善事なり。大王臣に聽かずして、秦甲士を下して東伐せば、秦に事へんと欲すと雖も得べからざらん。且つ夫れ從人は多く辭を奮つて信すべき少し。一諸侯に説きて封侯を成す。是の故に天下の游談の士、日夜腕を搯し、目を瞋らし、齒を切し、以て從の便を言ひ、以て人主に説かざる莫し。人主其の辯を賢として其の説に牽かる。豈に眩する無きを得んや。臣之を聞く、積羽舟を沈め、羣輕軸を折り、衆口金を鏢かし、積毀骨を銷すと。故に願くは大王計議を審定せよ。且つ骸骨を賜ひ、魏を辟けんと。哀王是に於て乃ち從約に倍いて儀に因りて成を秦に請ふ。

- 合従の論者。衛を對する語
- 白馬を斬り血を以て盟をなす
- 秦より河外といへば、卷・衝・酸・叢の地をさす
- 殿同策折を挾に作る
- 秦の意に適す
- 扼腕、腕を握る、腕を捉へ持つ
- 羽毛の如き軽きもの多く堆積すれば舟も沈む。輕きものも多く積載すれば車軸も折る
- 多人の口にか、れば遂に金をも鏢かず毀